

世田谷文学館

収蔵資料

調査と探究

01

石川淳

椎名麟三

「上巻」

目次

翻刻で甦る声、時代

亀山郁夫

4

資料写真

石川淳日記

〈昭和25年1月1日―昭和26年12月31日〉

9

椎名麟三講演メモ ①

13

戦後派文学と世田谷

18

紅野謙介

「石川淳日記」

一九五〇・一九五一年分について

24

山口俊雄

資料翻刻1

石川淳日記

〈昭和25年1月1日―昭和26年12月31日〉

35

資料翻刻2

椎名麟三講演メモ ①

75

石川淳／椎名麟三 主な収蔵資料一覧

109

# 翻刻で甦る声、時代

亀山郁夫

石川淳「日記」及び椎名鱗三の「講演メモ」の翻刻をここにお届

けする。翻刻の出版は、本文学館が立ち上げる新事業の一つであり、今後、この方向性を維持しつつ、本館の持てる可能性を将来の日本文学研究に役立てるべく大事に育てていきたい考えである。

石川淳をめぐる私の記憶は、学園紛争の嵐が吹き荒れる一九六〇年代の終りにまで遡る。その名は、全共闘シンパサイザーにとっては頼もしい支えとなったが、私のようなノンポリ学生の中には、いささか胡乱な、煙たい存在と映じた。当時、そうした石川の思想性を如実に示す作品として『天馬賦』（一九六九）が話題を呼んでいた。だが、そこに描かれた「学生運動」の型破りなパロディのみならず、石川の、和洋漢に通じる知性のありやそのものが、激動する時代の空気にどこかなじまないという雑駁な印象を私は抱いていた。もともと当時、私自身、アンドレ・ジッドという、周囲の友人からはほとんど一顧もされることのない作家に熱中していただけに、かりに日本におけるジッドの草分け的な紹介者ということについていくばくかの知識があったならば、先に述べたような石川の印象はかなり違ったものになっていたかもしれない。それから瞬く間に二十年が過ぎ、大学のゼミでいちど『焼跡のイエス』を取り上げる機会があったが、とくにこれといった感慨を覚えることもなく、そのままさらに二十五年の月日が流れた。そして今回、本文学館が所蔵する「日記」が翻刻されるのを機に再挑戦を決意し、改めて手にとった作品が『紫苑物語』

だった。

和漢洋とりまぜての豪勢な食事にも似た、幸福なひと時を味わうことができた。微妙なリズムの変化をはらんだ擬古文による語り、山岸涼子を彷彿させるロマネスクの美の世界を現出している。何より、現代人の心にも深く通底するニヒルな死生観に胸を衝かれた。

だが、石川の数ある小説からまさきに『紫苑物語』を選んだ理由は、別にあった。昨年九月に急逝した作曲家、西村朗氏とのつかの間の語りである。ある新聞社の企画による同氏との対談の席上、西村氏が最近、指揮者の大野和士と組んで、『紫苑物語』のオペラ化を実現させたことを知った（新国立劇場）。後日送られてきたDVDを貪るように鑑賞しながら、私はとても誇らしい気持ちになった。西村氏の、鮮烈でかつドラマティックな音楽作りも文句なしのオリジナリティである。しかしそれに負けず劣らず奥深い内容をもつオペラの素材が日本にもある！

## 2

石川淳「日記」は、大学ノートを縦に見開きにし、罫線に沿って書き記されている。「書は体を表す」とは、このことを言うのだろうか。読者はまず、石川のペン書きの流れるような美しさに、江戸っ子らしい粹と潔さ、そして繊細優雅の限りを見てとるにち

がない。

時代は、昭和二十五年元旦から翌年大晦日までの二年間。この時期、日本社会は、折からの朝鮮戦争による特需景気に沸き立ち、戦後の混乱を脱して、高度成長期の前触れを予感させる一種独特の明るさに包まれていた。すでに五十代に足を踏み入れた石川は、雑誌「新潮」に『夷齋筆談』を連載中であり、心身ともに充実の境地にあったことがペン書きの筆勢からも窺える。

「余性疎懶いまだ死の近づけることをおぼえず茫茫然として白昼の夢にふける 笑ふべきのみ」(昭和二十五年九月三日)

今回、翻刻を手にし、第一に興味をそそられたのは、何より石川の交友の広さである。チェスに例えるなら、キング格の三好達治、小林秀雄から、ルーク格の大岡昇平、ビショップ格の三島由紀夫、安部公房にいたるまで、詩人、作家、批評家、編集者らが盤上に浮かんで消えていく。まさに壮観というしかない。しかしその壮観も、小料理屋「はせ川」やクラブで顔を合わせる文壇人に限られることはなかった。二十歳代の若さで、アナトール・フランスやアンドレ・ジイドの翻訳者となった石川だが、職業作家として自立したのちも世界の文学に対する関心が止み途絶えることはなかった。「日記」では、ジャン・コクトー(『演劇』、アルベール・カミュ(『ペスト』『シジフォスの神話』)、J・P・サルトル(『シチュアシオン』)、ポール・ヴァレリー(『芸術論』)、ポール・クロデル(『眼は聴く』)、モーリス・ブランショ(『死の宣告』)らの巨

らいに紛れて、忘却されていたということだろうか。

本「翻刻」を手にした読者は、石川の酒癖に例外なく気をもまされるはめに陥る。執筆にあてる時間をどこに見出していたのか、と老婆心ながらも心配になるほどである。深酒への嫌悪に時として胸がうずくことがあったのか、「連夜の酒に疲れたり」「大酔戒しむべし 帽子をどこかに落としたり」「わが生活のみだれわれながら目もあてられず」などの自嘲が散見される。そうはいえ、銀座「はせ川」での出会い、語らいこそは、彼の作家としてのエネルギー源の一つだったことにおそらくまちがいはなく、「生活のみだれ」という自戒は、それこそヴォアイアン石川の好奇心の産物でもあったのだろう。端正なペン書きの文字は、いざれこの日記が他者の目に触れるときを作家が覚悟していたことを物語っているが、彼自身は何ひとつ怖れるふうもなく、交友にまつわる私的な(時として若干危険な)事実を淡々と書き記している。ストリップショー見物やトルコ風呂の経験についての記述にも曲がったこだわりはなく、事実に対してどこまでもドライであろうとする無頼派作家らしい潔さがそこに見てとれる。思うに、その誠実さは、昭和二十六年大晦日の記録がよく示すところでもあった。「かへりみるに諸事力をつくすこと十分ならざりしもの多し 売文の毒おそるべし 意あまつて才足らずることをかなしむ」

匠たちに交じって、メルヴィル(『白鯨』)、フォークナー(『サンクチュアリ』)らアメリカ人作家の名前も見え隠れする。また、当時彼が目にしたハリウッド映画(『イヴの総て』『レベッカ』『白い恐怖』)も興味深く、彼の作品やエッセーの背景を知る上で貴重な情報をもたらしてくれる。

昭和二十五年といえば、太宰治の死が、いまだ人々の心に濃い影を落としていた時期でもある。なんだか酒席をともにした太宰への思いは深く(エッセー「太宰治昇天」)、六月に三鷹禅林寺で催された第二回目の桜桃忌にかんする短い記述が目を引く。太宰の妻、津島美知子からは、形見分けとして結城紬のネクタイをプレゼントされた。こうして大小の作家、詩人、批評家、編集者らとの交友から浮かびあがるのは、狷介孤高という一般の印象とは異なる、江戸っ子ならではの石川の親分気質、人情の篤さである。

同時代の西欧の音楽に対する好奇心も注意を引く。東京っ子としての特権を余すところなく享受する石川の姿がそこにある。当時、日本のピアノ教育界にも一定の影響を与えたユダヤ人ピアニスト、ラザール・レヴィ、戦後初の大物演奏家の来日として話題を呼んだ、ユードイ・メニューヒンによる伝説的な演奏会への言及は、石川の研究者、一般の愛読者にとっても得難いディテールではないだろうか。ただし惜しむらくは、これらの演奏会に関する印象なり、コメントなりが総じて淡泊なことである(「ただ日響オーケストラの拙なるを憾む」。多くは演奏会後の酒席での語

### 3

椎名鱗三の講演メモについてもひと言述べておこう。

椎名は、石川と同じく大学ノートを縦に使用し、罫線上に鉛筆で彫り込むように書き込んでいった。石川とまさに好一對をなす原稿とあってよい。「講演メモ」としてタイトルが付されているのは、五編(「戦後文学の意味」「文学する心」「自由と倫理」「人間の自由について」「作家と生活」)、その他、タイトルのない「講演メモ」が十編収録されている。年月日はそのほとんどが不詳であり、それらの空白は将来の椎名研究が埋めてくれることを期待する。

さて、計十五の講演メモのなかで私がとくに注目したのが、「自由と倫理」である。椎名はどの講演でも、みずからの苦難に満ちた来し方を外連味なく語っているが、そうしてみずからの過去を語りつぐなかでつねに念頭にあったのが、「真の自由とは何か」の問題だった。「自由」をめぐる議論は、時として堂々めぐりの観を呈することもあったが、最晩年の『懲役人の告発』において、彼なりに結論に辿りついたと私は考えている。そして、今回、「自由と倫理」の講演メモを手にし、私の理解に大きな誤りがなかったことを確信することができた。講演メモ「1. 泥棒の話」で椎名は、ドストエフスキーが『白痴』のなかで言及したロシアのとある田舎町の事件に触れている。旅仲間の一人が相手の所持す

資料写真  
石川淳日記

昭和25年1月1日  
昭和26年12月31日



本日記が書かれたころ、高輪の石川邸にて安部公房と。撮影：沼野謙

る時計に目をつけ、十字を切り、祈りを唱えてから相手を殺し、時計を強奪した実話である。椎名は講演で、この「泥棒」をわが身に重ね、驚くべき告白を行った。

「十字を切つて泥棒をしたという彼の行為は、矛盾でありましよう。しかし私は、この彼が大好きなのであります。この彼が、十字架の前でふるえながら罪をおかしつづけている人間という存在のイメージが鮮烈な姿で描かれているという点においてでなく、この泥棒は、ほかならぬ私自身でもあるということなのであります」(傍点筆者)

「人間の自由というものは、罪である仕方ですか、もつことができないということができると思います。つまり人間の自由は、罪である。しかし私は、この罪であるところの人間の自由はどこまでも同意をあたえ、心から愛したいというのが、私のキリスト者の、文学者としての立場なのであります」

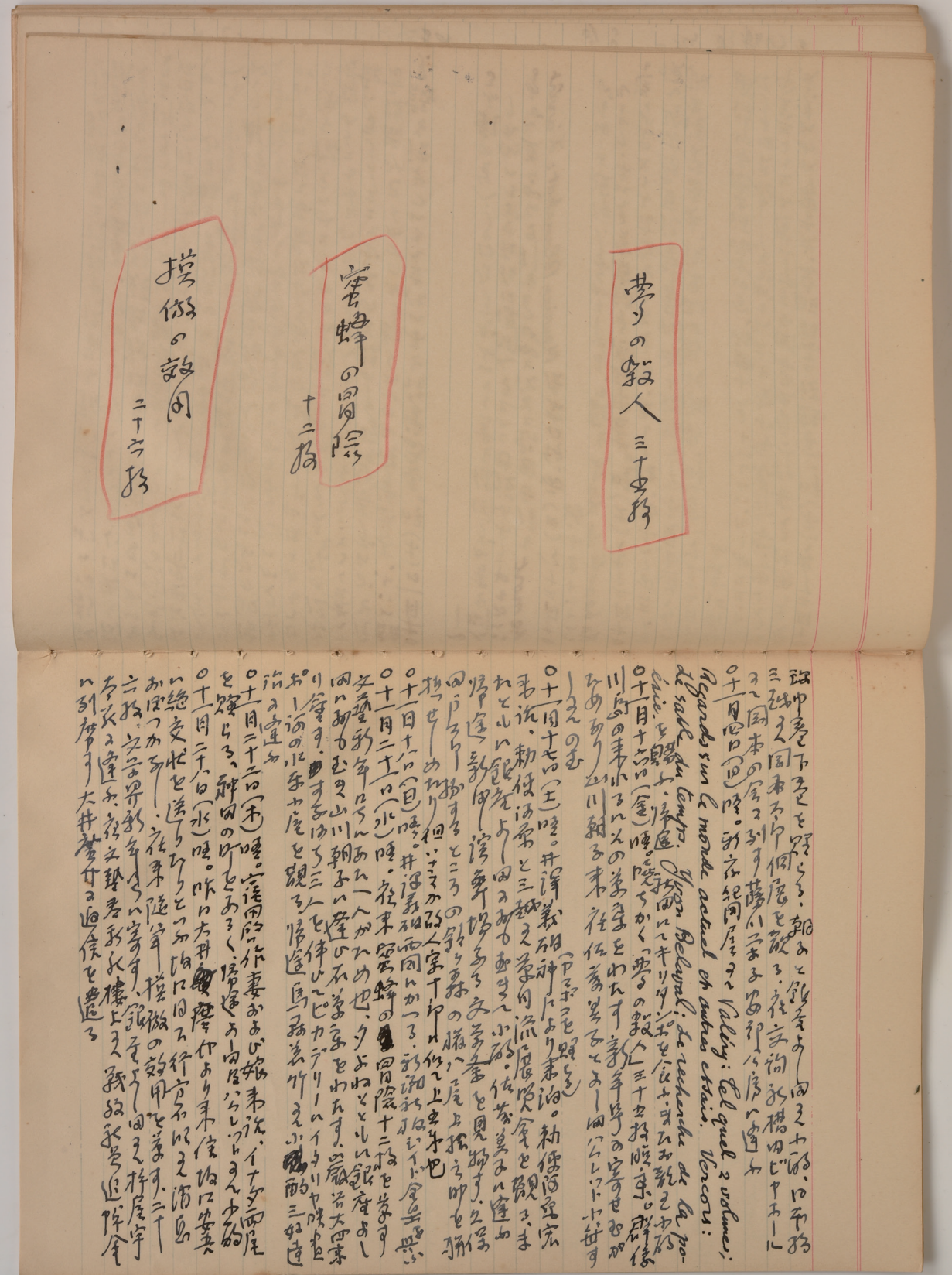
この二つの引用には、作家椎名の重要な告白が隠されている、と一言述べておく。『懲役人の告発』についても言えることだが、「自由と倫理」、いや、自由と禁忌の境界線を歩む作家の隠された内面が吐露されているということである。その意味で椎名は、広く一般的な意味でのキリスト者というより、親鸞の悪人正機説すら想起させるドストエフスキの、いつてみれば、罪の宗教とでもいうべき思想の殉教者だった。自由を否定し、自由を肯定する、その曖昧さのうちに自由の奥義はある、と椎名は訴えたかったのではないか。この「講演メモ」は、講演という、開かれた、対話的場に臨んで、より説得的であろうとした椎名が、思いもかけずみずからの内面に隠された「自由」の意味に遭遇した稀なる機会だったと見ていい。少なくとも私にとって、講演メモの翻刻が持つ意味はここにきわまる、といっても過言ではない。

(世田谷文学館館長・ロシア文学者)





上 1955年11月26日、国学院大学での講演風景（本誌掲載の講演メモ「戦後文学の意味」と同講演かは不明）  
 下 1955年11月12日、法政大学での講演風景



文学する心

私は、中學校でお話したのは、はじめのことで、...

椎名麟三 講演メモ「文学する心」(1枚目)

文学する心

文学する心は、日取初、ころころ、日本地と云ふ...

椎名麟三 講演メモ「文学する心」(4枚目)

戦後文学の意味

- 一、戦後文学の定義
二、戦後文学の歴史
三、戦後文学の動向
四、戦後文学の意義
五、戦後文学の展望

椎名麟三 講演メモ「戦後文学の意味」

自由と倫理 (第一日)

私は、杉原助之助の依頼によつて、この修養会の講演を引受けたいのでありますが、...

椎名麟三 講演メモ「自由と倫理(第一日)」(1枚目)





# 戦後派文学と世田谷

紅野謙介

コロナ禍がまだ始まったばかりの二〇二〇年一月、坪内祐三はまだ六二歳で急逝した。その遺作『玉電松原物語』（新潮社）が出たのが同年一〇月。雑誌「東京人」で長く編集者をつとめた坪内の最後の著作が自分の住んだ世田谷と玉電（いまの東急世田谷線）をめぐるエッセイとなった。軽妙な語りと圭角ある批評の鋭さで多くの読者を得ていただけに惜しい気もしたが、「私」を決して手放さなかった辛口のエッセイストの、自分を生んだ身の回りの商店街や街角、風物、そこで手に入れた本や雑誌や、人や食べものとの出会いを懐かしげに語る文章に、心なごむものがあった。

そうか、坪内祐三は玉電松原駅周辺で育ったのか。勤め先の大学がすぐ近くであったから、高級住宅街のように見られ、また最近はそのように売り出してもいるが、思いのほか中途半端に古

い、でも美味しい肉屋や豆腐屋が点在し、なかなかどうして流行に一歩出遅れた心地よさがあった。その象徴が東急世田谷線で、車両はわずか二両。このところの私鉄のようにやたら車両が長いわけがなく、踏切を待たずにすむのも便利だったし、電車と住宅の距離の近さも楽しくて、何度も世田谷線の沿線駅を降り降りして、周辺を散策した。

坪内祐三は、戦後派のなかでも思想や政治を男性の言葉で語る作家たちは好きではなかったろうが、つむじ曲がりのアナキストには親近感を抱いたに違いない。

戦後派というカテゴリーをどう定義するかはなかなかむずかしい。戦前のマルクス主義運動を経験し、いったん転向の傷痕を負ったものたちと定義すると、野間宏、椎名麟三らは第一次戦後

派と呼ばれ、党派との距離がつねに意識のなかにあった。雑誌「近代文学」に依った荒正人、埴谷雄高、平野謙、本多秋五、佐々木基一、小田切秀雄らもそこに含まれる。ただ、マルクス主義から切り離して、戦争を通して死に直面した実存的経験を中心にしてより芸術的なアヴァンギャルドを目指したとすると、中村真一郎、福永武彦、加藤周一から、大岡昇平、武田泰淳、堀田善衛、安部公房らが加わってくる。祖国を喪失し、世界が崩れ落ちる瞬間を目の当たりにしたものたちには、どこか荒涼とした穴がぼっかりと心身にあいていたことだろう。それは戦前から活躍していた太宰治、坂口安吾や織田作之助、石川淳らにも共通していた。

彼らもまた、世田谷区を中心に東京の西部地域に居をかまえたものが多かった。椎名麟三は世田谷区松原であるし、平野謙は喜多見である。中村真一郎も五〇年代には世田谷在住であり、加藤周一も一貫して上野毛に住んでいた。大岡昇平は『成城だより』と題した、文学・映画・音楽など同時代の文化をめぐる鋭い批評を展開した日記の著作まである。梅崎春生はやはり松原に住んだのち練馬へ、埴谷雄高は吉祥寺、荒正人や佐々木基一は杉並在住であった。こうした戦後派作家と付き合いが長く、その継承者を任じていた井上光晴は桜上水団地に住んでいた。先日亡くなった成城在住の大江健三郎も初期は戦後文学にこだわっていた。

大空襲によって、東京東部はもともひどく、新宿、渋谷も焼かれている。世田谷区も明治半ばから三宿、太子堂周辺に軍施設

が増加するにしたがい、空爆の対象とされ、世田谷区役所庁舎を焼失するのだが、それにしても東京の下町や山手地域に比べれば被害が少なかったと言えるだろう。中央線や京王線、小田急線、そして玉電が整備されるにつれて、東京中央とのほどよい距離が多くの住民を集め、そこに文学者もふくまれていたのである。

兵庫県姫路の出身である椎名麟三は、早くに両親の自殺、家族離散という厳しい生い立ちのなか、旧制姫路中学を中退して、職を転々とした。ようやく勤めた宇治川電気の鉄道事業部門（現在の山陽電気鉄道）で、一九二九（昭和四）年から三年ほどは車掌をつとめていたという。『深夜の酒宴』や『永遠なる序章』の作家が制服制帽に身を包み、「次は須磨寺」、次は須磨寺でございませ」とアナウンスしたり、乗客の硬券切符に改札パンチを入れたりしていたと想像するのは楽しい。そうした手応えのある、ありふれた仕事の日々の一方で、労働組合を組織してストライキをはかり、警察につかまって拷問を受けたりすることが切れ目なく連続していた。獄中体験もあり、信じた思想も捨てることを誓約させられている。もともと自分を肯定しにくい環境に育ち、長じてふたたび人生の価値がすべて失われるような絶望的な経験をへて、いったいどうやって愛とか幸福とかを口にするのできるのか。椎名はそんなことをずっと考えていた作家である。宇治川時代の記憶があったからであろうか、椎名は玉電のすぐそばを散策することが多かった。椎名麟三といえ、通り過ぎる玉電を背景



三麟名椎 玉電の線路沿いで

に柵よりかかる写真がよく使われる。

石川淳もまた、一九四七（昭和二二）年に世田谷区北沢に住み、いったん港区芝高輪に移るものの、ふたたび杉並区清水町へ、そして最後は渋谷区初台に移り住んだ。今回、この年報に翻刻される日記についていえば、上巻の一九五〇（昭和二五）年から翌年にかけてのものは芝高輪時代にあたり、下巻の一九五二（昭和二七）年から五四年にかけては荻窪駅に近い杉並区清水町に移る前後に書かれたことになる。

明治・大正期の作家たちは、東京市内のかかなりの距離を歩き回っている。駿河台から本郷、千駄木をぬけて日暮里、南千住までぶらぶら歩きをするのは日常茶飯であるし、両国から品川まで足を伸ばすこともあった。市電と組み合わせれば、その行動半径はい

まの下町から山の手を広くカバーしたであろう。それが昭和期になって鉄道網が整備され、電車に乗っての往復が可能になり、郊外の範囲が西に拡大した。戦争は都市機能をいったん壊滅させたが、復興のプロセスのなかで都内の繁華街はより多極化し、住まいとの距離感を一変した。

こうした都市の変容のなかで、石川淳の日記を読むと、日々の動きが実にめまぐるしいものだとわかる。それはおそらく一九五〇年代にかかっていることもあるだろう。敗戦後すぐの混乱と無秩序は占領期の終わりとともに姿を変えていった。さつと眺めるだけで分かるように、この日記の大半は、同時代の作家やさまざまな出版社の編集者たちとの交流、原稿と原稿料、印税、前借のやりとり、そしてそのあいまをぬうように言及される酒場放浪記で占められている。

一九五〇（昭和二五）年六月にはこんな一節がある。

○六月二十二日（木）晴。文藝春秋新社の銀座五丁目に移転したるにつきその社屋を見に行く。文学界七月号を一閲するに篠船続稟の「二」「三」とあるべきところを恣意に「一」「二」と掲げかへたるを発見せり。すなはち抗議書を提出す。社員数名とはせ川におもむきまたノンシヤランに立寄りさらアヤをひきつれて三田に至つてのむ。連日昏酔わが生活もまた乱れたるかな。この日山形沢渡恒より桜桃一箱を贈らる。応酬ひらくより桜桃箱をこぼれたり。また太宰全集続刊の件に

つき津島美知子に書を遣る

文藝春秋社を創業した菊池寛は、戦後、公職追放に伴い、いったん社の解散を宣言する。これに対して佐々木茂索や池島信平ら社員有志が発起して一九四六（昭和二一）年六月に新たに株式会社文藝春秋新社を立ち上げた。一九六六（昭和四一）年に紀尾井町に本社を移し、「株式会社文藝春秋」に社名変更するまで、同社は「文藝春秋新社」と呼ばなければならぬ。その文藝春秋新社は「文藝春秋」「オール読物」「別冊文藝春秋」、そして文芸雑誌の「文学界」を発行して、この時期、順風満帆の勢いにある。銀座の新社屋を見学した石川に「社員数名」が同行し、「連日昏酔わが生活もまた乱れたるかな」という感慨を抱かせるまでに至る。戦中戦後を貫いてぶれなかった文学に、多くの読者は希望の星を見て、人生の深い部分にふれるものだと感じていた。出版社もまた商品価値という以上に、一本のペンだけで世界に立ち向かうものとしてもてなしたのである。

日記に登場する主な出版社をあげてみよう。文藝春秋新社はもちろんのこと、新潮社、作品社、月曜書房、小山書店、糸書房、目黒書店、河出書房、角川書店、六興出版社、講談社、筑摩書房、中央公論社など枚挙に暇がない。今はない出版社もあるが、戦後は出版文化が異様に開花した時期だったのである。厳しい情報統制に目をくらまされ、読みたいものも読めない暮らしを強いられたい人々は、活字に次の時代のヒントを探り、そこに戦後民主主義

の薫りをかごととしていた。フランス文学の翻訳者であり、江戸文学に造詣が深く、森鷗外や永井荷風の系譜を引きつぎながら、文学の前衛を走る石川淳は、太宰治、織田作之助が倒れ、坂口安吾が病を抱えるなかで、時代の中心に位置づけられることになる。戦後派作家がどうしても日本共産党との関係に腐心し、ふりまわされるなかで、もっと大きな視野をもつ石川の存在は読みたい作家であり、同時にともに酒を酌み交わして、談を交わしてみたい文学者だったのであろう。

その一方でこういう記事も日記には挟まれている。

○六月二十五日（日）晴。北鮮の兵隊三十八度線の堺を越えて南鮮に侵入す。いくさふたゝび来らんとす

かつての旧植民地であり、関わりも深かった朝鮮半島での争乱は、戦争の記憶がまだまだ色濃い日本にとって異様な緊張と不安を強いたにちがいない。「朝鮮のいくさいよいよ急ならんとす」（二十六日）、「今朝北鮮共産軍京城に攻め入つてこれを占領すつたふ」（二十七日）、「朝鮮の風雲益々急也。アメリカの海軍空軍出動す」（三十日）、「アメリカ兵朝鮮に上陸す。戦乱の機迫れるに似たり」（七月一日）。どこまで拡大し、飛び火するかわからない。かつて日本が侵略しようとして果たせず、内戦につぐ内戦をくりかえして永遠にまとまることはないと言われていた中国がその前年に中華人民共和国となって、世界史上、二番目の共産主義国家となった。その全貌は分からないながら、巨大な国が生まれ

変わって、新たな活力を生み出そうとしている。代理戦争の戦場となる隣の半島を意識しながら、ペンをふるい、酒を飲む日々がつづく。

だからこそ、新たな書き手は発掘されていかなければならない。安部公房や島尾敏雄に対する石川淳の友情は、ただ優しさのあらわれではなく、こうした書き手たちが次々と現れていくことにより、編集者を、読者を動かし、心を揺さぶっていかないかぎり、現実が変わっていかない。そういう信念があったからだろう。戦時下の、落ち着きのない日々をくぐりぬけた作家は、一喜一憂せず、不安にふりまわされずに過ごすスタイルを守る。石川淳の酒は現実を忘れるためのものではない。飲むほどに酔うほどに冴えていく。

たとえば一九五一（昭和二六）年にはこんな一日が出てくる。

○九月十五日（土）くもり小雨、午後東中野モナミにて近代文学社主催安部公房の受賞祝賀会に出席す、帰途薄暮におよんで佐々木基一野間宏岡本太郎とともに銀座はせ川におもむきまたよし田にて小酌、岡本酔つて佐佐木にからむ、新ばしにて三人に別れエスポールにおもむくにたまたま久保田万太郎林房雄に逢ひさらにハムレットにてのむ、ナポレオンの某女をつれて鳥森若竹にて小酌 車にて某女を赤坂までおくりて  
深夜帰宅

モナミは東中野駅西口に近い洋食レストランで結婚式場も兼ね

た店である。もともとは洋菓子店白十字の姉妹店として銀座に開業し、東中野に支店を出した。店の命名者は岡本かの子。だから、岡本太郎はこの常連であった。石川淳は安部公房の短篇集『壁』（月曜書房、一九五一年五月）に序文を寄せていた。その表題作『壁―S・カルマ氏の犯罪』（初出「近代文学」一九五一年二月）が同年七月、その年度上半期の芥川賞を受賞することになったのである。そこで雑誌「近代文学」に拠るものたちの祝賀会に参加したあと、今度はご一行をつれて、銀座おなじみの「はせ川」に繰り出した。そこから「よし田」、新橋の「エスポール」「ハムレット」「ナポレオン」、鳥森の「若竹」へと梯子酒とあいなった。新橋では旧世代の久保田万太郎と林房雄に遭遇しており、顔ぶれからするとまったく異質な文学者集団がニアミスをしているのもおかしい。

しかし、酔眼朦朧としているものは、このような正確な日記は残さない、残せもしない。推していた安部公房の受賞はうれしかったであろう。しかし、とはいえ、勝負はこれからだ。まだ二〇代の安部がどうなっていくのか、それを見守るしかない。そのときまわりにはどういう作家がいるのか。石川淳はこのときすでに五〇歳を超えている。ひとまわり下の世代の作家、評論家、アーティストを前に石川の眼は伏し目がちではありながら、じっと見つめていたにちがいない。日記の面白さはそうした想像をかきたててやまないところにある。

（日本近代文学研究者）

# 「石川淳日記」一九五〇・一九五一年分について

山口俊雄

このたび、世田谷文学館所蔵「石川淳日記」一九五〇・一九五一年の分が翻刻された。

一口に日記といってもいろいろなタイプがあるが、石川淳の場合、何（どんな小説・エッセイ）を書いたか、何（特にどんな書籍）を買ったか、誰が来訪したか、誰とどこ（特にどこの酒場）で会ったか、についての簡潔な記述が大半を占める。作品の執筆状況、脱稿の時期、編集者に手渡した時期などが書き込まれ、また、どここの店で誰々と飲んだという動静・他者との交流が書き込まれているわけであるが、これは作家という個人事業主としての営業活動に関わる必要不可欠な記録、備忘録と言って差し支えあるまい。

この基本的な情報（人名・作品名）の備忘録という性質が優先されているせいか、それらについての価値判断・評価の記載は少

ない。そしてまた、時事や風俗・巷間の出来事への言及もほとんどない。感想・思惟内容を丁寧に書き残すという役割を日記には担わせなかったようだ。

以下、拙稿では、(一) 洋書・古典籍にわたる書籍の購読状況、(二) 作家生活、他作家との交流、という大きく二つの面に着目して、「石川淳日記」の特徴をスケッチしてみよう。

## (一) 書籍の購入

### 洋書

作家である以上、書くために読まなければならない。とりわけ石川淳のようにブックシユな作家の場合、なおさらである。洋

書と古典籍については、購入した店、書名が具体的に記載されており、網羅性も高いと思われる。

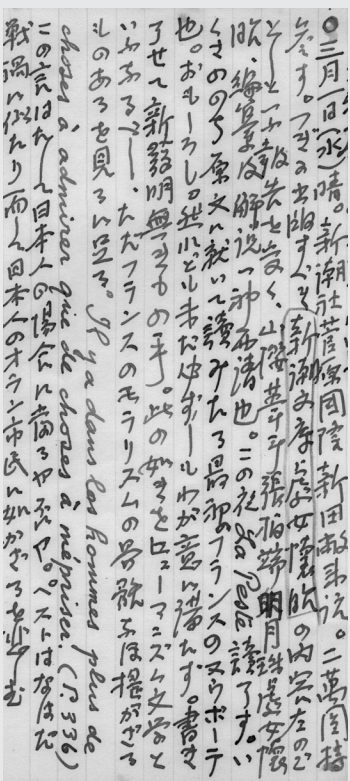
まず洋書から見ておきたいが、戦中から途絶えていた洋書の販売がやっと再開したのが、一九五〇年一月だったということに留意する必要がある。例えば『丸善百年史』をひもとくと、『昭和二十四年十二月一日に、外国為替・外国貿易管理法と輸出入貿易管理令が公布され、翌二十五年一月から民間貿易の開始を許可するという発表があった』（『丸善百年史 下巻』丸善、一九八一、第二章 復活の曙光 第一章 洋書輸入の再開 待望の民間貿易開始 一一九六頁）とある通りである。

さればこそ、一九五〇年一月七日、『Jean Cocteau : Théâtre』を購入したとある直後に《戦後はじめて購ふところの新著のフランス本也》という記述が続くわけである。洋書販売再開の喜びは、例えば高見順も、一九五〇年一月四日、『日本橋』丸善での洋書注文は何年ぶりのことか。青春を感じる。》（『高見順日記 第八巻』勁草書房、一九六五、三五二、三五三頁）と記している。

二月十五日、二十三日の記事からは、『Albert Camus : La Peste』が売られているのを窪田啓作が見付け、石川が窪田に購入を依頼し、入手したことが分かり、洋書販売再開といっても、どの書店にも出ているというような状況ではなかったことが分かる。

こうして手間を掛けて入手した「ペスト」だが、三月一日の項に、読後感がやや詳しく書かれている。《いくさのち原文に就

いて読みたる最初のフランスのヌウポータ也》と、戦後の新作を原文で初めて読んだと、ここでも洋書販売再開に関わる心の弾みを記した上で、『Il y a dans les hommes plus de choses à admirer que de choses à mépriser. (P.336) 人間には、軽蔑するものよりも賞賛すべきものがたくさんある』この言はたして日本人の場合に当るや否や。ペストはなほだ戦禍に似たり而して日本人のオラン市民に如かざるを悲しむ』と作品末尾の条を引用しつつ、『戦禍』に対する彼我の違いに思いを致している。



七月十七日、七月二十一日の記述からは、窪田啓作が持っている『Albert Camus: L'Étranger』を石川が借覧して読んだことが分かり、ここからもどこでも買えるものではなかったと推測される。一九五一年の三月二十九日、九月二十二日、十月十二日の記述では石川が窪田啓作や河上徹太郎に洋書を貸している。

一九五〇年九月三日、『ジャン・コクトオ La difficulté d'être

を読むにこれまた一篇の好読物なりき』で始まる記述は、五十代になって死を意識したコクトーと五十代になった自身を引き比べて、《余性疎懶いまだ死の近づけることをおぼえず 茫茫然として白昼の夢にふける 笑ふべきのみ》と締めくくられ、やや自嘲的ながら、自身の年齢についての述懐が示され、興味深い。全体像をざっと掴むために、以下、購入日ごとに、著者名を挙げてみよう。

三越 一月七日 コクトー

白木屋 三月三日 サルトル、ヴァレリー (二冊)

紀伊國屋書店

八月三十一日 サルトル、アラン、ジュリアン・バンダ

十月八日 クローデル、サルトル、ルーセ、ローゼンタール、

アラン、トロワイヤ

十一月一日 カミュ (二冊)、サルトル (二冊)

十二月十二日 ジュリアン・バンダ

十二月三十一日 カミュ、ジッド、クローデル

一九五一年 三月一日 ジッド

四月十日 ヴアレリー、アラン、アンリ・モンドール、カ

フカ

五月一日 プルースト

五月二十九日 ジャム、ジッド、カミュ、サルトル

ローレンス『息子と恋人』(一九五一年一月三日)、フォークナー『サンクチュアリ』(一月二十一日)など。『息子と恋人』については、『最後に母を突き放して外国に飛び立つやうに書きたらばよかりしならむ 原作のままにては恋愛観念は閉鎖されたるごとくにておもしろからず』との評言があり、石川淳の小説観が窺われて興味深い。少々面白い経緯をたどるのが『小公子』である。一九五一年三月七日、「文藝」編集者である山川朝子から《その著小公子を贈らる》とあり、四月二十二日、《山川朝子のために文藝に寄せむとして小説草藁小公子十三枚けふ一日にて書く》とあり、贈られた著作が、創作のきっかけになったようである。

### 古典籍

やっと販売再開となった洋書を熱心に購う一方で、もう一つ石川が大事にしていたのが、古典籍の購入である。古書店名と訪問日を挙げておくと次のようになる。

村口書房

一九五〇年五月二十七日、六月五日、十一月二十日、十二月二十九日

一九五一年五月二十二日、十二月二十九日

山本書店 一九五〇年六月十六日、一九五一年三月三日

大屋書店 一九五〇年十月四日

六月十九日 アラゴン、アラン、サルトル、カミュ (二冊)

八月一日 ジャック・マリタン、アラゴン、サルトル、ヴァレリー

九月八日 ジュネ、ジロドゥ、サルトル、アラゴン (二冊)、クローデル

九月二十九日 クローデル、アラン (二冊)、カミュ

十一月四日 ヴアレリー (二冊)、ヴェルコール、イヴォン・

ペラヴァル

十二月二日 ジロドゥ

十二月二十二日 アヌイ、ボーヴォワール (二冊)、アラゴン、

シユアレス、クローデル

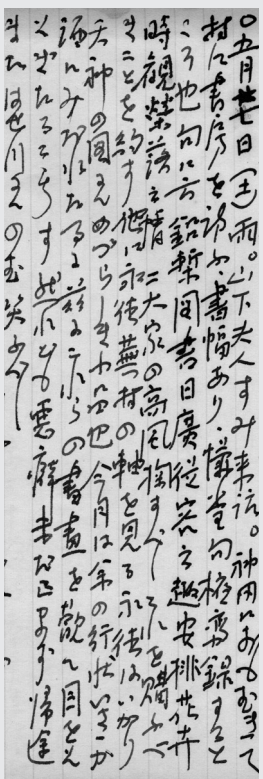
(入手経緯不明 一九五一年十月二十八日 ブランシヨ)

アラン、ヴァレリー、クローデル、ジッドといった戦前から石川淳が関心を持っていた文学者の名前がある一方で、サルトル、カミュ、アラゴンといった同時代の文学者の名前があり、さらにジュネ、アヌイ、ボーヴォワールといった新しい文学者の名前も見出すことができ、同じ文学者とじっくり付合う態度と、関心の幅を広げようという意欲との両面が窺われよう。

邦訳で読んでいる海外小説もある。まだ裁判沙汰になる前であるがローレンス『チャタレイ夫人の恋人』(一九五〇年六月十日)、訳者・河盛好蔵から贈られたゲオルギュー『二十五時』(八月四日)、

井上書店 一九五一年二月六日

一九五〇年五月二十七日の記述にこうある。《神田におもむきて村口書房を訪ふ。書幅あり、慊堂句掖斎録するところ也 [略] 二大家の高風掬すべし これを購ふべきことを約す 他に永徳蕪村の軸を見る 永徳はいかり天神の図にてめづらしき小品也 今月は余の行状いさゝか酒にみだれたるに茲にこれらの書画を観て目をそそぎたるこちす 然れども悪癖未だ止まず帰途またはせ川にてのむ 笑ふべし》



せっかく目をそそいだのに、悪癖に戻ってしまうという自嘲はさておくとして、ここに名前の挙がった慊堂掖斎の書幅も、いかり天神も、石川がのちに発表する「乱世雑談」というエッセイで取り上げられることに注意したい。これはこの時だけでなく、他の日、他の古書店からの購入物についても同じである。言及の無いものを探すが難しいぐらいである。購入した洋書の場合と同様、購入した古典籍もまた、石川淳のエッセイの素材となるも

のであった。

一九五一年五月八日、《孔叢子読了。この書の記載信じがたきふしあれどもなほ一読に堪へたり。ちなみに大田南畝旧蔵本にて南畝自筆の書入またその学に勉めるたることをしのぼしむ》とある。石川淳の南畝好きは有名だが、書き入れから南畝の学に勉めるさまに思いを致すのは、南畝の特徴をよく捉えたものと言えよう。なお、「孔叢子」は、エッセイ「仕事について」(夷齋筆談)で取り上げられる。

### 戦後最初のエッセイ「夷齋筆談」

石川淳の洋書・古典籍への関心は見て来た通りだが、購って読んだ書籍の内容を踏まえてエッセイが書かれることになる。夷齋ものの走りとなる連載エッセイ「夷齋筆談」にこの時期購入した洋書・古典籍が取り上げられることは既に述べた通りだが、実は「夷齋筆談」シリーズ成立への道は必ずしも平坦ではなかった。

一九五〇年七月十一日、二十七日、二十九日、三十日、八月七日、二十九日と日記の記述を追ってゆけば、単発ないし短期連載程度にしたい「新潮」編集者サイドとじっくり書き続けたい石川淳との思惑の違いの中、「面貌について―夷齋筆談一」が書き上げられるに至ったことが分かる。

なお、七月十三日のアイディアメモ的な記述は、石川がまた「新潮」にエッセイを書くことを肯んじない段階のものだが、その内容

は、「面貌について」「恋愛について―夷齋筆談四」に生かされることになる。断じて書くための材料がなかったわけではないのだ。

八月二十九日、《夜来牛込二葉荘にて面貌について(夷齋筆談一)を脱稟三十枚。いくさののちはじめて書きたるエッセイ也。「略」前夜窪田啓作来。窪田サルトルの翻訳を新潮に寄すといふ。余の筆談もまた新潮に連載すべきもの也》とあり、おそらく牛込双葉荘で一晩カンヅメにされて完成したものでだろうが、この日の記述から、戦後初めて書いた《エッセイ》に対する気負いと、自分の《エッセイ》は引き続き連載ものとしてじっくり書き継がなければならないとする石川の覚悟が窺われて興味深い。

石川の言う《エッセイ》とは、おそらく元のフランス語 *essai* にある「試論」ぐらいの意味だろう。石川は戦後、小説以外に「うまやばし」「苦楽」一九四七・一、「太宰治昇天」「新潮」一九四八・七、「ニセモノ記」「作品」一九五〇・六)と一般に随筆とかエッセイとか呼ばれるものを発表しているが、「夷齋筆談」は、そういうものとは一線を画したもののだろう。

連載一回目を書き終えた時点でのこの気負いだが、結果的に、夷齋筆談は連載十一回、洋書・古典籍(和漢書)への言及をふんだんに取り入れた思弁的高踏的な他に例を見ない実にユニークな *ESSAI* (試論)集として結実する。単行本は、和本仕立ての豪華限定版での刊行となるが、一九五一年十月二十六日、《新潮社新田敝来話、夷齋筆談出版につき造本見本として物理小識 侗葺筆記

豆腐百珍を貸す》という記述に接すると、石川が自分の趣味を押し出して楽しんでいる様子が目に浮かぶ。

### (二) 作家生活、交流のあった作家たち

何を買ったか、何を讀んだか、何を書いたかについて、ざっと見てみたので、次に見るべきは作家生活、他の作家らとの交流面となる。

個人事業主としての「営業」活動のさま、誰と会った、誰とどの店に行ったといった事実関係の記録ともなっているといふことは既に述べたが、営業活動とは言え、飲み過ぎではないか、ハシゴをしすぎではないかと思わずにはいられない。事実、一九五〇年二月五日、《昨夜また乱酔。今朝またしたがって昏昏、やれやれ也》。七月一七日、《乱酔。言語道断またしてもわが生活のみだれわれながら目もあてられず》。十二月三十一日、《雑然また陶然としてここに一年すぎたり》。一九五一年十二月三十一日、《一寝入して目さむれば夜半三時也。一年のぶら／＼ぐらしここに終る、かへりみるに諸事力をつくすこと十分ならざりしもの多し。売文の毒おそるべし。意あまつて才足らざることをかなしむ。すなはち床に鉄斎を掛け座右の書あれこれをひらきて黙黙夜をおくる》。まだまだあるが、売文業者の実存への反省的言辞を拾うのはこれぐらいで十分だろう。

十二月三十一日(日) 唱。新紀、所庄、*Albert Camus: The myth of Sisyphus. Conception d'un roman (Gide et Claudel)* を贈分。銀をす。昨日は、小島と井上友一郎と、五月十三日、伊東で安吾に遭遇しているが、五月二十三日の記事で、安吾が文章にしたこと(「熱海復興」「文藝春秋」一九五〇・七)に触れている。六月二十六日、《坂口ベニシリン病なるがごとし》とあるが、「坂口安吾年表」には《体調を崩し、「六月」二十六日から七月五日まで南雲医院に入院》(『坂口安吾全集 別巻』筑摩書房、二〇一二、七四九頁)とある。七月二十四日の記事によれば、東

個人事業主として、出版社社員・編集者との付き合いがあるのは当然だが、何よりも気になるのは、酒場その他で会う作家・文筆家・芸術家たちの顔ぶれであろう。

三島由紀夫(特に注目すべきは一九五一年二月二十一日の記述か)、井伏鱒二、三好達治、檀一雄、河上徹太郎、城左門、井上友一郎、川端康成、田村泰次郎、中野重治、林芙美子、林達夫、小林秀雄、宮川曼魚、勅使河原宏、岡本太郎……と枚挙に遑がないが、中でも交流の盛んな人物としては坂口安吾の名前が挙がる。

### 坂口安吾と久保田万太郎

一九五〇年四月十三日から十五日までの熱海滞在時に大火に遭い、伊東で安吾に遭遇しているが、五月二十三日の記事で、安吾が文章にしたこと(「熱海復興」「文藝春秋」一九五〇・七)に触れている。六月二十六日、《坂口ベニシリン病なるがごとし》とあるが、「坂口安吾年表」には《体調を崩し、「六月」二十六日から七月五日まで南雲医院に入院》(『坂口安吾全集 別巻』筑摩書房、二〇一二、七四九頁)とある。七月二十四日の記事によれば、東

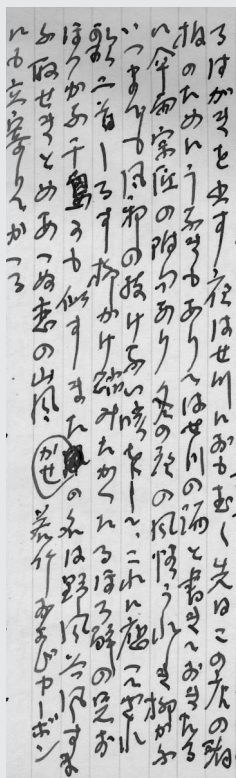
京パレス行きが、取材として行く予定だった安吾・林芙美子と酒場（はせ川）でたまたま同席したところから同行するめぐり合わせになったことが分かる。石川自身は何も書かなかったが、八月一日、《坂口安吾先日の小岩のあそびを安吾巷談に書き実名人にてあらぬことをも口走りたるよし池島信平の話也 安吾の悪癖こまつたやつ也》と、安吾に書かれてしまったこと（「田園ハレム」、「文藝春秋」一九五〇・九）をほやく。

一九五一年に入ると、八月三十一日、《文藝春秋社にて坂口安吾に逢ふ、坂口疲労困憊のていにて見るに堪へず わづかに数語を交して別れたり》とあるが、これは「税金闘争」中のこと。十月十二日、《文藝春秋社員中野修迎へにて代々木大井廣介宅に坂口安吾を訪ふ。「略」坂口に逢ふにその神経いさゝか異状を呈するに似たり、競輪告発事件にて強迫観念の兆あきらか也》。税額にまた競輪の判定に戦う安吾が心身をすり減らしているさまを書き留めている。

安吾は石川にとって親しい友だったわけだが、それとは違って石川が居ずまいを正して付き合うような興味深い交流も書き込まれている。

一九五〇年十二月六日、《はせ川にてうなぎの看板を書くうなぎもありてはせ川の酒 たれかにあとをつけてもらふつもり也》、一九五一年一月十一日、《夜はせ川におもむく 先日この店の看板のためにうなぎもありてはせ川の酒と書いておきたるに傘雨宗

匠の附句あり 冬の夜の風情うれしき柳かな いつまでも風邪の抜けない咳をして、これに応へてざれ歌二首しるす 柳かけ踏みたかへたるほろ酔の足おほつかな千鳥にも似す また かせの名は野風谷風すまふ取せきとめあへぬ恋の山風》。石川が誰かの付句を期待しながら七・七を作ってみたところ、何と、傘雨宗匠（久保田万太郎）が付けてくれたのだ。よほど嬉しかったのか、石川は《ざれ歌二首》まで詠んでいる。



この付け合いには続きがあり、一月十九日、《先日傘雨の句に附けて 身はやつせとも松風を聴く。しかれども前句に風邪とあれば松風は不束なり改むべし》、一月二十一日、《昨夜はせ川におもむき前夜の附句をあらたむ、身は囊せども京訛なるとす》。

そもそも石川が《二葉荘にてはじめて久保田万太郎に逢ふ》のが一九五〇年八月二十九日のこと、いま見た同席しないままの付句のやりとりを挟んで、一九五一年八月六日、《文藝春秋社にて久保田万太郎と逢ひつひに深更に至るまでともにのむ ブルドッグよし田ナポレオンとのみ廻りて最後はひとりアカンサスに眠る、同郷の先輩久保田の万さんとのむこと今宵はじめて也》。浅草の同

郷人として若い頃にも見かけたことがあり一定の親しみを覚えていた久保田万太郎と初めて会ったときのこと、初めてさしで飲んだときのことについては、「めぐりあひ」（『月報10』『久保田万太郎全集 第一巻』一九六八）でも触れられているが、付け合いとそれにまつわる不思議な縁についてはこの日記でしかたどれない。

久保万とのやりとりは、他にも一九五一年十月二日、十二月十一日に記されている。

久保田万太郎以外を相手に作った《句歌》が、一九五〇年一月一日、四月二十一日、六月二十二日、十一月六日、十二月三十日、一九五一年一月一日、一月十七日、五月二十五日の項に記されている。最後の五月二十五日の狂歌は、「オール読物」（一九五一・八）に掲載されているが、全集等には未収録である。

### 若手への支援

他に印象的なこととしては、若い書き手を支援する石川の姿である。

まず、安部公房。関連記述があるのは、一九五〇年三月五日（安部が「壁」の草稿を見せる）、十日、四月二十六日、五月三日、二十三日、六月七日（蔵書印制作依頼ほか）、七月一日（蔵書印受け渡し）七月二十日、九月二十四日、十月三日、十日、一九五一年二月六日、三月三十一日、四月七日、十七日、五月三日、八月一日（芥川賞受賞）、八月七日、九月十五日、十月十二日。

安部が持つてくる草稿を読み、意見を述べ、出版社に売り込み、「壁」の月曜書房からの刊行、芥川賞の受賞へと、ちょうど安部が本格的に作家デビューするタイミングのところを石川が伴走している。

島尾敏雄についても、一九五〇年九月七日、十四日、十一月二十日、十二月二十五日の記事から分かるように、『贗学生』の閲読に付合い、無事書き下ろし刊行に至った際には付録に寄稿している。その後も一九五一年一月十三日の記事から、引き続き売り込みに協力していることが分かる。

一九五一年九月六日、九月十一日記事から、石川の口利きにより、フランスに留学する加藤周一が《文学界にフランス便りを送る件》が成立したことが分かる。

一九五〇年三月二十五日の記事からは、井澤義雄のアラン論の掲載を「人間」編集者に求めたことが分かるが、これは実現しなかった。

洋書の貸し借りもする窪田啓作の第二小説集の刊行も後押ししていたことが、一九五〇年二月二十七日、三月二日、四日、六日、二十六日、六月八日の記事から分かる。この小説集の刊行はこの時は実現せず、石川淳没後の一九九〇年に私家版の形で『街燈―窪田啓作短篇集』として刊行される。扉の裏に、『J』とあるのは、かつて石川の努力への謝意からであろう。



作家たちとの交流という観点からもう一件触れておきたいのが、太宰治関連である。

太宰治その人はもちろん既に故人であるが、六月十九日の桜桃忌には、一九五〇年（禅林寺）、一九五一年（新宿・中村屋）とも出席している。

八雲書店廃業（一九五〇年五月）により中絶していた『太宰治全集』（一九四八年刊行開始）の続刊刊行のために石川が運動し、作品社からの刊行で話が固まっていたことが、一九五〇年五月二十九日、六月二十日、二十一日、七月五日の記事から分かる。

六月二十二日、早速、津島美知子に連絡し、二十四日、石川は、彼女より『太宰治が生前着用せる結城紬の裂地をもつて作りたる』ネクタイを贈られている。

一九五〇年十一月八日の記事によれば、『作品社没落』とのことで、結局、作品社から出ることはなく、一九五二年から五年にかけて、創芸社から新たに刊行し直されることになるが、一九五〇年十二月二十一日の記事によれば、お歳暮に津島美知子からウイスキーを贈られ、年明けて一月八日には、『元旦にころみたる戯墨を小山清に托して津島美知子に贈る』と、付き合いは続いている。このような形で石川は太宰没後のことも気にかけていたのである。

感想を書き込むことは少ないが、芝居、映画（試写会が多い）、演奏会、展覧会にも頻繁に足を運んでいる。演奏会については、一九五〇年十月二十七日、三十一日のラザール・レヴィ（ピアノ）、一九五一年九月十八日のメニューイン（ヴァイオリン）の演奏は印象的だったようだ。

時事に触れることはほとんどないとはじめのほうで書いたが、レッド・ページと朝鮮戦争、それから金閣寺放火事件には触れている。一九五〇年六月六日『此日アメリカンミリタリズムに依る共産党弾圧はじまり徳田球一野坂参三ら二十余名公職追放さる』、六月二十五日『北朝鮮の兵隊三十八度線の堺を越えて南朝鮮に侵入す。いくさふたゝび来らんとす』、二十六日、二十七日、三十日（朝鮮戦争）、七月一日『アメリカ兵朝鮮に上陸す 戦乱の機迫れるに似たり』、三日『京都金閣寺馬鹿書生の放火のため炎上せるよし』、十八日『朝鮮の戦局アメリカに非なることをいひて大笑す』、二十五日『朝鮮のいくさにアメリカ軍しきりに負けつづく 日本も運命いかゞなるべきか考へてもどうにもならぬことだけは明白也』、二十六日『朝鮮のいくさはアメリカ軍の敗北ほとんど必至なるがごとし いよく乱世をたのしむほかに策無し 小国の人民の窮極の権利なり』、二十九日（朝鮮戦争）、一九五一年四月十一日『巷にマツカツサー解任の報を聞く』。

冷戦下、合衆国側に組み込まれ、未だ占領が終わらない状況において、『いよく乱世をたのしむほかに策無し 小国の人民の窮極の権利なり』と記していることから、一九五〇年代初めの日本人の思考の拘束条件について考えさせられる。

以上、容易には汲み尽くせない内容豊富な石川淳日記について、いくつかポイントを拾い出してみた。

私小説を嫌い、私小説的受容を拒絶したスタイリスト石川淳の私生活・舞台裏を書き込んだ日記が容易に読めるようになったことについては、正直、若干の戸惑いもなくはない。作品（テキスト）とのみ付き合えば良いのに、なんだかノイズが増えてしまっ

た、と。だが、石川淳が購入して読んだ書籍名が明らかになること、作品成立の経緯が明らかになること、どのような作家とどのような交流があったことが分かること、それが作品理解のためにマイナスになるなどということがあろうか。

石川淳作品・石川淳文学の理解のために、言及のある他の作家についての理解のために、戦後のフランス文学受容状況についての理解のために、文学史的な新たな認識のために、その他さまざまな知的関心のために、この石川淳日記が役立たないはずがない。しっかり役立てようではないか。

（日本女子大学教授）

# 資料翻刻Ⅰ

## 石川淳日記

昭和25年1月1日  
昭和26年12月31日



石川淳 (いしかわ・じゅん 明治32・1899～昭和62・1987)

東京生まれ。小説家。年少より漢籍、江戸文化に親しむ。東京外国語学校(現・東京外国語大学)フランス語科卒業後、ジッド、モリエール、アナトール・フランスの翻訳を手がける。1935年「佳人」で小説デビュー。37年「普賢」で芥川賞受賞。38年「マルスの歌」が反軍国的とされ発禁処分を受ける。戦後は昭和末期まで「黄金伝説」「焼け跡のイエス」「紫苑物語」「至福千年」「狂風記」「六道遊行」など旺盛に筆を揮った。和漢洋の該博な知識、批判と遊芸の精神に富み、「夷齋」の号を冠した随筆でも活躍。1947年から世田谷区北沢1丁目、48年から翌年にかけて同区北沢2丁目在住。

【資料概要】

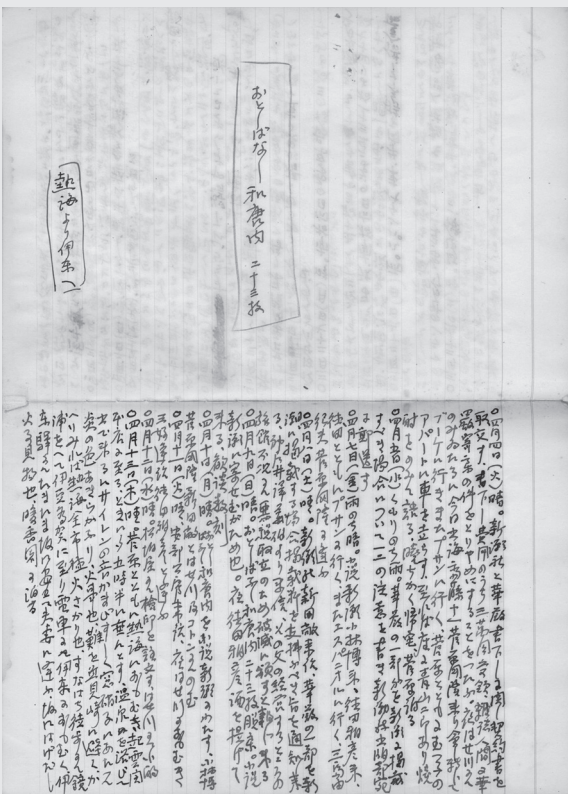
資料番号 129123

《石川淳日記 昭和25年1月1日―昭和26年12月31日》

A4判大学ノート(縦300mm×横210mm) 60枚綴り、

縦書、自筆部分91面、ペン書、一部赤鉛筆書

石川眞樹氏寄贈(令和元年度)



日記本文は大学ノート見開きの右面に縦書で書かれ、左面(縦書なので上段に当たる)には入稿記録、旅行先、メモ書きなどを記載。

石川淳は昭和24(1949)年7月に世田谷区北沢2丁目から品川区高輪南町に転居。本資料は翌25(1950)年正月から翌年大晦日に亘って書かれた自筆日記で、執筆や行動、交友のみならず、この家での来客対応、読書の覚え書きも多い。また全集未収録の自作句なども詠み込まれている。

なお、他に3冊同体裁の大学ノートの日記を受贈し、それぞれの内容は昭和27年1月1日〜12月31日(資料番号129124)、昭和28年1月1日〜12月31日(資料番号129125)、昭和29年1月1日〜8月25日(資料番号129126)となっている。本誌次号(下巻)で翻刻掲載を予定している。

【凡例】

■漢字の旧字体は新字にあらためた。ただし、人名・固有名詞などは一部表記(旧字)通りとした

■仮名 表記通り(ほぼ旧仮名、ただしカタカナ表記の撥音便は表記通り)

■数字・記号 表記通り

■読み易いように文と文の間に適宜一字空き挿入。なお句読点の配置は表記通り

■外国語 フランス語・英語・漢文の表記通り。適宜訳を(一)で補記した

■判読不明の文字は、その字数分、□□□とした

■本文対面頁(上段)に本人筆の脱稿記録、覚書および翻刻者註(\*)は各日末尾に記載

■註は適宜。店名は業態が判りづらい場合や頻出店で店名表記が揺れる際に入れた

資料翻刻1

石川淳日記

(昭和25〜26年)

昭和二十五年 一九五〇年

○一月一日(日)雨。宝焼酎にドライマルチニを混じたるものこれ我家の屠蘇なり 終日籠居して芥子園画伝\*を観る 夜群像\*編集長高橋清次来話サントリイ一壘を持参す 作品\*のために随筆の稟を起さんとして成らず 寅の春一瀉千里とおもへども伸びなやみたる筆のたけ哉  
\*芥子園画伝 中国・清代に刊行された彩色版画絵手本。各時代の画論の要旨を集録のうえ、樹石など、山水の描法を分類して多くの図を掲載。

\*群像 文芸誌

\*作品 文芸誌

○一月三日(火)曇。池田夫人通称ヨシ来、ルパン千代来、ともに年賀の客也 和田よりハゼを贈らる てんぶらにして食ふ 昨日の初釣のみやげ也

○一月四日(水)晴。パールたま女来 菓子折を贈らる、窪田啓作\*谷崎終平\*来話  
\*窪田啓作 フランス文学者、詩人 銀行員。本名・開造。窪田般彌の兄

\*谷崎終平 谷崎潤一郎の末弟

○一月五日(木)晴。戸石泰一\*来話。ちかごろ丹羽某にヘツラヒをるよし戸石みづから語る

\*戸石泰一 小説家

○一月七日(土)晴寒し。新春はじめて外に出づ、三越にてJean Cocteau\*: Théâtre 1を購ふ 値六百七十五円、戦後はじめて購ふところの新著のフランス本也、帰途銀座はせ川にてのむ 菅原国隆\*来り会す。ともに新ばしパールに行く  
\*Jean Cocteau ジャン・コクトー。フランスの詩人、小説家、劇作家。美術、映画でも活躍

\*菅原国隆 新潮社の編集者

○一月八日(日)晴。文藝春秋社杉村良吉来話。夜前日より書きつぎたる草藁成る。ニセモノ記二十一枚、これ一篇の生活記録也、作品に寄すべし

○一月十日(火)雪。昨夜徳田雅彦\*鷺尾洋三\*とともにせ川 ブーケルパンにのみ廻り乱酔 帰途終電車を乗り越し下北沢に至って菊水別

館に泊す 今朝帰来すれば牡丹雪菲菲たり 昨夜はせ川にてはじめて  
三島由紀夫\*と逢ふ

\* 徳田雅彦 文藝春秋社の編集者 徳田秋声四男

\* 鷲尾洋三 文藝春秋社の編集者

\* 三島由紀夫 小説家

○一月十一日(水) 晴。文藝春秋にて一万円借。文学界\*に寄稿すべきことを約す。ルパン及はせ川にてのむ。牛肉を買つてかへる

\* 文学界 文芸誌

○一月十二日(木) 晴。作品社員入江久恵来ニセモノ記事稿をわたす。小山清\*来話、千勝三岳夫\*来 トブロク一升を持参す 千勝上京して新制高等学校の教師となりたるよし也

\* 小山清 小説家

\* 千勝三岳夫 千勝三喜男(歌人)のことか

○一月十三日(金) 晴。先年ニセモノ事件の際提出したる証拠品の件につき東京地方検察庁より引取方通知し来れるに依り右の品不用のおもむきをいひてやる、夜炬燵にて Coteau : Les Parents terribles を読む

○一月十四日(土) 雪。小山書店ワタリ来 芥川賞全集印税内金三千元持参す

○一月十六日(月) 晴。文学界伏島来話。夜銀座に出で作品社にて八木岡英治\*由紀しげ子\*に逢ふ、はせ川にて永井龍男\*鷲尾洋三に逢ふ、鷲尾とともにルパンに行く、牛肉を買ひて帰宅

\* 八木岡英治 編集者。中央公論社、創芸社、作品社など

\* 由紀しげ子 小説家

\* 永井龍男 小説家

○一月十九日(木) 晴。新潮社酒井健次郎来。華嚴\*書下し出版につき

交渉ありたれど話まどまらず、しばらく様子を見ることせず、別に新潮文庫にて短篇集を編むべきことを約す、伊藤濱子来話、角川を辞してCIDの日本語教師にならんとするよし

\* 「華嚴」昭和二十四年「表現」連載中、同誌休刊により未完となった小説

○一月二十一日(土) 晴。神田月曜書房にて戦後代表作集印税三千元受領。はせ川にて徳田雅彦永井龍男と逢ふ、デュドロッパインに立寄る

○一月二十二日(日) 晴。海老雄二\*妻子五人づれにて来訪す、海老名一家そろつて上京することはじめてなりといふ、すなはちこれを歓待す、けふよねの誕生日也

\* 海老名雄二 石川が海老名家に間借りしたこともあり、戦前より交流が深い

○一月二十三日(月) 晴。群像高橋清次来話、写真をうつすことを約束す。神田におもむき小山書店高村昭\*と会ふ、はせ川に立寄りてかへる

\* 高村昭 小山書店の編集者

○一月二十五日(火) 晴。河辺健一來話。群像高橋清次写真師をつれて来り写真をうつす雑誌に載せむとなり

○一月二十六日(水) 晴。日本橋高島屋にて現代油画展覧会を観る、窪田啓作を東京銀行に訪ひコーヒー屋にて閑談す、帰途はせ川にてのむ、文藝春秋社員尾実ながし座にあつて清水武雄の息子と名乗る。意外也、すなはち余が従兄の子也

○一月二十七日(木) 晴。糸書房天野亮来話。福田恆存\*紹介也、作家論集を出版するにつき余の著森鷗外の一部を転載したしといふ、これを承諾す。安部公房\*来話、小説の書けざるよしを語る、池田夫人来話

\* 福田恆存 評論家、翻訳家、劇作家、演出家

\* 安部公房 小説家、劇作家、演出家

○一月二十八日(金) 晴。文藝春秋におもむき文学界の原藁の遅るるべきことをいふ。省線電車内にて神西清\*に逢ふ、新潮文庫に収むべき

余の小説集の件につき新潮社より解説を依頼されたりと神西咄也 目黒書店人間\*編集室にて木村徳三\*と語る

\* 神西清 ロシア文学者、翻訳家、小説家、文芸評論家

\* 人間 文芸誌

\* 木村徳三 「人間」創刊時から編集を担当

○一月卅一日(火) 晴、あたゝかきこと五月のごとし、漂然として巷をあるく、小山書店にて三千元受領 先日來書きつゞけたる小説草藁夜を徹して筆を呵し曉に成る 影ふたつ三十八枚也

上段：影ふたつ 三十八枚

○二月一日(水) 晴。影ふたつの草藁を文藝春秋にわたす 文学界三月号に掲載すべきもの也 井上勇\*を時事通信社に訪ひ上海の人沈承怡に紹介さる 沈氏二十九歳新聞記者小説鳩の町の著者也 その著を贈られてその署名の筆蹟を見るに未だ必ずしも筆札にたくみならず けだし中国戦後派青年の特徴也 沈氏の招きにて山田吉彦\*とともに丸の内コレスポンドンクラブにてウィスキーを供さる 帰途はせ川にてひとりのむ

\* 井上勇 翻訳家、ジャーナリスト

\* 山田吉彦 小説家、翻訳者「きだみのる」の本名

○二月三日(金) 雨のち晴。昨夜乱酔のため今日夜に至るまで昏昏として書を読むにも堪へず 菅原国隆来話、高橋清次来 先日うつしたる余の写真を持ち来る 引伸し四枚贈らる その中の一枚を群像四月号に載すべしといふ

○二月五日(日) 晴。昨夜また乱酔 今朝またしたがつて昏昏、やれや

れ也 井澤義雄\*神戸より上京し来る ウナギ蒲焼を贈らる 井澤とともに浅草に行きロツク座にてエロシヨを観る 池のほりなるてんぶら屋にててんどんを食ふ、留守中信州吉江真澄たづね来れるよし

\* 井澤義雄 フランス文学者

○二月六日(月) 晴。芝区役所に都民税を納む。夜海老名雄二来話、将棋をさし焼酎をのむ

○二月九日(木) 曇。やや暖か也、二三日まへより風邪の気味にて昨夜来いささか発熱す、余に於て発熱はめづらしきこと也 この風邪珍重也 但執筆おつくうにていそぎの原藁にはかに成りがたき模様なり

○二月十日(金) 晴。文藝春秋新社出版部鷲尾洋三宛に単行本野守鏡出版の件は取やむべきことを通告す、これ旧臘話しおきたる件にして、鷲尾考慮中と称し返事を寄こさざれば打切としたるもの也

○二月十一日(土) 雨。風邪を押ししてセントラル映画試写を見に行きたるに何とかいふアメリカ物愚劣鈍重呆れはてたり 帰途はせ川にて小酌 夜伊藤濱子来話、ちかごろ悪質の風邪流行し余少しく癒えたるに

よねまたこれに冒さる

○二月十三日(月) 晴。小山清戸石泰一來話。群像高橋清次来。風邪気未だ全く去らず人と語るにもうし。高橋に単行本出版の件を話す

○二月十四日(火) 雪。河出書房田中西二郎\*竹田博\*来、小説大系戦後篇の一卷として坂口大宰織田及余の篇を編むよし 承諾しおく、焼酎をのみ雑談するに田中共産党ざらひにて賀川豊彦\*を偉人といふ。この男余が架蔵の仏国禪師文殊指南図説\*及明板\*李長吉\*集を示すにその何の書たるかを全く解せず。田中は北京に在りしこと二年半也、しかも唐山\*の書に暗くして賀川豊彦に明か也、余大いに笑ふ、馬鹿の見本也

の政府也

上段「夜は夜もすがら 三十六枚」

- \* 田中西二郎 翻訳家
- \* 竹田博 河出書房の編集者
- \* 賀川豊彦 社会運動家、小説家
- \* 仏国禅師文殊指南図説 正しくは「仏国禅師文殊指南図譜」。華嚴経入法界品に説かれる善財童子の南遊求法遍歴を絵画化し、これに讃を加えた上図下文形式の版本。宋版が一点、江戸時代複製版が十数点知られている
- \* 明板 明版のこと
- \* 李長吉 唐代の詩人・李賀のこと
- \* 唐山 中国のこと

○二月十五日(水)曇。高橋清次来。余の風邪見舞としてドリコノと称するもの二壘贈らる。夜窪田啓作来話 カミュ\*のペスト入荷せりと聞きそれを購ふことを依頼す

\* カミュ アルベール・カミュ (Albert Camus)。フランスの小説家、劇作家、哲学者

○二月十六日(木)晴。残雪。井澤義雄来、大学卒業試験明日をはり郷里にかへるよし 伊藤濱子来、角川書店鎗田清太郎来、矢代幸雄著太陽をしたふ者贈らる 夜風邪後はじめて湯を浴ぶ

○二月十九日(日)晴。藤川栄子\*来話、その後援会々員名簿に署名す、女史例に依つて談論風発す

\* 藤川栄子 画家

○二月二十日(月)晴。先日より書きかけたる小説草稿夜来稟をついで今朝に至つて成る。夜は夜もすがら三十六枚也、群像四月号に寄せんとす、高橋清次来、すなはち原稟をわたす、田中西二郎来、先日あづけおきたる黄金伝説の抜刷をもどし来る、この日国税局より余が昭和二十四度の収入八十五万円と通知し来る、むちや也、強盗よりも悪質

たず。書き了せて新発明無きもの乎。此の如きをヒューマニズム文学といふなるべし、ただフランスのモラリスムの骨髄なほ揺がざるものあるを見るに至る。Il y a dans les hommes plus de choses à admirer que de choses à mépriser. (P336)人間には、軽蔑するものよりも賞賛すべきものがたくさんある」この言はたして日本人の場合に当るや否や。ペストはなはだ戦禍に似たり而して日本人のオラン市民に如かざるを悲しむ

\* 新田敏 新潮社の編集者

○三月二日(木)晴。日本橋コーヒーハウスにて窪田啓作と会しその作品集の角川書店より出版せらるべきむねを伝ふ。夜はせ川にてのむ

○三月三日(金)晴。白木屋に「Sartre」: Situations 三冊 Valéry\*:

Pièces sur l'art 及 Mélange を購ふ。三越劇場にて文学座演ずるところの福田恆存作キティ駭風を見物す、招待日にて多く知友に逢ふ、帰途窪田啓作加藤周一中村真一郎\*矢内原伊作岡本太郎\*とはせ川にてのむ

\* Sartre ジャン・ポール・サルトル。フランスの哲学者、戯曲家、小説家

\* Valéry ポール・ヴァレリー。フランスの詩人、小説家、批評家

\* 中村真一郎 小説家、文芸評論家、詩人

\* 岡本太郎 美術家

○三月四日(土)晴。窪田啓作来話。その短篇集街燈の原稟を持参す

○三月五日(日)晴。安部公房来話。その書くところの壁二百六枚の草稿を示す、あづかりおく、安部ととも高田馬場に藤川栄子を訪ふ

藤川邸にて小酌

○三月六日(月)晴。角川書店に窪田啓作短篇集の草稿をわたす。夜はせ川にてのむ

○三月七日(火)風強く木木をゆるがしてときに雨を吹きつけたり 春

\* 木山捷平 小説家、詩人

○二月二十三日(木)晴。窪田啓作を東京銀行に訪ひ「Albert Camus :

La Peste をゆづり受く、窪田とともにはせ川にてのむ

○二月二十五日(土)晴。六興出版社大門一男吉川某をともしひて来るサントリーを贈らる、伊藤濱子池田ヨシ来話

○二月二十七日(月)曇ときどき小雪。本の件につき講談社高橋清次に、雑誌寄稿の件につき新潮社の菅原国隆にそれぞれ速達を出す、夕角川書店におもむき窪田啓作の小説集を編むべきことを承諾せしむ、たまたま来り会するもの加藤周一\*矢内原伊作\*串田孫一\*あり 角川われら大雅楼にむかへて小宴

\* 加藤周一 評論家、小説家、医師

\* 矢内原伊作 哲学者、評論家

\* 串田孫一 詩人、哲学者、随筆家

○三月一日(水)晴。新潮社菅原国隆新田敏\*来話。二万円持参す。つぎに出版すべき「新潮文庫処女懐胎」の内容左のごとしといふ報告を受く、山桜葦手張柏端明月珠処女懐胎 編纂及解説は神西清也。この夜 La Peste 読了す。いくさののち原文に就いて読みたる最初のフランスのヌウポータ也。おもしろし。然れども未だ必ずしもわが意に満

の嵐也 これわが誕生日也 海老名雄二来すなはち小宴を催す 海老名酔臥して泊る

○三月八日(水)晴。河辺健一來、人間に華嚴の続稟を掲載したといふ。おそらく書くことになるべし。読売ホールにイタリヤ映画靴みがきを観る。よね同伴也、ホールにて藤川女史母子に逢ふ。帰途四人にて有楽町マロンに小憩 またひとりにはせ川におもむきてのむ、座に文藝春秋の若輩数名あり、ビール数本をかたむく

○三月拾日(金)晴。安部公房来。安部とともに小山書店におもむきて二千元受領、内千円を安部にあたふ。安部窮迫きはまれるがごとし、九段近江屋にてビールをのむ また月曜書房に至り群像高橋清次宛に安部を紹介する手紙を書く、その作壁二百六枚を群像に売りつけんがため也 但この枚数にては長きにすぎてちとむつかしかるべし 月曜書房よりその刊行書二三をおくらる 帰途ひとりにはせ川に至るに徳田雅彦鈴木亨\*中戸川宗一\*に逢ふ、さらにブーケほか二軒にてのむ、昨日税務署より通知あり昭和二十四年度に於ける余の収入は八十五万円とのことにて税金六十一万何千円を収めよと吹つかける 余の昨年度の収入は全部にて約五十万円を越えず悪税ふとゞき也 むちやといふべし 相手にするに足らず

\* 鈴木亨 詩人、第二次「四季」編集者

\* 中戸川宗一 文藝春秋社の編集者

○三月十二日(日)晴。夜毎日ホールにてブランドンの講演を聴く、並びに活動写真大いなる遺産を観る 帰途有楽町にて某酒場に神西清とともにのむ

○三月十四日(火)晴。群像高橋清次紹介にて彫刻師某その作るところの灰皿を売りに来る、愚劣なるもの也。買はずして返す、筑摩書房石

井某\*来話、夜チエーホフ決闘六号室学生を翻訳本にてよむ、決闘も六号室も余少年のむかし読みたるものなれども今日またおもしろし決闘はたしか黒クローズ装の英訳本にて読みたるやうに記憶す ちかごろもの書くことに懶く小説の稟なかなか進まず

\*石井某 筑摩書房編集者の石井立のことか

○三月十六日(木) 晴。井澤義雄東大卒業試験を受くるために神戸より上京し来る。別冊文藝春秋岡富久子\*来 原稟依頼也、菅原国隆来、菅原とともにせ川にてのむ 帰宅炬燵にて夜半ふと起きたるに腰痛にはかに発して歩行に堪へず 謂ふところのギツクリ腰か否か余やうやく老いたるがごとし笑ふべし

\*岡富久子 文藝春秋社の編集者。一般的には富久子と表記

○三月十七日(金) 晴。腰痛をさまる。池田ヨシ伊藤彦子来、池田夫人よりサントリイ一壘をおくらす、両女史とともによね有楽座に映画を観に行く、余こもりみて小説の稟を継がんとすれど筆はなはだ重し筑摩書房石井来翻訳本白鯨二冊を贈らる

○三月十八日(土) 曇のち雨。斯波武\*来、河野通勢\*筆梅花図一幅 狂歌堂真顔\*筆茶釜売画并賛を持参す

\*斯波武 兄・武綱のことか、斯波は石川淳の旧姓(祖父母の家の養子となり石川姓へ)

\*河野通勢 画家

\*狂歌堂真顔 江戸後期の狂歌師、戯作者

○三月二十日(月) ときどき小雨、文藝春秋の招待にて新ばし演舞場にて文楽を観る 忠臣蔵七段目也 諸友に逢ふ はせ川またブーケにてのむ

○三月二十三日(木) 晴。国税局に税金査定の不法不正なることにつき郵便書にて抗議を呈出す、菅原国隆来、一万円持参(新潮文庫処女懐

胎印税の一部)新潮社員中野ながしを同伴す これ中野好夫\*長男十九歳にして三日前家出して北海道に赴きたるが帰来せるもの也 菅原に小説南枝向日の草藁三十枚までをわたす、これは書きかけの部分也 菅原中野をつれてはせ川におもむく 菅原をして中野をその父の家に送り行かしむ 留守中窪田啓作来 その小説藁の原藁を置きて去れりといふ

\*中野好夫 英文学者、評論家。信条を異にした長男・好之は西洋思想史学者となる

○三月二十五日(土) 晴。河辺健一来話、井澤義雄草するところのアランの世界原藁六十余枚を雑誌人間編集部にわたしてその掲載方を依頼しおく 河邊ともにはせ川にてのむ

○三月二十六日(日) 雨。ルパン千代来、牛肉を持参す、借金取也、窪田啓作来話 その小説草藁を一閱してかへす、菅原国隆来話、南枝向日の草藁三十一枚より四十七枚までわたす 夜に入つて五十枚まで書き了る、新潮五月号に寄せむがため也

○三月二十七日(月) 晴。菅原に南枝向日の原藁最後の三枚をわたす 夜はせ川にてのむ

上段・南枝向日 五十枚

○三月二十九日(水) 夜はせ川におもむく 清水昆\*に逢ふ 飯寓にかへれば菅原国隆来り待つ 新潮の原藁料を持参したる也 菅原泊る

\*清水昆 漫画家

○三月三十一日(金) 晴。池田夫人よし来話 よねこれともに出づ夕河出書房に至るに竹田博坂本一亀\*、余をさそひてするが台下鰻やすゞきにて小酌

\*坂本一亀 河出書房の編集者

○四月一日(土) 雨はげしく風つよし、小山書店にて二千元領取、夕方

海老名雄二を東日興業に訪ふ、海老名とその仲間森井某立川某ともにも有楽町元八にて小酌、さらに転じて西銀座ブッサン\*におもむくこの酒楼は青山二郎\*の経営に係るものといふ 今日出海\*横山隆一\*らに逢ふ、深夜リントクにて帰宅、海老名同行して泊る

\*ブッサン 他に「ブサン」「ブウサン」などの表記あり

\*青山二郎 装幀家、美術評論家

\*今日出海 小説家、評論家、演出家

\*横山隆一 漫画家

○四月二日(日) 晴、風つよし、別冊文藝春秋岡富久子来りて原藁をもとむ、ことわる、海老名終日あそびてかへる

○四月三日(月) 晴。新潮社におもむきて華嚴書きおろしの件につき酒井健二郎\*と打合せをす、帰途講談社に立寄りて夜は夜もすがらの草藁を取戻す、さらに銀座作品社におもむきて真鍋呉夫\*八十岡英治と語る 夜はせ川にてのむ

\*酒井健次郎 新潮社の編集者

\*真鍋呉夫 俳人、小説家

○四月四日(火) 晴。新潮社と華嚴書下しに關し契約書を取交す、書下し費用のうち三万円受領、雑誌人間に華嚴寄藁の件をとりやめにする ことをつたふ。夜はせ川にてのみみたるに今日出海斎藤十一\*菅原国隆来り会し転じてブーケに行きまたブッサンに行く、菅原とともにむつ子のアパートに車を走らす、至れば座に青山二郎あり焼酎をのみて語る、暁ちかく帰宅、菅原泊る

\*斎藤十一 新潮社の編集者

○四月五日(水) くもりのち雨。華嚴の一部分を新潮に掲載すべき場合について一二の注意を書き新潮社出版部宛に郵送す

○四月七日(金) 雨のち晴。小説新潮小林博来、徳田雅彦来、徳田とともにブッサンに行く、またエスパニオルに行く、三島由紀夫菅原国隆に逢ふ

○四月八日(土) 晴。新潮社新田敏来話、華嚴の一部を新潮に掲載する場合掲載料を支払ふべき旨を通知し来る、神戸井澤義雄より来信、その父の経営するところの旅館不況にて悪税取立のため破滅に頻すと報じ来る

○四月九日(日) 晴。おとしばなし和唐内二十三枚脱藁。小説新潮に寄せむがため也。夜徳田雅彦酒を提げて来る、歓談数刻

上段・おとしばなし和唐内 二十三枚

○四月十日(月) 晴。おとしばなし和唐内を小説新潮にわたす、小林博菅原国隆新田敏とはせ川及コトンにてのむ

○四月十一日(火) 晴。安部公房来話、夜はせ川におもむき三好達治\*徳田雅彦と逢ふ

\*三好達治 詩人

○四月十二日(水) 晴。松坂屋にて検印を註文す、はせ川にて小酌

○四月十三日(木) 晴。菅原とともに熱海におもむき起雲閣本店に至る、ときに夕五時半に垂んとす、温泉を浴びて出で来るにサイレンの音かまびすしく窓硝子にあたつて炎の色あきらかかなり、火事也、難を魚見崎に避く、かへりみれば熱海全市猛火さかり也、すなはち徒歩にて鏡浦をへて伊豆多賀に至り電車にて伊東におもむく、伊東駅にてたまたま坂口安吾\*夫妻に逢ふ、坂口は、けだし火事見物也、暖香園に泊る

上段・熱海より伊東へ

\*坂口安吾 小説家

○四月十四日(金) 晴。坂口安吾とともに伊東市中のてんぷら屋にて小

酌、菅原帰京す。昨夜熱海の火車は目貫の通二千戸を焼くといふ

○四月十五日(土)晴。よね暖香園に来る。伊東を出発して途中下車にて熱海に立寄りたるに四周焼跡の中に起雲閣のこりみたり、すなはち小憩してビールをのみ つまみものハムサラダコーヒーなど命じたるに勘定はこのつぎにといふ宿の挨拶也 なかく、商売上手也 一泊せむとはおもへど電気水道ともに止りみたれば帰京す このごろ野中昭子といふ未知の女しきりに手紙を寄こす 文学少女なるべし

上段：熱海より帰京

○四月十七日(月)晴。文芸家協会より全国書房の印税を取立てたるものの一部を送り来りたればこれを受領す 夜はせ川にて檀一雄菅原国隆新田敏とのむ 檀よりその著りつ子その死を贈らる、中戸川宗一岡富久子来り会す転じてエスポール\*におもむくに宇野千代\*北原武夫\*紀国屋書店主人に逢ふ 夜ふけ帰れば海老名雄二来り待ちつつあり、海老名泊る、この日月曜書房より岡本かの子\*母の手紙を岡本太郎署名にて贈られたれどもエスポール\*に取上げられたり

\*エスポール 他に「エスポール」などの表記あり

\*宇野千代 小説家

\*北原武夫 小説家

\*紀国屋 紀伊国屋書店の表記は、他に「紀之国屋」「紀ノ国屋」「紀の国や」など

\*岡本かの子 小説家、岡本太郎の母

○四月十八日(火)晴。海老名かへる、岡富久子来話、東京日日新聞茂木某女来話、ともに原稟依頼也、新聞には書くつもり無し、某女腕づくなら負けせんわと、女子の武勇おそるべし

○四月十九日(水)晴。神戸より井澤義男雄来。井澤とともに六甲におもむくことゝす。文藝春秋新社及河出書房に立寄り夜銀座はせ川にて

のむ 菅原国隆新田敏中戸川宗一鈴木亨ら相会す、新田敏よりジイド

全集背徳者の件につき報告を受く、夜十時三十分発大阪行列車に乗る、この日三省堂にて註文せる検印出来上る。このたびの神戸行は井澤の要請に係るものにて兼ねて別冊文藝春秋の原稟を書くため也

上段：神戸行

○四月二十日(木)晴。朝神戸着。ゆり屋におもむく。これは井澤の兄が新開地聚楽館にて経営するところの食堂也。島尾敏雄\*を呼ぶ。井澤と三人にて東亜ロードの喫茶店オルゴルに行き、また福原のお好み焼ごんやにてのむ、福原はもとの遊郭なれども焼失後の今日にては尋常安待合ふうの家はかなき軒を並べたり、夕五社花壇に着く、この旅館経営難にて且重税に苦しみ井澤の父煩悶してほとんど自殺をはかる危険ありといふ、いづこも安き地無し

\*島尾敏雄 小説家

○四月二十一日(金)くもり小雨。島尾敏雄富士正晴\*五社花壇に訪ね来る。置酒歓談。両名泊る。佐々木基一\*にはがきを遣る。昨日別冊文藝春秋宛に電報を打ちたり、チハヤフルコウベニツケバオソザクラ

\*富士正晴 小説家、詩人 通常は富士と表記、ただし本姓は富士

\*佐々木基一 文芸評論家

○四月二十二日(土)晴。五社花壇にして島尾富士兩人朝にかへる。奥山裕来話。井澤とともに酒を酌む。しかるにこの夜井澤の父急逝す。死因は肝臓のよし、衰弱はなはだしくして手当の効なかりしがごとし、無常迅速といふべし、香奠二千円を呈す。

○四月二十三日(日)晴。神戸に出て元町風月堂にて菓子折をととのへ井澤の父の霊前に供ふ。夜ゆりやにてのむ

○四月二十四日(月)くもり雨。五社花壇にて井澤の父の告別式に列す。

三田サンタにて火葬に附するよし也、夜義雄より井澤家の内状を聴く

○四月二十五日(火)晴。前夜雨にて瀧の音雷のごとし。午後五社花壇を発して東にかへる。ゆり屋にて夕食。この行失費多くして原稟成らず わづかにのこれるは借金のみなり呵々

○四月二十六日(水)晴。午前九時品川着。家にかへれば海老名雄二座にあり、前夜むつ子愛子とともに酔つて襲来し泊りこみたるもの也、菅原国隆来話、安部公房来話 安部はその作品壁第二部を持参す、原稟売れず就職でもすべきかなどと語る、帰京すれど爰元もまたあわただしきことども也

河出書房坂本一亀に文学大系の検印をあげおく

上段：神戸五社より帰京

○四月二十七日(木)晴。夜文藝春秋別冊徳田雅彦の案内にて小石川もみぢに泊る。そのまへにブツサンにて借金を支払ひむつ子愛子に対し先夜我家にどなりこみたる非礼をなぢりその罪を謝せしむ

○四月二十九日(土)晴。夜来もみぢにて小説の稟を草し曉に成る。瀧のうぐひす二十枚、徳田雅彦にわたす もみぢを出で神戸にて万年筆を購ひ帰宅

上段：瀧のうぐひす 二十枚

○五月一日(月)晴。安部公房来 その小説草稟壁第二部を批評して返す、中央公論社長島中鵬二\*来、原稟依頼也、約束せず、文藝春秋にて瀧のうぐひすの謝礼を受けはせ川にてのみ末広の牛肉をみやげに帰る

\*島中鵬二 正しくは「嶋中」だが、以降も「島中」と記述

○五月三日(水)雨。夜来銀座にてのみ小石川もみぢに泊り夕方帰宅。大酔戒しむべし帽子をどこかに落したり 昨日安部公房その小説壁第二部の草稟を書直して持参す 安部は先日追剥に逢ひかへつて賊のの

どを絞め腕の骨を抜きたりといふ

○五月四日(木)雨のち晴。鈴木貢来話。文学界の原稟依頼也 鈴木と、もにはせ川にてのむ

○五月六日(土)曇雨もよう 河出書房竹田博 文学大系の検印並に検印請取証を届けに来る、夕作品社にて八木岡英治と将棋をさす はせ川にて鈴木貢と逢ひエスポールにおもむく、そこにて河出書房主人と逢ふ また中村正常\*弟ながしと逢ふ 先夜忘れたる帽子をせい子がかへしてくれる

\*中村正常 劇作家、小説家

○五月七日(日)晴。三越本店にて二科会春季展覧会を観る 見るべきもの無し、伊藤はま子\*女史来話コーヒーを届けらる 角川書店の飯田橋附近に移転せるよしを聞く

○五月八日(月)曇。文学界の原稟執筆のため築地三田におもむく 鈴木伏島徳田及ブーチャンとともにのむ

○五月十日(水)小雨くもり。夜来築地三田にて「篠舩」第一章十四枚書く 文学界六月号掲載のもの也 続稟は七月号に延ばすことゝす 三田を出でて夜はせ川 サントリーバー、エスポールにてのむ 同行鈴木徳田及矢内原伊作也

○五月十一日(木)晴。新潮社にて二万円受領。華嚴書下し費用の一部也。窪田啓作とともにせ川におもむく 菅原国隆新田敏あとより来り三島由紀夫また相会す

○五月十三日(金)晴。昨夜はせ川にてのみブウサンにてのみ大酔前後忘却 築地三田に泊り今日午後にかへる 横浜の山下夫人といふものはじめて来る、よし来話、夜片山修三\*とはせ川にて語る

\*片山修三 小説家から出版、編集者として「思索」を編集発行。思索社を興す

○五月十五日(月)晴。作品社にて八木岡と将棋をさす はせ川にてのむ  
○五月十六日(火)晴。夜はせ川にて菅原国隆に逢ひともにエスポール  
におもむく 連夜の酒に疲れたり

○五月十七日(水)晴。河出書房竹田博現代日本文学大系別冊第一巻の  
成れるを届け来る これは余が作無盡燈ほか四篇を収録したるもの也  
竹田京都大学法科を卒業したるよしなれどもその経歴を聞くに即ちこ  
れ銀座のテキヤ也 安部公房来話ともにはせ川に赴きてのむ

○五月二十日(土)雨。山下夫人来話、夫人とよねとを携へてはせ川に  
て晚餐

○五月二十三日(火)曇。昨夜はせ川にて海老名雄二に逢ひともに葭町  
巳の家に泊り今朝帰宅す、文芸家協会より全国書房支払の印税内金若  
干を送り来る 角川書店におもむき角川源義に逢ひ小山書店におもむ  
き高村昭に逢ふ たまたま安部公房来り会す すなはち安部及び塩  
出和子後なにがしを伴ひて飯田町某店にてビールをのむ、安部は税金  
七十五円を督促されこれを支払ふこと能はず税務署員やむをえず月給  
にて立替へておきますといひたるよし也 夜はせ川にてのむ、文藝春  
秋社員の話に坂口安吾熱海の火車につきて雑文を書き余の名を引合に  
出したりとつたふ 菅原国隆はせ川に来る、これを携へて築地三田に  
て小酌

○五月二十四日(水)晴。中央公論社長島中鵬二来話。夜鈴木貢とはせ川  
にて逢ふ、熱海行の相談をす、帰途銀座通にてビンゴゲームをこころむ

○五月廿六日(金)晴。夜徳田雅彦とはせ川にてのみ深川に車を走らせ  
て宮川におもむく 宮川のうなぎ久しぶり也 この店戦後の普請なれ  
ども雅趣あり曼魚老人\*に逢ふ 老人と語ることもまた久しぶり也

\*曼魚老人 宮川曼魚のこと。随筆家、江戸文化研究者

岡昇平\*に逢ふ 提靴を買ふ

\*河盛好蔵 フランス文学者、文芸評論家

\*大岡昇平 小説家

○六月三日(土)曇小雨。一日より鈴木貢案内にて熱海古屋に泊り今日  
帰京 文学界の統稟執筆のためなれども稟成るに至らず 夜はせ川に  
て鈴木及徳田雅彦と逢ひさらにノンシャランス\*におもむきアヤを伴  
ひ四人にて深川宮川にて晚餐 また銀座にもどりエスポアルにて小宴  
連日の酒にいささか疲れたり

\*ノンシャランス 他に「ノンシャラン」などの表記あり

○六月五日(月)晴。夜来小説篠船の稟を書きつぎて今朝やうやくなる。  
文学界六月号の続篇也 通算して四十四枚。これを鈴木貢に手交す。  
村口書房におもむき先日見おきたる慊堂句掖齋書の幅をあがなふ。帰  
途銀座はせ川にてのむ

上段…篠船 四十四枚

○六月六日(火)晴。銀座はせ川にてのみそれより巖谷小波四男大四\*  
を供にしたがへて新ばし某茶楼にのむ これインチキ酒場也 此日ア  
メリカンミリタリスムに依る共産党弾圧はじまり徳田球一野坂参三ら  
二十余名公職追放さる 深夜帰宅すれば海老名雄二来り泊するに逢ふ  
窪田啓作留守に来れるよし

\*巖谷小波、大四 小波は小説家・児童文学者、大四は河出書房の編集者を経て

文芸評論家

○六月七日(水)晴。海老名雄二午後かへる 安部公房来話その原稟  
三十枚持参す佳作ならず安部に蠟石を購ひて蔵書印を作ること依頼  
す 夜安部とともにはせ川にてのむ

○六月八日(木)晴。文芸家協会より全国書房の印税の一部を送り来る。

○五月廿七日(土)雨。山下夫人すみ来話。神田におもむきて村口書房  
を訪ふ。書幅あり、慊堂\*句掖齋\*録するところ也 句に云 鉛槧図書  
日廣従容之趣安排花卉時観榮落之情 二大家の高風掬すべし これを  
購ふべきことを約す 他に永徳\*蕪村\*の軸を見る 永徳はいかり天神  
の図にてめづらしき小品也\* 今月は余の行状いさゝか酒にみだれた  
るに茲にこれらの書画を観て目をそそぎたるこちす 然れども悪癖  
未だ止まず帰途またはせ川にてのむ 笑ふべし

\*慊堂 松崎慊堂。江戸時代後期の儒学者

\*掖齋 狩谷掖齋。江戸時代後期の考証学者

\*永徳 狩野永徳。安土桃山時代の絵師、狩野派を大きく発展させた。「いかり天  
神」とは、菅原道真を祀る天神信仰が盛んとなる中で天神像が描かれ、初期は  
表情に道真の怒りを表現しているものが多く、その図様を引き継いだ画題

\*蕪村 与謝蕪村。江戸中期の俳人。文人画もよくした

\*この村口書房で観た書画類に関しては「乱世雑談」(「夷齋俚言」)に言及あり  
○五月二十八日(日)曇をりをり小雨、梅雨のまへぶれなるがごとし  
新潮文庫版処女懐胎の校正を閲したる

○五月二十九日(月)曇。銀座松坂やにて時計修繕成りこれを受取り、  
はせ川におもむく、井伏鱒二\*に逢ふ、太宰後家八雲書店の土地建物  
を未払印税の代りとして取上げ名義書替へたりと井伏の話也 徳田雅  
彦とともに三田におもむきてのむ、食膳に鮎出てたり但うまからず

\*井伏鱒二 小説家

○五月三十日(火)うす曇。戸石泰一津田直紀来話、戸石は失業津田は  
雲州松江に落ち行くとともに貧棒<sup>ツラ</sup>ばなし也 津田に饒別をあたふ

○五月三十一日(水)晴のち小雨。新潮社にて華嚴書下し費用を受領す  
河盛好蔵\*と語る 新田をしたがへてはせ川におもむく 三好達治大

角川源義ヤリ田某をしたがへてはせ川におもむく。窪田啓作を招きて  
角川に紹介す。たまたまよねヨシ来り会す。帰途窪田及び女ふたりと  
ともにビンゴゲームをこころみ三たび賞にあたる。アマンドに小憩し  
てかへる。この朝小説新潮小林博来、小説依頼也

○六月九日(金)雨。作品社より三島由紀夫小説集燈台を贈らる。はせ  
川にてのむ。帰途ビンゴをこころみ缶詰あたる

○六月十日(土)雨。山下夫人すみ来話。翻訳本チャタレイ夫人の恋人  
を読む

○六月十二日(月)雨。小山書店にて三千円受領。窪田啓作と日本橋の  
喫茶店にて語る。窪田の娘まき子七歳は北川の息子とともに笈田幸吉\*  
の同門にて天才少女なるよし。夜はせ川にて井伏鱒二中島健蔵\*永井  
龍男河盛好蔵と会飲す、また塩出和子に逢ひ花馬車にて小憩す

\*笈田幸吉 おそらくピアニストの笈田光吉のこと

\*中島健蔵 文芸評論家・フランス文学者

○六月十五日(木)晴。兼坂ビルにて試写ジャンダルクを観る 夜永井  
今河盛浦松らと築地三田にてのむ

○六月十六日(金)晴。竹田博河出来小説大系の印税一部を持参す 神  
田の某茶房にて竹田とともにのむ 山本書店にて古詩源\*及天工開物\*  
を購ふ 帰途銀座にてネクタイを買ふ はせ川にて井伏河上と逢ふ

\*古詩源 中国清代の沈徳潜が「唐詩別裁集」に続き編集した先秦から隋までの

詩の総集

\*天工開物 中国明末に宋応星が書いた産業技術書

○六月十八日(日)楳雨すこしく晴る 華嚴第九章を書く 夜窪田啓作  
中村真一郎矢内原伊作来話歓談数刻

○六月十九日(月)晴。三鷹禅林寺にして桜桃忌におもむく盛会也 帰



途はせ川にて河上徹太郎\*に逢ひ吉田\*にてともにのむ 松村良一とビ  
ングをこころむ 二回あたる

\*河上徹太郎 文芸評論家

\*吉田 他に「よし田」などの表記あり

○六月二十日(火) 雨のちくもり。作品社におもむき社長山内文三に逢  
ひ太宰全集出版のことにつきて話す 栃木営業八木岡編集立会ふ 帰  
途はせ川ノンシヤランプツサンにてのむ 三島由起夫より其著怪物を  
贈らる

○六月二十一日(水) 晴。作品社にて太宰全集続刊の件を承諾す 檀一  
雄に逢ひスエヒロ及はせ川にてのむ

○六月二十二日(木) 晴。文藝春秋新社の銀座五丁目に移転したるにつ  
きその社屋を見に行く 文学界七月号を一閲するに篠船続稟の「二二  
三二」とあるべきところを恣意に「二二二」と掬りかへたるを発見せ  
り すなはち抗議書を提出す 社員数名とはせ川におもむきまたノ  
ンシヤランに立寄りさらアヤをひきつれて三田に至つてのむ 連日昏  
酔わが生活もまた乱れたるかな。この日山形沢渡恒\*より桜桃一箱を  
贈らる。応酬ひらくより桜桃箱をこぼれたり。また太宰全集続刊の件  
につき津島美知子\*に書を遣る

\*沢渡恒 詩人、作家

\*津島美知子 太宰治夫人

○六月二十三日(金) 晴。はなはだ暑し。角川書店におもむきその新刊  
書三冊を贈らる。新潮社に至り菅原新田をひきつれて銀座に出ではせ  
川にてのむ。帰途ウエストにて小憩するにその給仕の女の平峯満\*が  
女なることを知る この日小山書店より代表作全集の印税を送り来る  
\*平峯満 「三田文学」に戯曲等を寄稿、帝国劇場に勤める

鮮に上陸す 戦乱の機迫れるに似たり  
上段..



\*この蔵書印については「安部公房君鑄印」(一九五五年六月俳優座公演、安部公  
房作「どれい狩り」プログラムに「安部君について」として寄稿、「文藝」同年  
十二月号に再掲、六〇年「夷齋譚舌」収録時に同題)に詳しい

○七月三日(月) 晴。新潮社新田徹来話、文庫本処女懐胎の成れるを持  
参したる也 京都金閣寺馬鹿書生の放火のため炎上せるよし

○七月五日(水) 晴。戸石泰一小山清来話、太宰全集続刊の件につき報  
告に来れる也

○七月六日(木) 晴。夜来おとしばなし列子の稟を書きつぎて暁に成る、  
二十六枚也、新潮社におもむきて小説新潮小林にこれをわたす。夕五  
時より文藝春秋社にて文学界主催のビールの会に列席す 三島由紀夫  
に逢ふ

上段..おとしばなし列子 二十六枚

○七月九日(日) 晴。夜来海老名雄二筒井久太郎来話二人とも泊る。福  
田恆存岡本謙次郎\*来岡本よりその著ルオーを贈らる、海老名ととも  
に目黒八芳園におもむく これ久原房之助とやらいふものゝ旧宅なる  
よし その規模の貧弱料理のまづきこといはん方なし しかも房之助  
園内の一部に恋々として居住すといふ その目論見のいやしきこと唾  
棄すべきもの也 海老名また泊る

○六月二十四日(土) 晴。小山清来話、津島美知子の使者としてネクタイ  
を届けに来れるなり、ネクタイは太宰治が生前着用せる結城紬の裂  
地をもつて作りたるものにてけだし形見分なるべし

○六月二十五日(日) 晴。北鮮の兵隊三十八度線の堺を越えて南鮮に侵  
入す。いくさふたゝび来らんとす

○六月二十六日(月) 晴。前田順敬\*とともにせ川におもむくにたま  
たま坂口安吾菅原国隆来る坂口ベニシリン病なるがごとし 朝鮮のい  
くさいよいよ急ならんとす

\*前田順敬 前田純敬(小説家)のことか

○六月二十七日(火) 晴。今朝北鮮共産軍京城に攻め入つてこれを占領  
すつたふ。新潮社より文庫版処女懐胎の検印紙五千枚送り来る。夜  
銀座はせ川におもむき漫画家横山隆一泰三兄弟と会飲す

○六月二十八日(水) 雨。新潮社に文庫の検印をとゞける。角川書店に  
立寄り近江屋にてビールをのむ。夜美術クラブにして井伏鱒二の会に  
おもむく。神楽手妻などありて盛会也。帰途銀座にてのみ電車を乗越  
して横浜に至り日本橋待合かねたに泊る

○六月二十九日(木) 雨。かねたを出て支那町の料理店華勝楼に小憩す  
みやげを買ひて帰る 山下夫人すみ来たばこを届けに来れる也 夜八  
木岡英治来話 将棋をさす

○六月三十日(金) 晴。銀座に出で松坂やにてシャツを買ふ はせ川に  
て小酌 井伏鱒二に逢ふ 夜菅原国隆来話 朝鮮の風雲益々急也 ア  
メリカの海軍空軍出動す

○七月一日(土) 晴。巖谷大四竹田博田中西二郎来話、安部公房来その  
鉄筆をふるひたる印を持参す 印やや大に過ぐ 洋書に捺すべき蔵書  
印ともなさばなすべし、安部とはせ川におもむき小酌 アメリカ兵朝

\*岡本謙次郎 美術評論家

○七月十一日(火) 晴。菅原国隆来、新潮にエセエを連載することを依  
頼さる 夜ひとり銀座にてのむ

○七月十二日(水) 晴。小雨あり。角川書店鎗田来。神西清の消息を聞  
く、また窪田啓作の病めることを聞く。銀座はせ川の女あるじ中元の  
挨拶に来る。ふるしき並に玉木屋のつくだ煮を持参す

○七月十三日(木) 雨。夜はせ川にてのむ。新古今集宮内卿の歌に 聞  
くやいかにはうはの空なる風だにも松に音する習ありとは\* 天明狂歌  
はこの技巧をうばひたるもの也 心づくまに記す また戦後フラン  
スに literature engagée\*の語あり 意味の文学と訳せば如何 一般  
に芸術家は物を作る しかるにこれは物についてその特定の意味を描  
くもの也 あるひはアンガアジェを直訳して質に取られた文学とでも  
いふか契約文学なるべし 方法論的には意味規定の文学也 芸術家は  
物を作る、作品は物とかがへられたれども今や小説はむしろエネル  
ギーに似たり 世界観をうごかすもの也 小説家は芸術家なんぞには  
非ず 小説の敵はもはや芸術には非ずして物理学也(物でありまた同  
時にエネルギーたらんとす 孤独と解放―分裂 無理の場)

\*文中傍線2カ所は赤鉛筆

○七月十四日(金) 晴。プツサン岡野某来、中元の挨拶かねて借金の催  
促也 夜はせ川にてのむ 三好達治河上徹太郎に逢ふ

○七月十五日(土) 晴。新潮社大田美和来この女子は実践国文科出身に  
して菅原国隆の恋ひわたるところのもの也 河出書房竹田博来小説大  
系の印税を持参す 竹田をしたがへて銀座はせ川にてのむ

○七月十六日(日) 晴。邦訳エーリヒ・ケストナー「エミールと軽わざ  
師」新潮社こども本を読む、さしたることも無き本ながらこの筆法を

もつてコンミニスト少年物語を書かばおもしろかるべしとおもふ

○七月十七日(月)晴。窪田啓作来話。かねて Albert Camus : L'Étranger を借覧したきむねをいひたるにその本を持参して示さる。窪田頭痛にて銀行を休み静養中なりといふ。夜はせ川にのみ河上徹太郎に逢ひともプウサンにおもむく乱酔。言語道断またしてもわが生活のみだれわれながら目もあてられず

○七月十八日(火)晴。炎暑書を読むにものうし、菅原国隆新田敵来話、菅原伊東におもむき坂口安吾をたづねたるに坂口のペニシリン病回復せりと語る。余けふより数日酒をしりぞけてなにか書くことに決心すしかるに夕刻菅原国隆ふたゝび来る、すなはちこれをたづさへてはせ川におもむきて小酌。夜和田傳\*と閑談。朝鮮の戦局アメリカに非なることをいひて大笑す

\*和田傳 小説家

○七月二十日(木)晴。文芸家協会より全国書房の印税の一部を送り来る。講談社におもむき高橋清次に逢ひ福永武彦\*安部公房の原稟の件につきて話す、帰途文藝春秋社に寄りて鈴木貞と銀座にてビールをのむ。夜に入つてひとり深川におもむき宮川にて小酌す。曼魚子に逢ひ「七拳図式」\*を示さる

\*福永武彦 小説家、詩人

\*七拳図式 江戸後期の滑稽本、西村源六著。竹林の七賢の名を呼んで勝負する拳

○七月二十一日(金)晴。新潮大田美和来話、菅原より大田に托してカナディアンクラブ一壘贈らる、角川書店鎗田来話、山下夫人すみ来よね夫人とともに白木屋におもむき放出物資あれこれ購ひかへる、余終日家居カミュ・レトランデ読了、おもしろし、然れども余はむしろペストを探らむ。但ペストと比較して論ずるは当らず。この原文甚

だ平易にしてペストよりも読み易し

○七月二十二日(土)晴。夜はせ川にて徳田鈴木鷺尾中戸川と相会しとも新宿道草お梅の店におもむく。お梅狡猾にして勘定べらぼう也

○七月二十四日(月)晴。菅原国隆来話、原稟依頼也、夜はせ川におもむきたるに坂口安吾あり。文藝春秋社員とともに小岩なる東京パレスに行かむとするところ也といふ。けだし安吾巷談のために探訪記事を取らむとするもの也。すなはちその自動車に同乗して小岩に向ふ。林芙美子\*もまた同行す。東京パレスは田圃の中にあり元精巧社女子寮の建物にして今日は売笑婦の巢窟なれどもそのうすぎたなきありさま宛然書生の寄宿舎に似たり。娼婦の数は百七十人にして夜毎に三十人づつ附属のダンスホールに出場すといふ。すなはちホールを見物すバンド五人客まばらにて貧弱笑を発せしむ。ダンスは九時に終りそれより娼婦の部屋に入る、余が敵は三棟三十番の京子にして大正九年生三十歳と聞く、一時間ほどみて一同引揚ぐ、この東京パレスには永井荷風\*をりを通ひ来るとぞ、パレス内部には焼鳥屋喫茶店すし屋髪床まで軒をならべ場末の市場に似たり。小岩は蚊の名所にて一に蚊岩といふとか

\*林芙美子 小説家、詩人

\*永井荷風 小説家

○七月二十五日(火)晴。夜はせ川にて徳田雅彦鈴木貞と逢ひさらにバア二軒をのみあるく。朝鮮のいくさにアメリカ軍しきりに負けつづく。日本の運命いかゞなるべきか考へてもどうにもならぬことだけは明白也

○七月二十六日(水) \*菅原国隆大田美和来話、原稟依頼也、加治木智種よりビール・ダースを贈らる、加治木の草したる実話海賊物語を文藝春秋に紹介したるにつきその謝礼也。すなはちMJB一缶を加治木

に贈つて返礼とす。朝鮮のいくさはアメリカ軍の敗北ほとんど必至なるがごとし。いよく乱世をたのしむほかに策無し。小国の人民の窮極の権利なり

\*この日は天気の記事なし

○七月二十七日(木)昼晴。安部公房来話、ともにせ川におもむく夜に入つて雨。はせ川にて坂口安吾徳田雅彦鈴木鷺尾洋三に逢ふ。坂口伊東にかへる。帰途安部徳田並びに遅れて来れる菅原国隆を伴ひて新ばし与平にて小憩。菅原高輪まで送り来る。新潮のエセエ執筆を断りたるに依つてふたゝび催促のために来れる也

○七月二十九日(土)夜来大雨。朝鮮のアメリカ軍今や敗色明か也。昨夜おそく海老名雄二来一泊。今夕に至つてやうやく辞去す。夜はせ川にてのむ。菅原国隆大田美和来り会し原稟催促しきり也

○七月三十日(日)晴。二日ふりつゞきの雨はれたり。各所に出水のよし、菅原国隆来話。新潮にエセエを書くことを依頼されれども実際には九月号より今年末までわづか四回にして連載と称しながらその実ともなはず意にみたざればこれを書くに張合なくすなはち執筆をことわる、菅原積然たらざる色あり、やむをえざる仕儀也

○七月三十一日(月)晴。作品社におもむき八木岡英治と将棋をさす。夜はせ川にて三島由紀夫鈴木貞らと逢ひさらにエスポールにてのむ。昼角川源義来。角川文庫にて太宰治斜陽を出版するにつき余の太宰治昇天を収録したしといふ。すなはちこれを許す

○八月一日(火)晴。文藝春秋社におもむきたるに坂口安吾先日の小岩のあそびを安吾巷談に書き実名人にてあらぬことをも口走りたるよし。池島信平\*の話也。安吾の悪癖こまつたやつ也

\*池島信平 文藝春秋社の編集者

○八月二日(水)晴。田中西二郎来つてその訳著メルヴィル白鯨を示す、しかるにその書に伊藤整\*の序文ありて田中の略歴を記し中に余の森鷗外に田中の思考のあとありといへり、いやなきもちを禁じがたし、余の森鷗外には田中の思考のあと無し、余と田中とはことごとし意見相反す、鷗外を論ずるにあたり部分的には結果として見解の一致することはあれども思考の筋道はたがひに相違す、その相違が余と田中との個人的附合の場なりき、伊藤この消息を知らずしてみだりに暴言を吐く、ほとんど中傷に似たり、しかもこれを田中の訳著に記載するに至つてはむちや也。余が森鷗外の論稟を草したる当時田中は単に鷗外全集を他より借りるために奔走の労をとりたるに止まる。伊藤の言事実に当らず、右につき田中より釈明ありたれども余心中に釈然とせず、本はすでに発売中なれば如何ともしがたし、田中辞去ののち直ちに田中宛にはがきにて絶交をいひやる、此の如きもの出入さしとめ也、あと味よからず、人間附合めんどう也

\*伊藤整 小説家、詩人、文芸評論家

○八月三日(木)雨。夜徳田雅彦鷺尾洋三とはせ川ノンシャランブーケにてのむ。豪雨に濡れてかへる

○八月四日(金)雨。高橋清次来話。河盛好蔵よりその翻訳本二十五時を贈らる、これルーマニヤ人ヴィルヂル・ゲオルギウの小説也

○八月五日(土)晴に向へるかとおもふに夜に入つてまた雨なり。夕方銀座に出でんとしてバスに乗りたるに八田元夫\*に逢ふ。新協劇団に属するよし。はせ川にて河上徹太郎井上流はん\*を携へ来り歓談数刻

\*八田元夫 演出家・劇作家

\*はん 上方舞の舞踊家、武原はんのことと思われる

○八月七日(月)晴。講談社高橋清次来、ともに深川宮川におもむく

女中梅といふものとぼけたやつにておもしろし 本名新井光 浅草富士学校出身のよし 宮川にて座敷のあくのを待つ間に八幡境内にある 昔日のおもかげ無し 帰途はせ川に寄る 灘万はんに逢ふまたノンシヤランに寄る あやと新ばしにてそばを食ふ この日菅原国隆来 話 新潮にエセエ執筆を依頼さる

○八月八日(火)晴。高島屋にて欧米絵画展覧会を観る。おほく小品にして中につきレバルクの裸婦色彩みごと也。事務所にて読売新聞社員と語る。アメリカは共産党弾圧に夢中なれども絵はヘタクソ也といひて笑ふ 帰途文藝春秋に立寄り徳田鈴木中戸川印南とはせ川にてのむ 菅原新田その場に在り群像川島また来り会し閑談数刻

○八月十日(木)晴。原稟筆すすまず夜またはせ川にてのむ、島中鵬二と逢ふ、徳田雅彦とノンシヤランにて小酌

○八月十八日(金)晴、夜来小説の稟を書きつき今朝やうやく成る、妖女五十二枚 群像大久保の来れるにこれをわたす群像十月号に寄するもの也 窪田啓作来談数刻 夜はせ川におもむく 徳田雅彦鈴木貢とロータリー及エスポアルにてのむ エスポアルにて十二時すぎにアメリカ人三名押込に入り来る北原武夫とともにこれを逐ふ 徳田来泊 上段…妖女 五十二枚

○八月二十一日(月)曇、褥暑はなはだし、菅原国隆来安部公房来、夜はせ川にてのむ 中島健蔵清水昆永井龍男三好達治と逢ふ けふ安部とはもつばら画の話にてガッシュフロタージュにつきて論ず しかるに夜はまた清水昆とは日本画の話になれり

○八月二十二日(火)晴、群像高橋清次来原稟料持参す 夜はせ川におもむく 池島信平ほか井伏三好河上と逢ふ

○八月二十九日(火)曇小雨、夜来牛込二葉荘にて面貌について(夷齋

筆談一)を脱稟三十枚 いくさののちはじめて書きたるエセエ也 二葉荘にてはじめて久保田万太郎\*に逢ふ、前夜窪田啓作来 窪田サルトルの翻訳を新潮に寄すといふ 余の筆談もまた新潮に連載すべきもの也

上段…面貌について 三十枚 夷齋筆談

\*久保田万太郎 小説家、劇作家、俳人

○八月三十日(水)曇のち晴。角川源義来角川文庫より太宰治斜陽を出版せるにつきその一部を届け来る 角川の話に堀辰雄\*危篤におちいりたれどもやうやく一時の急を取止めたるよし 角川とともて作品社におもむき八木岡英治と将棋をさす 夜徳田雅彦鈴木貢とはせ川ロータリー吉野鮎エスポアルとのみあるく

\*堀辰雄 小説家

○八月三十一日(木)晴。新宿紀国屋にSartre : Les mains sales, Alain\* : Les Dieux ; Avec Balzac, Julien Benda\* : Songe d'Éleuthère を購ふ、帰途はせ川にて小酌 この朝中央公論社長島中鵬二来原稟依頼也

\*Alain アラン。フランスの哲学者、評論家(本名…エミールオーギュスト・シャルティエ)

\*Julien Benda ジュリアン・バンダ。フランスの哲学者、小説家

○九月一日(金)晴。上野美術館にして二科会展覧会におもむく。会場事務室にて東郷青児\*藤川栄子野間仁根\*安部公房と逢ふ、帰途安部夫妻をたづさへてはせ川にてのむ、さらに藤川栄子を高田馬場なるその家に訪ふ 酒を酌みて深更におよびやうやくかへる

\*東郷青児 野間仁根 ともに洋画家

○九月三日(日)晴。昨日小石川もみぢに泊りて今日かへる。一日

酔ひ臥して日ごろの疲労をわすれたり 閑にジャン・コクトオ「*difficile d'être*」を読むにこれまた一篇の好読物なりき、コクトオ五十一

代を過ぎて死のはなはだ遠からざることを感ずといふ、コクトオは一八八九年の生れなり、余一八九九年をもつて生る、コクトオが五十一代を過ぎたるとおなじ度合にて余は四十代を過ぎたり 余性疎懶いまだ死の近づけることをおぼえず 茫々然として白昼の夢にふける 笑ふべきのみ

○九月四日(月)晴。昨日ジェーン駱風といふもの阪神地方をおそひたりと聞けど今朝東京の空爽かなり。中央公論社女記者二名来、原稟依頼なり、夜文藝春秋の徳田鈴木田中戸川と銀座より新宿にわたつてのむ

○九月五日(火)晴。新潮社新田敏来、森鷗外集一冊の監修を依頼さる、河盛好蔵もまたこれに参画するよし、短篇の稟を起したれども遅々としてすすまず

○九月七日(木)晴。河出書房竹田博来 島尾敏雄の書下し小説三百枚を持参して閲読を乞はる、あづかりおく、夜はせ川にて小酌

○九月十二日(火)曇小雨。駱風来らんとして方向を転じ九州の方に襲ひ行くらしとつたふ。先日より小説の稟をおこしたるが けふ深夜におよんでやうやく成る。稟二十八枚。別冊文藝春秋に寄せむと欲す

上段…稟 二十八枚

○九月十三日(水)晴。文藝春秋別冊に稟をわたす。夜檀一雄徳田雅彦鈴木貢ほか数名と銀座にてのむ のむこと数軒にわたつて深夜にかへる

○九月十四日(木)晴。河出書房竹田博に島尾敏雄書下し原稟をかへし てそれを出版すべきことをいふ、神田におもむきて岩波書店にて理化学辞典ほか二冊を購ふ 帰途銀座にて三原及はせ川にてのむ 時事通

信にて井上勇のアメリカにおもむけることを聞く

○九月十六日(土)晴。三越劇場にて俳優座所演令嬢ジュリーを観る。千田是也\*の一人芝居のみ。事務所にて久保田万太郎伊藤熹朔\*に逢ふ。帰途小林秀雄\*三好達治井伏鱒二河盛好蔵永井龍雄と新ばし若竹およびカーボンにてのむ 昨十五日夜は坂口安吾檀一雄と銀座にて数軒にわたつて痛飲 このところ酒と縁は切れざるがごとし

\*千田是也 演出家、俳優

\*伊藤熹朔 舞台美術家、美術監督。千田是也の兄

\*小林秀雄 文芸評論家

○九月十八日(月)雨のち晴。新潮社小林博菅原国隆の案内にて新宿セントラルにストリップショを観る。ヒロセ元美を楽屋に訪ふ、帰途酒場いすずにてのむ

○九月十九日(火)晴。越後国三条の筆師渡辺健一郎といふもの岸田國士\*紹介にて訪ね来る、すなはちリス一本イタチ一本、ヒツジ大小二本を購ふ、ヒツジの芯に黒き剛毛を入れたるは猪毛なるよし、筆の毛は貂を以てよしとす、但貂の尾のみを取るゆえ高価なりとぞ 渡辺氏は三条の名家にて先代より筆師也 鉄斎\*むかしその家に泊りて今に遺墨をとゞむと健一郎咄

\*岸田國士 劇作家、小説家、翻訳家、演出家

\*鉄斎 富岡鉄斎。幕末〜大正期の文人画家、儒学者

○九月二十一日(木)晴。上野美術館にして新制作派展覧会ヴェルニサージュ\*を見る、帰途はせ川におもむくに徳田雅彦中戸川宗一と逢ひさらにカーボン、エスポアルをめぐつてのむ 林美美子北原武夫と逢ふ \*ヴェルニサージュ 内覧会のこと

○九月二十二日(金)ときどき雨。新潮大田美和来話

○九月二十四日(日)晴。高橋邦太郎\*来話。じつに久しぶりの男也、閑談教刻、安部公房来話、その小説草藁持参す。安部はその住居立退を迫られて困却のよしを語る

\*高橋邦太郎 N H K職員、翻訳家 石川の小学校時代から東京外国語学校に至る同級生

○九月二十五日(月)晴。中央公論社長島中鵬二来話、夜はせ川にてのむ、河上徹太郎城左門\*に逢ふ、また芥川比呂志\*に逢ふ、芥川とともにどこやらのバーにてのみたるやうにおぼゆれどもその後は前後不覚なり

\*城左門 詩人・小説家 城昌幸の別名で、ミステリーでも活躍

\*芥川比呂志 俳優・演出家 芥川龍之介の長男

○九月二十六日(火)晴。菅原国隆新田敝来話、菅原にエセエ原藁十三枚までわたす、新潮に寄せむがために書きかけのものも、新田は鴉外集編纂依頼也

○九月二十八日(木)曇。夜来エセエ娯楽について三十枚脱藁新潮大田美和にこれをわたす 夜徳田雅彦鈴木貢とはせ川ひらのエスポールにてのむ

上段・夷齋筆談二 娯楽について 三十枚

○九月三十日(土) \*昨夜三好達治とともに新ばし若竹及銀座はせ川にてのみ深夜帰宅すれば海老名雄二来泊するあり、戸石泰一新田敝来話 \*この日は天気の記事なし

○十月二日(月)曇。新潮新田敝来話、森鴉外集上下二巻の編纂について指定をあたふ、夕四時より東京美術倶楽部にして今日出海の会におもむく盛会也 久保田万太郎と語る

○十月三日(火)晴。安部公房来話、新居に移転せるよしを告ぐ、但この新居他家の物置なりといふ、大門一男来話、原藁依頼也 大門カ

\* Henri Troyat アンリ・トロワイヤ。フランスの小説家、伝記作家、随筆家

\* 田辺茂一 紀伊国屋書店創業者

\* 八木義徳、野口富士男 いずれも小説家

○十月十日(火)雨。大門一男来。原藁催促也、安部公房来話、新居の造作をみづから按配する苦心を語る、安部の先日持参せる小説草藁を批評して返す

○十月十一日(水)あかつき雨やまず、夜来おとしばなし管仲二十枚藁成る、夜はせ川にて徳田雅彦と逢ひさらに門およびエスポールにてのむ 上段・おとしばなし管仲 二十枚

○十月十二日(木)曇。大門一男来、おとしばなし管仲の草藁をわたす、大門余のもとに来ること三年このたびはじめて寄藁の約を果す 小説公園\*に掲載すべきもの也 新潮より二万円借 大田美和これを持参す 大田をつれてはせ川におもむきたるに菅原国隆たまたま来り会す さらにカーボンにてのむ

\* 小説公園 文芸誌。六興出版発行

○十月十三日(金)晴。夕読売ホールにて笈田幸吉門下生のピアノ演奏会あり、窪田啓作娘眞樹子七才メンデルスゾーンを弾きまた自ら作曲せる小曲を弾く、すなはちこの会におもむく、少女ちとの才あるに似たり 帰途はせ川にて眞樹子窪田夫妻及加藤周一夫妻と小宴 眞樹子に清月堂の菓子を贈る

○十月十六日(月)晴、菅原国隆来話、大門一男来話、おとしばなし原藁持参。よねとともに大映試写室にてダニイ・ケイ主演映画なんとかを観る、帰途花馬車にて小憩 よねをかへす、はせ川にて徳田雅彦鈴木貢と逢ひさらりロータリーにてのむ

○十月十七日(火)晴。銀座にてシャツを買ふ。夜徳田雅彦鈴木貢と若

ナディアンクラブ一壘持参す たちどころにのむ 新潮社より森鴉外編纂費若干を届け来る、夜和田傳と閑談、酒のはなしを聞く、ミリンは三河の九重、カニの缶詰はF20をよしとすといふ

\*大門一男 東宝を経て六興商事出版部(のちの六興出版)を設立。翻訳も行う

○十月四日(水)雨。神田大屋書店にて朱楽菅江\*狂歌大体源真樹\*興歌考を購ふ 帰途はせ川にて小酌

\*朱楽菅江 江戸後期の戯作者・狂歌師、「狂歌大体」はその著書。「狂歌百鬼夜狂」(夷齋清言)参照

\*源真樹 本名林国雄、江戸中・後期の国学者。真顔に狂歌を学び、狂歌を「興歌」と呼ぶことを主張した

○十月六日(金)晴。夕六時よりピカデリー劇場にてヘツダガブラー\*の上演を観る、終演後レヴァンテにて千田是也田村秋子\*らと語る。帰途千田とともにエスポールにてのむ

\*ヘツダガブラー イプセンの戯曲「Hedda Gabler」のことか

\*田村秋子 女優

○十月八日(日)晴。窪田啓作来話。小林博来話、小林は小説新潮の原藁依頼也。窪田とともに新宿紀国屋におもむきフランス書を見

る Paul Claudel\* : L'oeil écoute, Sartre, Rousset\*, Rosenthal\* :

Entretiens sur la politique, Alain : Les idées et les âges, Henri

Troyat\* : L'araigne を購ふ、この店の喫茶部にて田辺茂一\*八木義徳\*

野口富士夫\*に逢ふ

\* Paul Claudel ポール・クロードル。フランスの詩人、劇作家 外交官として

駐日大使も務めた

\* Rousset ダビド・ルセ。フランスの作家、政治活動家

\* Rosenthal ジェラルド・ローゼンタール。フランスの法律家

竹カーボンにてのみさらにエスポール銀馬車におもむく。エスポールにて林房雄\*北原武夫井上友二郎\*に逢ふ いささか酒につかれたり

\* 林房雄 小説家、文芸評論家

\* 井上友二郎 小説家

○十月二十二日(日)晴。水道橋能楽堂にて下掛宝生会演能を観る、小山書店の招待也、自然居士シテ宝生九郎ワキ松本謙三。狂言米市野村万蔵、紅葉狩シテ観世華雪ワキ宝生弥一、会場にて三好達治に逢ひともに神田及新宿にてのむ

○十月二十三日(月)晴。菅原国隆来話、二十七日夜の日響演奏会の切符三枚を都合して届け来れる也、この演奏会には来朝中のレヴィ氏の出演あり、レヴィ氏のピアノ先日ラヂオにて聴きたるのみなれどもそのヴィルチュオジテ\*感ずべきもの也 右切符の一枚を徳田雅彦におくる 夕文藝春秋社楼上にてビールをのむ集會に列す

\*ヴィルチュオジテ virtuosite 妙技の意

○十月二十七日(金)晴。夕日比谷公会堂にてラザール・レヴィのピアノを聴く、シューマン協奏曲及ヴァリエーション、妙技也 ただ日響オーケストラの拙なるを憾む 帰途徳田雅彦とはせ川及エスポールにてのむ 公会堂にて窪田啓作に逢ひたれども出口にてその姿を見うしなひたり

○十月二十八日(土)晴。先日来書きつぎたる夷齋筆談三沈黙について三十二枚の藁成る、新潮十二月号のため也

上段・沈黙について 三十二枚 夷齋筆談三

○十月二十九日(日)晴。三越劇場にて木下順二\*作夕鶴の上演を観る。ぶどうの会と称するしろうと芝居にて立女形は山本安英\*也。帰途三好達治市原豊太\*とビールをのむ 夜に入つて雨。

\* 木下順一 劇作家、演劇評論家

\* 山本安英 女優、朗読家

\* 市原豊太 フランス文学者、随筆家

○十月二十九日\*(月)曇。東宝試写室にてフランス映画ヴェローヌの恋人を見る、つまらなし、藤川栄子桂ゆき子\*に逢ふ 夜菅原国隆徳田雅彦と銀座のあちこちにのむ 深夜豪雨

\* 二十九日 三十日の誤記と思われる

\* 桂ゆき子 桂ゆき。画家。初期はユキ子とも名乗っていた

○十月三十一日(火)雨。夕中央大学講堂にラザール・レヴィのピアノ演奏を聴く、曲はクープラン、フランク、ドビュッシイよりはじめてフランス現代音楽におよびシャブリエに終る。ヴィルチュオオジテ賞するに堪へたり、帰途同道の徳田雅彦と銀座にてのむ

○十一月一日(水)晴。あたたかし、小説新潮小林博来話、原稟依頼也午後二時より文藝春秋新社引越祝の宴あり その宴に列す、帰途新宿紀之国屋に立寄りてフランス書を購入ふ Camus : Noces 及 Les Justes, Sartre : Les Jeux sont faits 及 La Putain Respectueuse, 田辺茂一とや

きとり屋にてのみまた紀ノ国屋喫茶室に於ける三田文学の会をのぞきて匆々に帰る

○十一月二日(木)晴。夜三越劇場にて文学座所演岸田國士作「道遠からん」を観る。芸の無き見世物也。坂口安吾夫妻と廊下にて逢ふ。坂口愛犬コロイ病死せりといふ。芝居はねてのち鍛冶町の喫茶店にて文人役者おほぜいにてビールをのむ

○十一月六日(月)曇。文芸列車といふ催しにて文藝春秋の依頼により四日正午東京駅発信州戸倉にむかひ小諸の藤村碑を見て五日夜帰る。至るところサイン責めにて俗悪呆れはてたり 日本人ことごとく狂せ

来訪のよし

上段：望楼 二十枚

○十一月十五日(水)晴。竹内読売記者、竹田博、安部公房来話 夜はせ川にて小酌この店のたべもの近來とくにまづくなりて舌これに堪えず、不心得也、

○十一月十六日(木)晴。小山清来話。一葉のたけくらべに倣つて大正版の吉原を書かんとするよしを語る。八木岡英治より来信、作品社の没落を告ぐ

○十一月十八日(土)雨。夕六時より神田共立講堂にてラザール・レヴィの告別演奏会あり、よねとともに雨をついてこれにおもむく、Couperin\* : Les Lys naissants, Les Rozeaux. Schumann\* : Kreisleriana. Liszt\* : Deux Legendes. Deux piano : Mozart\* et Chabrier\*。連弾は原智慧子、安川加寿子也 中についでシューマンもつともよし、帰途菅原国隆および池亀某女とともに銀座はせ川にて小酌

\* Couperin (フランソワ・クープラン)、Shumann (ロベルト・シューマン)、Liszt (フランツ・リスト)、Mozart (ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト)、Chabrier (エマニュエル・シャブリエ) いずれも作曲家

○十一月二十日(月)晴あたらしか也 島尾敏雄書おろし小説「贗学生」のために短評一枚を書きてこれを河出書房竹田博にあたふ、神保町きやんごるにおもむきてハイボールをのみ小憩 扇二本に句を書きてあたふ ときに夕刻神田の町はなはだ暗し 村口書房に立寄りて墨水遊覧誌\*一冊を購入ふ

\* 墨水遊覧誌 天保14年、公家徳大寺大納言実堅・日野前大納言資愛が幕府船で隅田川遊覧を行った際の記録。両卿および幕府側諸家の詩歌が入る。著者は花屋敷鞠場。「墨水遊覧」(江戸文学掌記)参照

るかのごとき感あり、今後かかる催しには一切参加すべからず。今朝新田徹来、森鷗外集上巻解説七枚及背徳者訳稟を訂正せるものを手交す 小諸の城址公園にて一句 信濃路の紅葉は早し藤村碑 その他いくつか書かされたれどみな忘れたり、帰来酒のせりもありていささか疲る、夜朱楽菅江狂歌大体を読了す

\* 背徳者 アンドレ・ジッド作品

○十一月八日(水)晴。よねと東宝映画試写室にフランス物の「Le Torrent」\*を観に行きたるに藤川母娘および河辺健一と逢ふ、転じて夕方より朝日講堂にフランス将来の映画ロダン及ゴッホを観る。帰途有楽町にて藤川河辺ともにビールをのみまた茶を喫して閑談す、帰来するに留守中の来客に八木岡英治、中央公論社某女創元社某女及銀座はせ川の女主人也、八木岡は作品社没落のよし、はせ川は昨日余がその不心得を叱せるが故に挨拶のための訪問也、ツクダ煮とカバヤを持参す 岸田國士よりその著「道遠からん」を贈らる、ここまで書いて甚だねむたし

\* Le Torrent フランス映画「Torrents」(邦題「憂愁夫人」、1950年12月日本公開)のことか

○十一月九日(木)晴。菅原国隆来話、島中鵬二来話。島中は原稟催促はなはだ急なれどもこのところ書くに懶く気がすまざるよしを答へおく、創元社袖某女来これは雑文の依頼なり即座にことわる、客のためにいそがしく終日出でず、夜カミュNoces 読了 小冊子ながら内容ゆたかにして感ずるところ少なからず、いづれ書くべし

○十一月十三日(月)晴。十九日土曜日の夜より島中鵬二の案内にて牛込双葉荘に泊り今夜かへる、「望楼」二十枚書く、中央公論特集に寄せむがため也、双葉荘にて井伏鱒二に逢ふ、留守中安部公房島尾敏雄

○十一月二十一日(火)晴。夜に入つて雨、八木岡英治来話 作品社の没落状況を聴く、将棋をさす

○十一月二十四日(金)雨のち晴。菅原国隆来、原稟催促也、安部公房来、その木彫三点を見せらる、展覧会に出品するよし也

○十一月二十七日(月)雨。菅原国隆来、書きかけの草藁の一部をわたす。斯波武来、山陽\*五言絶句の書幅を持参す これを購入ふ

\* 山陽 頼山陽。江戸後期の歴史家・思想家であり、漢詩や画もよくした文人  
○十一月二十九日(水)雨。夜来新潮連載のエセエの稟を書きつき既に成る。恋愛について三十五枚、新年号に寄稟せむとす、新潮大田美和来話、すなはち原稟をわたす、また新潮社出版部新田徹来森鷗外集下巻の目次をわたす、夜大雨の中に藤川栄子耀子の母子来話閑談数刻これが帰るを門に送れば月明か也

上段：恋愛について 三十五枚

○十一月三十日(木)晴。大田美和原稟料をとげ来る 夜窪田啓作来話、新潮社よりカミュのエトランジェ\*の翻訳を依頼されたるにつきその挨拶也 窪田かへらんとするにまた雨ふりはじむ ちかごろ天候さだまらず寒さやうやく迫る

\* エトランジェ「異邦人」

○十二月一日(金)雨。長野県小諸町荒町二葉楽器店より余の小照二葉送り来る さきごろ文芸列車にてその地にあそびたるをりひとの撮影したるもの也 夜ははせ川にて小酌

○十二月六日(水)晴。昨日井澤義雄神戸より来泊、昨夜井澤をとまなひてはせ川にてのむに徳田雅彦に会ひとともにジャポン、エスポアルにて小酌深夜かへる 徳田もまた来泊す はせ川にてうなぎの看板を書くうなぎもありてはせ川の酒 たれかにあとをつけてもらふつもり也

○十二月九日(土)晴。六日夜より小石川もみぢに泊り文藝春秋別冊のために小説演技二十二枚今晚稟成る。帰宅。井澤は留守中帰郷せりといふ。しかるに夜に入つて井澤再来、他所に泊りたるよしにてすなはちこれをともしなひてはせ川にて小酌、井澤かへる

上段・演技二十二枚

○十二月十日(日)晴。講談社よりミカンの箱を送り来る

○十二月十二日(火)晴。神田の古本屋にて Julien Benda : Le rapport de Dieu をあがなふ、帰途はせ川にて小酌

○十二月十四日(木)晴のち雨。昨夜おそく海老名雄二来泊、その関係せる泰むきの貿易会社とやら没落したりと語る 歳寒海老名も弱り目なるべし 今朝匆々に去る 夜韓非子を読む

○十二月十六日(土)晴。安部公房妻真知子来、安部病気のよし これに見舞をおくる。夜はせ川にてのみ鈴木貢とともにノンシヤラン及エスポアルにてまたのむ 深夜雨に打たれて帰宅 雷雨也

○十二月十七日(日)晴。新潮社より発行すべき森鷗外集下巻の解説八枚草し畢る

○十二月十八日(月)晴。文学座稽古場におもむきて三島由紀夫の邯鄲福田恆存の堅塁奪取の上演を観る 帰途はせ川にてのむ

○十二月十九日(火)晴。新潮社新田来、鷗外集解説をわたす。夜はせ川にて小酌。徳田雅彦菅原国隆と逢ふ

○十二月二十一日(木)雨のち晴。昨夜徳田雅彦田川博一らと銀座はせ川にて会しゴールデンゲートにおもむきまた鳥森若竹\*に至り連飲いささか酔ふ 徳田来泊今朝かへる、新潮社員某女来、翻訳背徳者の校正を一閲してかへす、昨日津島美知子夫人来ウイスキーと花を贈らる、歳暮の挨拶也

\*鳥森若竹 新ばし若竹などの表記もあり

○十二月二十二日(金)晴。新潮連載のエセエの稟を書きはじむ、夜菅原国隆来話

○十二月二十三日(土)晴。銀座はせ川女あるじ来、歳暮挨拶也、蒲鉾を贈らる。戸石泰一來話、檀一雄の近況を聞く、夜はせ川にて小酌、文藝春秋新社のパーティーに立寄りてすぐ帰宅 留守中新潮社より森鷗外集上巻五冊届ける

○十二月廿五日(月)晴。河出書房竹田博来、島尾敏雄著廣学生の成れるを持参す、夜はせ川にて小酌 また新ばし夏目にてのむ

○十二月二十六日(火)晴。新潮社員に背徳者の校正をわたす 夜徳田雅彦と銀座に数件をめぐつて忘年会を催す

○十二月二十七日(水)晴。菅原国隆来、夷齋筆談権力について九枚わたす、未完なれども期日迫つて詮方なし 来月々々これを書きつぐべし プサンより借金取来る、少額をあたへて去らしむ 残金なほ八千余円ありといふ 夜に入つて風すこしく寒し

上段・夷齋筆談 権力について 八枚 未完 附記一枚

○十二月二十九日(金)晴。新潮社より暮の金若干をとどける、夜徳田雅彦鈴木真菅原国隆と銀座数軒のみあるく、行くところ売文の徒に逢はざることなし エスポアルのるみ女よりネクタイを贈らる この日神田村口にて鞠場\*が都鳥考を購ふ

\*鞠場 花屋敷鞠場。骨董商・本草家・文人。姓は佐原、北野など。文化年間、隅田川畔の寺島村に植物園「百花園」を開く

○十二月卅日(土)小雨、山形なる沢渡恒より干柿を送り来る。返信に干柿や小雨の軒の薄あかり、安部公房その弟を伴ひて来話 世紀画集一帖を贈らる

○十二月三十一日(日)晴。新宿紀ノ国屋にて Albert Camus : Le Mythe de Sisyphe, Correspondances (Gide\* et Claudel) を購ふ。銀座よし

田にて小酌そばを食ふ。ときすでに夕刻さらにはせ川におもむきまた支那料理某亭に行き最後、アカンサスをもつて本年の飲み納めとす、この夜の仲間は今日出海永井龍男城左門巖谷大四ブーチャン及徳田雅彦也 雑然また陶然としてここに一年すぎたり

\*Gide アンドレ・ジッド(ジイド)。フランスの小説家

昭和二十六年 一九五一年

○一月一日(月)晴天寒はなはだしからず、家居して床に鉄斎を掛けひとり酒を酌む、さひはひに訪客のわづらはしきもの無し、夷齋筆談権力について続篇の稟を起す 戯詠 初からずい津久の空に翔けるらむ 酒爰元至高輪の春

○一月二日(火)晴。終日無事

○一月三日(水)晴。ローレンス「息子と恋人」(吉田健一訳)読了最後に母を突き放して外国に飛び立つやうに書きたらばよかりしならむ 原作のままにては恋愛観念は閉鎖されたるごとくにておもしろからず 夜みき年賀に来る、海苔を贈らる

○一月四日(木)晴。三越劇場にて俳優座公演桜の園を観る。帰途三好達治と鳥森若竹におもむきまたカーボンに転じてのむ 深夜帰宅 海老名雄二来泊こいつ留守中に本をかきまはして不届な奴也

○一月五日(金)晴。海老名かへる、伊藤濱子来話、カンヅメを贈らる。昨夜の酒にてあたまおもし

○一月六日(土)晴。料亭濱田女あるじ来話、時津風後援会に入会をた

のまる。八木岡英治松村良吉来話 ついで池田よし来ベーコンチーズを贈らる、よしにアカンサス宛紹介状を書く

○一月七日(日)曇。終日家居。夜佐々木基一來話。酒をくみて歓談時の移るを忘る、佐々木は富士見ヶ丘に家を新築すべしといふ

○一月八日(月)晴。小山清来話。元旦にころみたる戯墨を小山清に托して津島美知子に贈る、菅原国隆来話、池田よし来話、終日客と対談に疲れたり

○一月十日(水)雪、雨まじりに少しつもる。濱田某女来話 筒井よし子のうはさを聞く、濱田より酒とり貝セルリをおくらる。窪田啓作来話。窪田は現住所の立退要求にて当惑すと語る

○一月十一日(木)うすぐもり、山川朝子来話河出書房文藝編輯部につとめることになりしと語る 胃を病むよし 河辺健一來話 夕方文藝春秋社におもむく 窪田啓作に文学界に執筆することをすすむるはがきを出す 夜はせ川におもむく 先日この店の看板のためにうなきもありてはせ川の酒と書いておきたるに傘雨\*宗匠の附句あり 冬の夜の風情うれしき柳かな いつまでも風邪の抜けない咳をして、これに応へてざれ歌二首しるす 柳かけ踏みたかへたるほろ酔の足おほつかな千鳥にも似す また かせの名は野風谷風すまふ取せきとめあへぬ恋の山風 若竹およびカーボンにも立寄りてかへる

\*傘雨 久保田万太郎の雅号

○一月十二日(金)晴。終日門を出でず 夜窪田啓作来話

○一月十三日(土)晴。島尾敏雄福島より神戸にかへる途中とてたづね来る 胃アトニー療養のため蔵王の湯におもむけりと語る 酒も肉も口にしがたしと聞きわづかに紅茶にてしばらく閑談

○一月十四日(日)晴。風寒し。籠居筆すゝまざれども随筆の草稿たど

たどしく書く。感あり、頑固とは何を理解しないかといふことではな  
く何を撰択するかといふことである

○一月十七日(水)晴。昨日宮川曼魚より来信、新潮二月号 余が随筆  
の末尾に病弱吐血の語を措きたるにその筆の綾なるを知らず曼魚子見  
舞状を寄せ来れるなり 返信に一句添へてやる 風邪ひきの恋とは見  
えぬしやがれ声 夜海老名雄二来話、筒井夫婦わかれについての採め  
ごとを聴く よねこの二日ともひとりにて活動写真を観に行く

○一月十八日(木)晴。菅原国隆来話。原稟催促也。終日無事。深夜に  
およんで随筆の稟を草し終る。これ新潮三月号に寄せむがため也、権  
力について(承前) 三十八枚夷齋筆談六

上段：権力について 承前 三十八枚 夷齋筆談六

○一月十九日(金)晴。新潮社大田美和来、夷齋筆談六の原稟をわたす。  
夜はせ川にてのむ。先日の傘雨の句に附けて 身はやつせとも松風を  
聴く。しかれども前句に風邪とあれば松風は不束なり改むべし

○一月二十日(土)晴。あたゝかし。大田美和来。元東京新聞記者平岩  
来、これはさきにレツドパーチにて解雇されたものなれどもその処  
分不当の故をもつて復職運動のため署名帖に記入を求めらる。運動妥  
当なりとみとめてこれに署名す。展望編集部員石井来。談話記事を取  
るための訪問なり。すこし話す。

○一月二十一日(日) \*昨夜はせ川におもむき前夜の附句をあらたむ、  
身は躰せども京訛なるとす。それよりアカンサスにてのみ また鳥森  
若竹におもむきたるに三好達治座にあり吉川幸次郎\*貝塚茂樹\*桑原武  
夫\*を紹介さる。さらにカーボンに転ず 深夜かへり今朝昏々として  
起き出づることをえず 夜に至つていさゝか回復す 深夜フォーク  
ナー「サンクチュアリ」の邦訳を読了す

二十一枚。午後文藝春秋社におもむき坂口安吾菅原国隆のたまたま来  
れるに逢ひすなはちともにはせ川にてのむ。坂口伊東にかへる。徳田  
鈴木とともにアカンサスにてのみ帰途若竹に立寄りて帰宅  
上段：さらば垣 二十一枚

○二月一日(木)晴。夜はせ川にて城左門に逢ふ。はせ川紹介にて昭和  
通の髪床におもむきたるにこの界限にも似ず当節は田舎にもあらざる  
べきほどの貧弱なる床屋也、いかにもはせ川の紹介しさうなところ也。  
アカンサスにおもむき幸子と吉野すしを食ひに行く。エスポアルに立  
寄りてかへる

○二月五日(月)晴。東宝試写室にてフランス映画パルムの僧院を観る。  
帰途はせ川にて藤川栄子母子及びよねにうなぎを餐す。中島健蔵浦松  
佐美太郎\*に逢ふ。酔余真杉静枝\*をのしつてこれを怒らしむ。なげ  
くべし。アカンサスに立寄りてかへる。

\*浦松佐美太郎 ジャーナリスト・評論家・登山家  
\*真杉静枝 小説家

○二月六日(火)晴。新潮社に酒井を訪ねて背徳者印税の一部を借りる。  
神田井上書店にて文心彫龍を購ふ。帰途はせ川およびアカンサスにて  
小酌。けふは早めに帰宅。真杉静枝に託びの手紙を出す。神田月曜書  
房に安部公房の本の出版につきて推薦の挨拶をいふ。

\*文心彫龍 『文心彫龍』か。中国六朝時代に梁の劉勰が著した文学理論書

○二月七日(水)晴。新潮社より森鷗外集下巻五冊届け来る。終日家居。  
○二月九日(金)曇小雨。昨夜小林秀雄と鳥森若竹にて逢ひともにアカ  
ンサスにてのみ大酔して帰途徳田雅彦をつれて高輪濱田におもむき酒  
宴払暁におよぶ。混沌として人事を弁せず、ただいたづらに肉体のお  
とろへたることを感ず

\*この日は天気の記事なし

\*吉川幸次郎(中国文学者)、貝塚茂樹(中国史学者)、桑原武夫(フランス文学者、  
評論家) いずれも京都大学で教鞭をとった京都学派

○一月二十二日(月)晴。日本生命館にて文学界主催スエーデン映画の  
試写を観る。つまらなし。けふよねの誕生日なり、すなはち帰途はせ  
川にとまひてうなぎを餐す。よねをさきに帰したるのち鈴木貢とア  
カンサスにおもむく。鈴木腹痛にて酒なかばにしてかへる。ひとりエ  
スポールにおもむく、乱酔

○一月二十三日(火)晴。またしても宿酔昏昏たり。伊藤はま来話。濱  
田初枝来話。安部公房にはがきを出す

○一月二十四日(水)晴。銀座東宝試写室にてコクトーの映画オルフェ  
を観る。おもしろし。よね藤川母娘とともにせ川にてうなぎを食ふ。  
余は別に徳田鈴木田川とともにせ川よりアカンサスに転じてのむ、  
乱酔前後不覚也

○一月二十五日(木)晴。池田生子来話。アカンサスの店に出ることに  
話きまる。

○一月二十七日(土)晴。濱田に鈴木徳田中戸川を招いて酒盛を催す、  
さらにアカンサスにおもむき大いに酔ふ。よしをつれて新ばしの若竹  
およびカーボンにてまたのむ。この日安部公房妻を伊藤濱子に紹介し  
て職に就かしむ。新潮社よりジイド背徳者三冊を届け来る。夜留守中  
に菅原国隆金を届けに来れども逢はず

○一月二十八日(日)晴。よし来話、アカンサスにつとまらざることを  
いふ。よねとよしとをつれて濱田にて小酌

○一月三十一日(水)晴。さる二十九日午後より鈴木貢案内にて渋谷  
東京におもむき文学界三月号のために短篇一つ今朝成る。さらば垣

○二月十日(土)晴、春暖に似たり。よし来話。よしの誕生日とてこれ  
を濱田に招じて楼上にて小酌。

○二月十二日(月)晴。安部公房来話。安部をとまひて鳥森若竹にて  
のむ、たまたま城左門に逢ひすなはちともにはパー数軒をめぐる最後に  
城を高輪濱田につれ来て泊らしむ。

○二月十三日(火)晴。講談社高橋清次来。原稟依頼也 ウィスキー一  
本を贈らる。高橋をとまひて濱田におもむきたるに城左門いまだ楼  
上にあり鼎座してビールをのむ 城かへる。夜濱田初枝来話。鯉をお  
くらる。鯉こくにして食ふにその味美也。海老名雄二来。すぐに追ひ  
かへす。こやつ近頃酔態はなはだ下品也

○二月十四日(水)朝よりふり出したる雪 夜に入つてさらにはげしく  
風これに加はつて吹雪となる。昼菅原国隆来話

○二月十五日(木)晴。夜来の積雪三尺におよび十五年ぶりとやらにて  
市中の交通ほとんど杜絶したるがごとし。終日出でず炬燵して山中  
人饒舌\*を読む、これ明治十二年板の袖珍本也 画中詩人咏物画家写  
生同一機軸の句あり、果して然るや否や、また然りとすると咏物写  
生のこと今日に於て何の芸術的意味ありや考ふべし。夜徳田雅彦来話  
ともに濱田におもむきて小酌、徳田同所に泊る

\*山人饒舌 田能村竹田の画論書。翌月脱稿の「風景について」(『夷齋筆談』  
冒頭にも引用あり)

○二月十九日(月)晴。さる十六日夜より濱田楼上に泊り別冊文藝春秋  
二十号のために小説の稟を起し今日成る。常陸帯二十五枚

上段：常陸帯 二十五枚

○二月二十一日(水)晴。夜来ジイドむかしばなし十六枚の稟を起しあ  
かつきに成る。昨夜夕刊にアンドレ・ジイドの訃をつたへたるに依り

文学界の需めに応じて草せるもの也 実情をいへばアカンサスの勘定書すこし大中にて文藝春秋社宛に届け来りたるがため也。夜徳田雅彦鈴木貢とともにアカンサスにてのみそれより烏森の小料理屋におもむく、これ男色の店也、屋根低き二階よりおり来るものあつて余に声をかく、すなはち三島由紀夫也、はたせるかなの感あり、さらに徳田案内にて西銀座バーボンにおもむく。オールストリップの景物あり。帰途濱田に立寄りて小酌。たちまち眠気をもよふしてその場に臥す。

上段…ジイドむかしばなし 十六枚

○二月二十二日(木)晴。昼のうち風強くしてあたゝかし 濱田に半日をすぎす 菅原国隆来話、菅原妹と濱田娘と白百合にて同窓のよし

○二月二十三日(金)晴。濱田初枝来話。このひと山田有勝\*を識れることを聞く。夜はせ川にて小酌

\*山田有勝 詩人

○二月二十六日(月)晴。夜湘南電車不通にて窪田啓作北川正来泊。余かへつて濱田におもむきて泊る

○三月一日(木)晴。去る二十六日夜より濱田に滞在 今朝随筆の稟を草し了る 夷齋筆談七風景について十八枚也 大田美和の来れるに手交す この間新潮社よりジイド全集背徳者印税をとげ来る。また新宿紀ノ国屋におもむきつ Andre Gide : Literature engagée 一冊をあがなふ 上段…風景について 十八枚 夷齋筆談七

○三月三日(土)晴。神田山本にて秘伝花鏡\*六冊を購ふ。よね余のため背広一着を購ひ来る。濱田より桜もちをおくられたれば若竹のちらし鮎をおくる

\*秘伝花鏡 陳漫により清代初期に著された園芸書。日本では『秘伝花鏡』と称することが多い

\*仲田菊代 画家、仲田好江の名でも活動、女流画家協会創立メンバー

\*藤島武一 画家

○三月十六日(金)晴。昨夜徳田雅彦濱田に来泊 今日よし来、よねとよしとを携へて烏森若竹にて小酌。鈴木貢来り会す、転じて鈴木とアカンサスにおもむく。今朝小牧近江\*より来信、「ジイドむかしばなし」を読み疇昔の交をおもひおこしたるもの也 この尺牘小牧の人の柄を匂はせて甚だ佳 故人の情掬するに堪へたり

\*小牧近江 フランス文学者・社会運動家

○三月十七日(土)晴。小牧近江に書を遣る。新宿紀ノ国やにおもむきたるにフランスの本いまだ届かず、池島信平真杉静枝草野心平\*に逢ふ 池島とお龍にてのむ 夜よし来話

\*草野心平 詩人

○三月十八日(日)晴。昨夜より今夜におよび荀子\*と淮南子\*とを読む。荀子はむかし読みたるほどにおもしろくおもしろ。淮南子は神仙に関する数篇を佚したることを憾みとすべし

\*荀子 中国戦国時代末の思想家で儒学者の荀子の思想を後代がまとめた書

\*淮南子 中国前漢時代に編纂された思想書

○三月二十二日(木)曇。うす日さす、鳥尾敏雄安部公房来話、文藝春秋新社におもむき鳥尾を鈴木貢に紹介す、同社にて種痘す、濱田長女久子上野音楽学校声楽科の入学試験に合格したるをもつてこれに祝の品をおくる

○三月二十四日(土)晴。昨夜文藝春秋招待にて帝劇に「モルガンお雪」といふ見世物を観る。その帰途徳田雅彦とともにお毘代ジャポネスポウルを歴訪し最後に井上友一郎と車にて渋谷東京におもむく、井上はかへり徳田とふたりにて泊る、今朝帰宅、昨夜ルミにキスを強要され

○三月六日(火)曇。夜に入つて雨。昨夜海老名雄二または乱酔して来る。匆匆に追ひかえす。こいつ東海汽船会社より解雇されたるのちはこの一年ばかりは生活すつかりぐうたらになれるが如し。余をさそつて濱田におもむきてのまんと言ふ。唾棄すべし、すなはち書を遣して今後深夜の来訪を拒絶するむねを伝へおく。これにてきかざれば絶交のほかなし

○三月七日(水)晴。今日は余の誕生日也。濱田初枝来、祝ひのためとて鯛塩焼一尾、豚蒸焼一皿、海老てんぷら一皿、蒲鉾野菜盛合せ一皿を贈らる。山川朝子来話。山川をともしなひて銀座文藝春秋社におもむく。昨夜三階編輯室にて小火を出したるにつきその跡を見物す。山川と花馬車にてアイスクリームをのむ。山川よりその著小公子を贈らる。さらにはせ川におもむくに池島信平徳田雅彦巖谷大四来り会し 転じて一同新宿に車を走らせてお龍にて痛飲す、またさらに神楽坂松ヶ枝におもむく、池島亭主也。徳田巖谷山川をつれて濱田にかへり来つてまたも小酌 払曉四時に至る。余ひとり家にかへり三人濱田に泊る。

○三月八日(木)晴。あたゝかにて春来れるがごとし、濱田にて巖谷山川とスキ焼にて小酌、徳田は社用とて早くかへりたり。二人とともに麹町角川書店におもむき堀辰雄の著書を岸田國士に送るべきことをいふ。角川余を招じて神田のてんぷら屋天政にてのむ。この店の海老よろし。帰途銀座空也にて菓子折をとりのへてこれを濱田に贈る。

○三月十日(土)雨。よし来。すなはちよねとよしとを携へて新ばし若竹にて小酌。またアマンドにて小憩。銀座松坂やにてよねに雨傘を買ひあたふ。

○三月十二日(月)晴。銀座資生堂にて仲田菊代\*の個展を観る。また松坂やにて藤島武二\*展覧会を観る。帰途烏森若竹にて小酌

くちびるを噛まれたる痕痛し 銀座はせ川母娘来、この店に行かざること久しければ挨拶に来れる也 これを濱田につれ行きて茶菓を供す

○三月廿九日(木)晴。さきごろより書きつきたる夷齋筆談八の稟成る。技術について二十五枚。新潮大田美和の来れるにわたす。河上徹太郎書を寄せてクロードルジイド往復書簡集の借覧をもとむ。すなはちその書を大田美和に托して河上宅に届けしむることゝす 夜ひとり若竹にてのむ

上段…技術について 二十五枚 夷齋筆談八

○三月三十日(金)晴。上野博物館にてマチス展覧会を観る、そのヴァンス礼拝堂のための仕事はなはだ仏画に似たるをよろこぶ 帰途銀座吉田にて河上徹太郎今日出海に逢ひ小酌、その店にたまたま来れる商人よりゆかた一反を買ふ、ロータリイに立寄りて帰宅

○三月三十一日(土)晴。月曜書房野原来話、安部公房に戦後文学賞をおくることに決定せりと報告す、ならびにその著壁に序文を書くことを依頼さる、賞のこと安部のためによるこぶべし 林達夫より岩波文庫板ヴォルテール哲学書簡を贈らる、林を平凡社に訪ふ、近くのピヤホールにてビールをのみ閑談、帰途烏森若竹にて小酌、小林秀雄に逢ふ

○四月二日(月)雨。嘉昭片瀬よりラヂオを届け来る、しろうとの作りたるラジオのよしにて米の望みに依りこれをあがなふ、嘉昭と将棋をさす

○四月四日(水)小雨のち曇。新潮主催にてセントラル試写室になんとかいふアメリカ映画を観る。愚劣なり、帰途藤川栄子母子とアマンドにて小憩。それより若竹におもむき河上徹太郎三好達治と逢ふ、アカンサスの幸子病すこしく癒えたりと聞きすなはちその店に行く。またエスポアルにも立寄り、例に依つて乱酔



○四月七日(土) 雨のち晴。東中野モナミに於て第二回戦後文学賞授賞式あり 受賞者安部公房也 すなはちその会に列す 佐々木基一 般若雄高\*野間宏\*花田清輝\*椎名麟三\*同席、閑談数刻 帰途アカンサスにて小酌

\* 般若雄高 埴谷雄高のこと(本名:般若豊)。小説家・評論家

\* 野間宏 小説家・評論家

\* 花田清輝 評論家・小説家

\* 椎名麟三 小説家

○四月八日(日) 晴。井澤義雄神戸より来泊、うなぎ一折贈らる。井澤とともに新宿紀ノ国屋におもむく Histoire de mes pensées (Aimé), Chine (Marc Chadourne\*)をあがなふ。お龍の店にて小酌

\* Marc Chadourne マルク・シャドゥルヌ。フランスの作家

○四月九日(月) 晴。群像有木勉と川島と来る。有木は高橋清次のキング編輯長に転じたるのちを受けて群像編輯長となりたるもの也 二人をつれてアカンサス及若竹にて小酌。また蛇の新にて月曜書房の永田、読売の竹内に会ふ。さらに有木の案内にてルビコンにおもむく 最後アカンサスのさち子を車にて霞町のその家に送る

○四月十日(火) 晴。井澤義雄と新宿紀ノ国屋におもむきて本を購ふ Valéry: Mon Faust, Alain: Mars, Henri Mondore\*: Mallarmé et Valéry, Kafka: Journal intime、河盛好蔵に逢ひお龍にてビールをのむ、鈴木真来り会す、河盛と別れ井澤の東京駅より神戸にかへるを送りて鈴木とともにアカンサスにおもむく、徳田雅彦来る、帰途さち子其他をつれて聘珍にてそばを食ふ

\* Henri Mondore 正しくはHenri Mondor (アンリ・モンドール)。フランスの外科医師でフランス文学史、医学史の著作でも知られる

○四月二十五日(水) 晴。夜窪田啓作菅原国隆来話、晚餐をともにして閑談す 窪田はエトランジェの翻訳成りこれを新潮に発表するよし

○四月二十六日(木) 晴。菅原国隆来、新潮よりの借五、○○○菅原とともに烏森若竹にてのむ、帰途新橋マーケット某店にて入江某女の勤めをるに逢ふ

○四月二十九日(日) 今晩夷齋筆談九、悪運について二十枚成る、ときに戸外に雨声を聴く、のち晴。大田美和来、筆談の草藁をわたす、上野博物館におもむき宗達光琳\*展を観る、蓮玉庵にてそばを食ひ浅草におもむき駒形どせうにてビールをのむ

上段: 悪運について 二十枚 夷齋筆談九

\* 宗達光琳 俵屋宗達と尾形光琳。ともに江戸期の絵師

○四月三十日(月) 晴。大映試写室にて映画自由学校を観る 小野詮蔵\*初役にて出演 とんと感服せず 帰途田川と銀座にてビールをのむ。また若竹におもむく、河上徹太郎に逢ふ

\* 小野詮蔵 文藝春秋社の編集者、「小野文春」の芸名で俳優として出演

○五月一日(火) 晴。新宿紀ノ国屋に Letters de Marcel Proust à Bibesco を購ふ。帰途若竹にて小酌

○五月二日(水) 晴。岩波書店某女史来、つまらぬ原藁依頼にてこれのことわる。改造社天野来、近代短篇小説集とやらに余の旧作曾呂利咄を収録したといふ、これを許す、濱田夫人はじめて吉井徳子を伴ひて来話、ラヂオ役者恩田清二郎来話

○五月三日(木) 晴。安部公房著壁のために序を撰す、六枚、月曜書房

○四月十一日(水) 雨。丸ビルにて福中骨董屋のペルシヤ美術品の展覧会を観る。帰途若竹にて小酌。巷にマツカツサー\*解任の報を聞く

○四月十六日(月) 晴。山川朝子来、原藁催促也、よねと銀座東宝試写室にて映画レベツカを観る、帰途若竹にて小酌

○四月十七日(火) 小雨、ときどき晴、神田月曜書房におもむきて安部公房の本の刊行につきて話す、その近くの店にて永田野原と小酌、中野重治より来信、竹田\*と中斎\*との交友につきて問を呈し来る

\* 竹田 田能村竹田。江戸期の文人画家

\* 中斎 江戸期の儒学者・大塩平八郎の号

○四月十九日(木) 晴。さきごろよりの小説草藁夜来これを書きつぎて今朝成る。末の松山四十枚、群像六月号に寄せんがため也 川島来、すなはち原藁をわたす 河辺健一來、「人間」没落に頻すといふ、山川朝子来、朝子とともに神田のてんぷら屋にてのみ新宿お龍に転じつひに三軒茶屋なるその家に送る

上段: 末の松山 四十枚

○四月二十日(金) 晴。夜若竹の直の会の発会式におもむく 三好達治河上徹太郎吉田健一に逢ふ

○四月二十一日(土) 小雨のち晴。高松宮邸にしてアルピヨンの会に出席す 帰途若竹におもむく、幸子を電話にて呼ぶ すなはちアカンサスに転ず、幸子を車にてその家におくる、昼講談社有木勉来話

○四月二十二日(日) 晴。よねひとり上野博物館にマクス展および琳派展を見に行く、安部公房夫妻来話、山川朝子のために文藝に寄せむとして小説草藁小公子十三枚けふ一日にて書く

上段: 小公子 十三枚

○四月二十三日(月) 晴。菅原国隆来、小林秀雄の寄贈に係るその著真

より刊行予定のものなり

上段: 壁序 六枚

○五月六日(日) 晴。漫に明治神宮境内をあるく。帰途新宿お龍にて小酌 池島信平と逢ふ

○五月八日(火) 雨。昨夜田村泰次郎\*と銀座にてのみ元芸者喜春がひさぐ浴衣を買ひてかへる。今日終日不出、濱田夫人来話、商売不況のよしを語る。孔叢子\*読了。この書の記載信じがたきふしあれどもなほ一読に堪へたり ちなみに大田南畝\*旧蔵本にて南畝自筆の書入またその学に勉めるたることをしのばしむ

\* 田村泰次郎 小説家

\* 孔叢子 中国春秋時代の儒家・孔子およびその代々の子孫の言行を収めた書物

\* 大田南畝 江戸中後期の文人で狂歌師、御家人。別号に蜀山人など

○五月十四日(月) 晴。新潮社におもむくに応待無礼也 新潮に寄藁せざることを、中央公論社に島中鵬二と逢ふ、鵬二と有楽町すしやにて中食、夜徳田雅彦鈴木真とともにせ川エスポアルアカンサスにてのむ

○五月二十二日(火) 晴。神田村口書房におもむきて蜀山飯盛\*一九\*狂歌合幅及清水濱臣\*宛校斎書簡一幅をあがなふ、帰途キヤンドルに小憩、この朝ファルス二十枚脱藁中央公論特集に寄せむとす、村口書房二階にて大雅堂\*筆瀟湘八景屏風六曲一 双煎茶仕立を観る

上段: ファルス 二十枚

\* 飯盛 江戸期の狂歌師・宿屋飯盛のことか

\* 一九 江戸期の戯作者、絵師の十返舎一九のことか

\* 清水濱臣 江戸後期の歌人、国学者

\* 大雅堂 江戸後期の文人画家・池大雅のこと

- 五月二十三日(水)晴。中央公論社員某の来れるにファルスの原稟をわたす、夜窪田啓作来話、ハムを贈らる
- 五月二十四日(木)晴。銀座東宝試写室にてオルフェを観る、帰途窪田啓作夫妻菅原国隆と花馬車にて小憩 夜はせ川にて徳田雅彦河上徹太郎と逢ひともにエスポールにおもむきまた新宿ナルシスにてのむ徳田濱田に泊る
- 五月二十五日(金)晴、オール読物にて宮川曼魚娘の写真を載せるにつき狂歌を寄す 花火待つゆかたの袖にそよ〜とうなきの香よりほふ染色 この夜池島信平空路ヨーロッパにおもむく
- 五月二十九日(火)晴。新宿紀ノ国屋に「James\* et Gide : Correspondance, Canus : Actuelles, Sartre : Beaudelaire, を購ふ。帰途新ばし若竹にて小酌、月曜書房より安部公房著「壁」七部届け来る、余の序を添へたり
- \* James フランシス・ジャム。フランスの詩人、小説家、劇作家
- 五月三十一日(木)曇小雨、夷齋筆談十仕事について十枚菅原国隆の来れるにわたす
- 上段：仕事について上 十枚 夷齋筆談十
- 六月十九日(火)晴。日記をおこたること二旬におよぶ。今朝合縁奇縁第一章十四枚成る、別冊文藝春秋に寄するため也、午後新宿紀ノ国屋におもむきてフランス書を五冊をあがなふ Aragon\* : Les Communistes, Alain : Vingt Leçons sur les Beaux-arts, Sartre : L'imaginaire, Canus : Le Malentendu suivi de Caligula : L'État de siège. 帰途中村屋三階にて桜桃忌に列す、夜銀座に転じ徳田雅彦とアカンサスにて小酌
- 上段：合縁奇縁 第一章 十四枚

- 八月十日(金)晴。新潮と絶縁することに決してそのむねを菅原国隆にいふ
- 八月十一日(土)晴。文藝春秋社楼上にて池島信平の欧羅巴の旅より還れるを歓迎する会に列す 連日旱天のところこの日夜におよんで雷雨あり
- 八月十三日(月)晴。窪田啓作来話、フランス訳カフカ短篇集「Muraille de Chine」を贈らる
- 八月十五日(水)うすぐもり、おとしばなし清盛二十五枚を草しこれをオール読物に寄す
- 上段：おとしばなし清盛 二十五枚
- 八月二十七日(月)晴。論争ばやり二十二枚を草す文学界十月号に寄せむとす 褥暑旬余にわたつてつゞく
- 上段：論争ばやり 二十二枚
- 八月三十一日(金)晴。文藝春秋に寄せむがために善人悪人六枚を草す、文藝春秋社にて坂口安吾に逢ふ、坂口疲労困憊のていにて見るに堪へず わづかに数語を交して別れたり
- 上段：善人悪人 六枚
- 九月一日(土)晴、小雨。しばらく日記を怠りたればけふよりまたこれを続けむとおもふ、午後上野美術館におもむきて二科展を観る、藤川栄子岡本太郎等と語る 安部公房妻病はなはだ篤きよしを聞く、帰途銀座よし田及はせ川にて小酌
- 九月二日(日)晴。高島屋にてふたたびピカソ展を観る。甚だ善し、帰途有楽町の名も知れぬ酒場にて小憩、日曜日は知合の酒店みな休業

\* Aragon ルイ・アラゴン。フランスの詩人、小説家、文芸評論家

- 六月二十三日(土)昼晴。夜曇。深夜雷雨。昼小山清来話。夜よし及び伊藤濱子来話。夷齋筆談十一仕事について続稟十五枚書く
- 上段：仕事について続 十五枚 夷齋筆談十一
- 六月二十八日(木)曇小雨。乱世雑談十六枚書く、文学界八月号に寄せんとす、林芙美子の急逝を聞く。夜烏森若竹にて小酌
- 上段：乱世雑談 十六枚
- 七月十九日(木)晴。夜来芝居きらひ二十二枚脱稟文学界九月号に寄す 銀座リドにて花房満三郎\*鈴木貞と小憩 夜若竹にて小酌
- 上段：芝居きらひ 二十二枚
- \* 花房満三郎 文藝春秋社の編集者
- 八月一日(水)晴。合縁奇縁第二回三十五枚脱稟。三越にて新樹会展覧会を観る、会場にて小泉清\*と逢ふ、新宿紀ノ国屋にて「Jacques Martain\* : Raison et Raisons, Aragon : Chroniques du bel canto, Sartre : L'Engrenage, Valéry : Histoires brisées」を購ふ 夜徳田雅彦とはせ川ハゲ天アカンサスにてのむ。昨日安部公房芥川賞を受く
- 上段：合縁奇縁 第二回 三十五枚
- \* 小泉清 画家、小泉八雲の三男
- \* Jacques Martain ジャック・マリタン。フランスの哲学者
- 八月六日(月)晴。文藝春秋社にて久保田万太郎と逢ひつひに深更に至るまでともにのむ ブルドツグよし田ナポレオンとのみ廻りて最後はひとりアカンサスに眠る、同郷の先輩久保田の万さんとのむこと今宵はじめて也
- 八月七日(火)晴。昼安部公房来、文藝編輯部巖谷大四山川朝子写真師同伴にて来り 安部と余との対座せるところを写真にうつす 文藝

にて不便也、斯波来話、外套の修繕を依頼す、小説の稟を起さんとして筆すすまず 書を読まむとして想またみだる 秋夜蕭條たり

○九月三日(月)晴。夕銀座吉田にて吉田健一と会す 夜徳田雅彦寺田武雄とはせ川にて逢ひともに東京温泉におもむきてトルコ風呂に浴す、ミス・トルコと称するものを見物したることこれが初めて也、帰途サロメ及エスポールにて小酌

○九月四日(火)晴。角川源義来話、文庫本澤東綺譚\*解説を依頼さる、角川とよしだにて小酌、夜はせ川にて北原武夫に逢ふ

\* 澤東綺譚 永井荷風の小説

- □
- 九月六日(木)晴。夜来角川源義の乞を容れて澤東綺譚解説の稟を草す、十枚、文藝春秋社に角川を呼びてこれをわたす、加藤周一フランスにおもむくにつき文学界に通信を寄せしめんがために池島信平に配慮を求む よし田にて城左門に逢ひ馬上盃におもむく、夜はせ川にて加藤池島と会す、また徳田雅彦とエスポールにて小酌
- 上段：澤東綺譚 解説 十枚
- 九月七日(金)晴。セントラル試写室にてベット・デヴィス出演「*About Eve*」を観る、夜徳田雅彦鈴木貞とともにせ川にて会ひともにアカンサス、エスポールにおもむきさらに新宿お龍に転じて痛飲乱酔す
- \* All about Eve 「エヴの総」 1950年、ベティ・デイヴィス主演

- 九月八日(土)晴。新宿紀伊国やにてフラン書をあがなふ、Jean Genet\* : Journal du voleur\*, Jean Giraudoux\* : La Française et la France, Sartre : Le Mur, Aragon L'Homme communiste ; et Anicet, Paul Claudel : Figures et paraboles 紀ノ国や喫茶室にて清水幾太郎\* 河盛好蔵に逢ふ、帰途銀座よし田にて小酌

\* Jean Genet ジャン・ジュネ。フランスの小説家、詩人、エッセイスト、劇作家で政治活動家

\* Jean Giraudoux ジャン・ジロドゥ。フランスの劇作家、小説家、外交官でもあった  
\* 清水幾多郎 社会学者・評論家

○九月十一日(火)晴。昨夜はせ川にて池島信平加藤周一と会し加藤が文学界にフランス便りを送る件ままとりたることを聞く。池島ほか今日出海大岡昇平徳田雅彦とともにあちこちの酒場をめぐり、さらに新宿に転じ目白なる池島邸におもむきて一泊。今朝文藝春秋社に行きて徳田鈴木とともにブルドッグにて昼餐、日本橋におもむきて窪田啓作に逢ふ、鮎佐のつくだにを購ひて帰る

○九月十二日(水)晴。よし来話、昨日のつくだ煮の裾分をおくる。よし田にて河上徹太郎井上友一郎と逢ふ、また新潮社新田敏を招いて「焼跡のイエス」三千部増刷のため昨日花舎の検印をわたす

○九月十四日(金)晴。新潮新田敏来、夷齋筆談上梓について交渉を受く。安部公房来、ともに牛込なる勅使河原蒼風\*邸におもむく、石濤和尚\*画冊、金冬心\*画幅を示さる けだし清朝絶代の傑作也 すし幸の餐席あり、さらに銀座に転じてエスポアルにて小酌清談

\* 勅使河原蒼風 華道家・いけばなの草月流の創始者

\* 石濤和尚 石濤。中国明末清初の画僧

\* 金冬心 金農。冬心は号。中国清代の書家・文人画家

○九月十五日(土)くもり小雨、午後東中野モナミにて近代文学社主催安部公房の受賞祝賀会に出席す、帰途薄暮におよんで佐々木基一野間宏岡本太郎とともに銀座はせ川におもむきまたよし田にて小酌、岡本酔つて佐佐木\*からむ、新ばしにて三人に別れエスポアルにおもむくにたまたま久保田万太郎林房雄に逢ひさらにハムレットにてのむ、ナ

ソ連活動写真真金の星の騎士を見る。写真はつまらなけれどテクニカラ一佳也 帰途若竹にて小酌

○九月二十九日(土)晴。中間物とは何か二十二枚を草し文学界に寄す、新宿紀伊国屋にC Claudel : Conversations dans le Loir-et-Cher, Alain : Les Saisons de l'esprit, Éléments de philosophie, Camus : Lettres à un ami allemand を購ふ、この夜鈴木貢と連飲するところ よし田江安餐室ハムレット、エスポアル、アカンサス也、江安餐室ははじめておもむきたる店にてその料理賞すべし、中共北京より People's China 人民中国と題する冊子を文藝春秋手帖に名をつらぬる和朝の文人宛に香港経由にて送り来れるよし、余のもとにもまた送られたり、海外向宣伝用とおぼしくこの雑誌の出来工合あしからず

上段：中間物とは何か 二十二枚

○十月二日(火)曇。昨夜よし田及びハムレットにて乱酔いささか疲れたり、久保田万太郎よりその著樹蔭を贈らる、おもしろし、句あり、晴れ行くやそのあさかほの雫より、はがきに書いて遣る 夜三越劇場にて俳優座公演夜の来訪者を観る、翻案物にして通俗芝居なれども飽かず見るに堪へたり

○十月三日(水)曇 角川書店より角川文庫板白描を届け来る

○十月七日(日)晴やゝ寒し、合縁奇縁第三回三十六枚脱稿

上段：合縁奇縁 第三回完結 三十六枚

○十月八日(月)晴、文藝春秋社にて徳田雅彦に合縁奇縁の原稿をわたす、川端康成\*に逢ふ、川端徳田とともに芝西久保巴町なる玉井大閑堂\*におもむく、馬遠\*山水図 □若□山茶花図 栄華物語絵巻残缺\* 引仁仏\* カンダラ仏\*其他いろいろ観る、酒井家蔵馬遠四幅対はニセモノなるがごとし、夜徳田と放送局にて佐藤美子長門美保\*の歌劇を聴く、

ポレオンの某女をつれて鳥森若竹にて小酌 車にて某女を赤坂までおくりて深夜帰宅

○九月十六日(日)曇、終日家居、Sartre : Les jeux sont faits を読む。

○九月十八日(火)曇小雨。昼東宝試写室に Sartre : Les jeux sont faits を観る。藤川栄子母子とはせ川にて小酌、夜日比谷公会堂にて Menuhin\*の演奏会を聴く、Tartini, Franck, Bach, Paganini\* 今日出海に逢ひまたはせ川にて閑談

\* Menuhin ヌニョーヒン(メニューイン)。バイオリニスト

\* Tartini, Franck, Bach, Paganini タルティーニ、フランク、バッハ、パガニーニ いずれも作曲家

○九月二十日(木)晴。角川書店に白描校正をわたす、夜銀座よし田にて今日出海に逢ひアカンサスにおもむく、乱酔

○九月二十一日(金)晴。上野美術館にて新制作派及一水会展覧会を観る。つまらぬを画を見せられて迷惑す、すなはち博物館におもむきて雪舟\*永徳を観て目を洗ふ 帰途よし田及若竹にて河上徹太郎吉田健一と小酌

\* 雪舟 雪舟等楊。室町時代の画僧(禅宗)

○九月二十二日(土)雨。窪田啓作来話、閑談数刻、Sartre : Les jeux sont faits を借す

○九月二十三日(日)晴。昼久しぶりにて浅草をあらく、並木やぶにてビールをのみて帰る、この店のそばよろし、余が幼少のころこの内儀は小粋な年増なりしが今はすでに老いたるを見てをかきおもひをしたり

○九月二十五日(火)小雨、朝より眠りて晩に至る 銀座よし田にて小酌

○九月二十七日(木)晴、やゝ寒。夕刻麻布飯倉なる日ノ親善協会にて

佐藤長門とはせ川ハムレットにて小酌、徳田高輪に來りて濱田に泊

\* 川端康成 小説家

\* 玉井大閑堂 古美術商

\* 馬遠 中国南宋の画家

\* 栄華物語絵巻残缺 『栄華物語』は平安時代に仮名文で書かれた歴史物語。残缺は部分の意

\* 引仁仏 密教が台頭する平安初期の弘仁・貞観時代の仏像のことか

\* カンダラ仏 紀元前後から5世紀のインドで造像され、ヘレニズムの影響の強いガンダラ仏か

\* 佐藤美子、長門美保 ともに声楽家

○十月十二日(金)晴。東宝試写室にて映画白き恐怖バグマンを観る。

そのかへり佐藤美子岡本太郎安部公房とともに吉田にて小憩、安部妻肺患軽からざるが如し 文藝春秋社員中野修迎へにて代々木大井廣介\*宅に坂口安吾を訪ふ。途中読売講堂筈田幸吉\*ピヤノ浚へにて加藤周一に逢ひそのフランス出発する日どり十一月三日にさだまれることを聴く、坂口に逢ふにその神経いさゝか異状を呈するに似たり、競輪告発事件にて強迫観念の兆あきらか也、カミユの本四冊 : Actuelles, Noées, Les Justes, Lettres à un ami allemand を吉田に托して河上徹太郎に借す

○十月十六日(火) \* 昨夜銀座にて城左門に逢ひともに濱田におもむきたるにたまたま徳田雅彦来、すなはち深夜小酌、徳田城濱田に泊、今日夕鈴木貢と吉田にてのむ、河上徹太郎に逢ひ三人にてエスポアルにおもむく、池島信平、徳田鈴木に角川文庫板白描を各一部おくる  
\*この日は天気の記事なし

○十月十八日(木)晴。昨夜鳥森若竹にて常連の集りあり それよりは

せ川におもむきて吉川幸次郎桑原武夫三好達治中野重治に逢ふ、家にかへれば窪田啓作濱田に泊りて小説を書くよしを聞く、今日終日家居、夜窪田来話、明朝かへるといふ、続猿蓑露伴註\*を読む、けだし七部中もつとも品下りたるもの也 註また精采無し

\*続猿蓑露伴註 『続猿蓑』は江戸中期 松尾芭蕉とその一門の俳諧選集『俳諧七部集』の中の一部。蕉風の変遷の跡を示した。幸田露伴の注釈版と思われる

○十月二十二日(月)晴。夜銀座はせ川にて加藤周一渡欧送別会を催す。

会するもの加藤夫妻 窪田啓作 中村真一郎 吉田秀和\* 白井健三郎\* 池島信平 鈴木貢

\*吉田秀和 音楽評論家

\*白井健三郎 文芸評論家、フランス文学者

○十月二十五日(木)晴。金銭談二十四枚脱藁\*、文学界にわたす、文藝春秋社にて安部公房夫妻岡本太郎に逢ふ ともに三笠会館にて小憩、安部妻病小康をえたるがごとし 夜吉田よりスコット、エスポール、ハムレットにて小酌、今日出海河上徹太郎河盛好藏に逢ふ

\*上段に脱稿の記載なし

○十月二十六日(金)晴。新潮社新田徹来話、夷齋筆談出版につき造本見本として物理小識\*侗菴筆記\*豆腐百珍\*を貸す、吉田にて小酌、夜よし来、車にてよしを原宿なるその家に送る

\*物理小識 中国明清初の思想家・儒学者・禅僧の方以智の著作。科学技術の類書

\*侗菴筆記 『侗菴筆記』。江戸後期の漢学者・儒官の古賀侗庵の著作

\*豆腐百珍 江戸天明年間に出された豆腐料理百種を記した書物

○十月二十七日(土)晴。昼東和商事試写室にてルネ・クレール\*のbeauté du diableを観る、おもしろからず、帰途よし田及びハムレット

トにて小酌

○十月二十八日(日)雨、終日家居 Maurice Blanchot \* : L'arrêt de mort を読む 思想と生活とがびつこを引きながら並んであるいてみるやうな小説也 このとき人間像は存在せざるに似たり 人間を書かず因縁を書くといふか、すなはち人生の影なるべし

\* Maurice Blanchot モーリス・ブランショ。フランスの哲学者、作家、批評家

○十一月一日(木)晴。夷齋筆談を本に仕立てるにつき語を識す、語にいふ、夷齋筆談おのづから起りおのづから已み前後首尾を分たず春蠶腹中の絲その已むところよりまた起つて盡くるところを知らざらんとす しかれどもとこれ裨官者流の饒舌にてかの豊干饒舌のかりそめに天機を洩らせるものには似ず 蠶測の見あるひは長安と日といづれが遠きかに拘らざるがごときものあるべし みづから描らずして博雅の家に笑はれなん 鶴林玉露解経不為煩辞のくだりに六経の古註もまた簡潔にして煩辞をなさずといへり 余もとより煩辞を患む あに簡潔を好まざらんや ただ世界は古来すでに六経の外にあり 文章は今日もはや三兩字をもつてよく意義粲然たらしむべき術なきをいかにせむ 余のごときは戦戦兢兢つねに煩に處して簡を失はざらんことに努むるのみ\*、この草藁を新潮社新田にわたす\*、山川朝子来話、中村清二\*著体験の物理中巻下巻を贈らる、朝子と銀座よし田にて小酌、日本橋三越にて岡本太郎個展を観る、夜交詢社構内ビヤホールにて岡本の会に列す藤川栄子安部公房に逢ふ

\*語にいふく努むるのみ 『夷齋筆談』巻頭文と一部の用字以外ほぼ同じ

\*上段に脱稿の記載なし

\*中村清二 物理学者

○十一月四日(日)晴。新宿紀国屋にValéry : Tel quell 2 volumes :

酌 三好達治に逢ふ

Regards sur le monde actuel et autres essais, Vercors\* : Le sable du temps, Yvon Belaval\* : La recherche de la poésie を購ふ、帰途秋田にてキリタンポを食ふ、またお龍にて小酌

\*Vercors ヴェルコール。フランスの小説家、画家 本名：ジャン・ブリュレル

\*Yvon Belaval イヴォン・ベラヴァル。フランスの哲学者

○十一月十六日(金)晴。暁ちかく「夢の殺人」三十五枚脱藁。群像川島の来れるにその草藁をわたす新年号に寄せむがためなり 山川朝子来 夜佐藤美子とよし田ハムレット小笹すしにてのむ

上段：夢の殺人 三十五枚

○十一月十七日(土)晴。井澤義雄神戸より来泊(カマボコを贈らる)。勅使河原宏\*来話、勅使河原と三越にて草月流展覧会を観る、またともに銀座よし田におもむきて小酌。佐藤美子に逢ふ 帰途新ばし演舞場なる文学祭を見物す、久保田万太郎扮するところの鈴ヶ森の権八\*尾上松之助を連想せしめたり 但いささか故人宗十郎\*に似て上出来也

\*勅使河原宏 いけばなの草月流第三代家元(勅使河原蒼風の子、ほか美術、舞台、映画でも活躍)

台、映画でも活躍

\*権八 歌舞伎狂言「鈴ヶ森」の登場人物・白井権八

\*尾上松之助 歌舞伎役者(二代目・映画俳優の尾上松之助のこと)

\*宗十郎 昭和二十四年に亡くなった七代目沢村宗十郎のこと

○十一月十八日(日)晴。井澤義雄西国にかへる、新潮社板ジイド全集を与ふ

○十一月二十一日(水)晴。夜来蜜蜂の冒険十二枚を草す文藝新年号にあたへんがため也、夕よねとともに銀座よし田におもむき山川朝子に逢ひ右草藁をわたす、巖谷大四来り会す、すなはち三人を伴ひてピカデリーにイタリヤ映画ポー河の水車小屋を観る、帰途鳥森若竹にて小

酌 三好達治に逢ふ

上段：蜜蜂の冒険 十二枚

○十一月二十二日(木)晴。窪田啓作妻および娘来話、イナダ両尾を贈らる、神田の町をあるく、帰途よし田及ハムレットにて小酌

○十一月二十八日(水)晴。昨日大井廣介より来信 坂口安吾に絶交状を送りたりといふ 坂口目下行方不明にて消息おぼつかなし、夜来随筆模倣の効用を草す、二十六枚 文学界新年号に寄す、銀座よし田にて杵屋宇太蔵\*に逢ふ、夜文藝春秋社楼上にて戦没社員追悼会に列席す 大井廣介に返信を遣る

上段：模倣の効用 二十六枚

\*杵屋宇太蔵 長唄三味線奏者

○十一月二十九日(木)晴。石濤について知らんとして上野図書館\*におもむきて書を借る、この図書館じつに久しぶりにてここに入らざること十年を越えたり 今これを見るに内部の荒廃はなほだしく好学の人を迎へるにふさはしからず むしろ浮浪者の休み場に似たり 帰途鳥森若竹にて小酌たまたま今日出海に逢ひエスポアルにおもむく、その店を出でてパチンコ屋に行きたるに勅使河原蒼風父子に逢ひまたエスポアルにもどりにて痛飲深夜におよんで帰る

\*上野図書館 前身の帝国図書館から国立国会図書館に改組

○十一月三十日(金)晴。夜中島健蔵の労を謝する会に出席す ステーションホテル宴会場にて盛会也 帰途佐藤美子と赤坂溜池ゴルフ場におもむく さらに佐藤夫妻益田義信\*徳田雅彦らと芝口喫茶店アリアにて小憩、また徳田とエスポアルにて小酌 徳田濱田に来泊

\*益田義信 洋画家

○十二月一日(土)晴。昼濱田におもむきてビールをのむ、徳田雅彦か

へる。夜窪田啓作来話、銀行事務目下多忙のよし

○十二月二日(日)晴。紀ノ国屋にて Jean Giraudoux : *Littérature* をあがなふ。池田生子伊藤濱子及よねを伴ひて新宿西口すずめ焼鳥屋にて小酌 帰途みちくさに立寄りてかへる

○十二月三日(月)晴。夜来石濤七枚を草す、釋道濟字石濤号大滌子又號清湘老人瞎尊者苦瓜和尚\*前明楚藩の後 累石に巧みにしてその作るところに揚州余氏萬石園あり 画技の神妙いふを俟たず、夜人事院講堂にてロシヤ活動写真ムソルグスキー物語を観る 音楽よろしけれども構成粗雑にて退屈す 帰途藤川栄子母娘と有楽町ジャーマンベーカーにて小憩、さらにひとり銀座よし田に小酌 この朝税務署員某たづね来る

上段：石濤 七枚

\*大滌子・清湘老人・瞎尊者・苦瓜和尚 いずれも石濤の号

○十二月五日(水)晴。勅使河原宏来話、石濤草藁をわたす、安部公房夫妻来話これを伴ひて銀座よし田にて小酌、夜川太郎にて池島信平と逢ひともはせ川におもむきさらに新宿に至りお龍五十鈴にてのむ

○十二月十日(月)晴。さる八日より牛込双葉荘にて別冊文藝春秋のために小説春の葬式三十枚を草し今曉成る、銀座にかへり吉田健一鈴木貢とともに新ばし川太郎にて小酌、ハムレットおよびはせ川にて久保田万太郎今日出海に逢ふ

上段：春の葬式 三十枚

○十二月十一日(火)晴。久保田万太郎よりその著オスロを贈らる、書中オスロにての句に たれ一人日本語知らぬ白夜かな の句あり、この句に二千里の外酒の中汲とつけてはがきに書き遣る、夜若竹にて小酌

○十二月十二日(水)\*銀座東和商事の試写室にてスイス映画ジープの

四人を観る、つまらなし、林達夫に逢ひ若竹にて小酌  
\*この日は天気の記事なし

○十二月十三日(木)晴。鎌倉におもむきて八幡宮境内に美術館の新設せるものを観る、ルオー(ミゼレーレ)、黒陶(明器)彩陶(彩文土器)藤川勇造彫刻の陳列あり この日あたたかにして春日のごとし、帰途銀座よし田及はせ川にて小酌、田川博一\*と新宿におもむきて泥酔す  
\*田川博一 文藝春秋社の編集者

○十二月十九日(水)晴。島尾敏雄神戸より来話、明春小岩に移転し来るべしと語る、河出書房竹田博来、小説大系本(昭和十年代)のために検印をわたす、夜文藝春秋招待にて帝劇にエノケン\*越路吹雪\*のお軽勘平を観る、愚劣也

\*エノケン 榎本健一。俳優、コメディアン、歌手

\*越路吹雪 シャンソン歌手、女優

○十二月二十日(木)\*夜烏森若竹の忘年会に列す

\*この日は天気の記事なし

○十二月二十二日(土)晴。孤独と抵抗二十八枚を草して文学界二月号に寄す 新宿紀伊国やにて本を買ふ、帰途河盛好蔵に逢ひ新宿にて小酌 Jean Anouilh\*: *Antigone*, S. de Beauvoir\*: *Pour une morale de l'ambiguïté*; L'inivité, Aragon: *L'homme communiste*, Suarès et Claudel: *Correspondence*

上段：孤独と抵抗 二十八枚

\* Jean Anouilh ジャン・アヌイ。フランスの劇作家、作家、脚本家

\* S. de Beauvoir シモーヌ・ド・ボーヴォワール。フランスの哲学者、作家、批評家、活動家

○十二月二十四日(月)晴。安部公房来話、ともに多摩川なる岡本太郎

宅のクリスマスパーティーにおもむく、藤川栄子勅使河原蒼風父子に逢ふ

○十二月二十九日(土)晴。このところ冬あたたかにして連夜の酒に疲れたり、日本橋榛原にて色紙を買ふ、神田村口\*二階にて木米\*の水墨、明万歴の春画 花宮錦陣\*馬琴\*の書簡などを見る、帰途烏森若竹にて小酌 三好達治に逢ふ

\*神田村口 村口書店のこと

\*木米 青木木米。江戸後期の京焼の陶工、絵もよくした

\*花宮錦陣 中国明末の古典春宮画で漢詩と画とが対になった刊本

\*馬琴 曲亭馬琴(本姓：滝沢)。江戸後期の読本作者

○十二月卅一日(月)雨。夷齋筆談の校正刷を一閲す、雨をついて夕の巷に出づ、若竹にて小酌 直公つくるところのだて巻を購ふ、よし田におもむきたるに客多くしてさわがしければそばのみやげをもちて帰宅 別に直公よりイカの塩からブーチャンより酢莖をおくらる 一寝入して目さむれば夜半三時也 一年のぶらくぐらしここに終る、かへりみるに諸事力をつくすこと十分ならざりしもの多し 売文の毒おそるべし 意あまつて才足らざることかなしむ すなはち床に鉄斎を掛け座右の書あれこれをひらきて黙黙夜をおくる

# 資料翻刻 2

## 椎名麟三

### 講演メモ ①



椎名 麟三(しいな・りんぞう 明治44・1911年～昭和48・1987)

兵庫生まれ。小説家。本名・大坪昇(おおつぼ・のぼる)。旧制姫路中学中退後、職を転々とする。左翼思想に傾き、1931年に検挙され、留置所で転向を表明。戦後、千歳烏山駅前が開業した出版社の経営失敗直後に書いた「深夜の酒宴」(46年)を投稿、臼井吉見によって「展望」に掲載される。「重き流れのなかに」(47年)、「永遠なる序章」(48年)を続けて発表、戦後の実存主義を代表する作家となる。やがてキリスト教への信仰を深め、50年に洗礼を受けた。43年より没年まで世田谷区松原に住んだ。

【資料概要】

- 資料番号 124145 《椎名麟三講演メモ「戦後文学の意味」》
- 資料番号 124146 《椎名麟三講演メモ「文学する心」》
- 資料番号 124147 《椎名麟三講演メモ「自由と倫理（第一日）」》
- 資料番号 124148 《椎名麟三講演メモ「人間の自由について」》
- 資料番号 124151 《椎名麟三講演メモ「作家と生活」》
- 資料番号 124153 《椎名麟三講演メモ1》
- 資料番号 124154 《椎名麟三講演メモ2》
- 資料番号 124155 《椎名麟三講演メモ3》
- 資料番号 124156 《椎名麟三講演メモ4》
- 資料番号 124157 《椎名麟三講演メモ5》
- 資料番号 124158 《椎名麟三講演メモ6》
- 資料番号 124159 《椎名麟三講演メモ7》
- 資料番号 124160 《椎名麟三講演メモ8》
- 資料番号 124161 《椎名麟三講演メモ9》
- 資料番号 124162 《椎名麟三講演メモ10》

いずれもノート紙、縦書、鉛筆書、一部ペン書、一部赤鉛筆  
大坪經子氏寄贈（平成27年度）

当館収蔵の椎名麟三資料は、椎名麟三の長男・大坪一裕氏（故人）が所有していたもので、一裕氏が亡くなった後、夫人の經子氏に引き継がれたものである。椎名麟三資料の多くは郷里の姫路文学館に収蔵されているが、生活の拠点であり、亡くなった地でもある世田谷にも資料を納めたいという一裕氏の遺志により、270点の資料が当館に寄贈された。

寄贈資料のうち、講演メモは計34点。草稿など椎名麟三の直筆資料の

多くに共通するのが、切り離れたノート紙の罫線の上に細やかな文字で書かれているという点である。講演メモの特徴としては、口述する内容のままを記しており、椎名が講演に際して入念な準備を行っていたことがうかがえる。『椎名麟三全集 全23巻別巻』（冬樹社、1970〜79年）収録の年譜に拠れば、作家デビューの翌年、1948年5月の松本中学校（現・長野県松本深志高等学校）と慶応義塾大学の講演会をはじめとして、以後、全国各所で講演を行っている。特に、1950年12月の洗礼後からはキリスト教の文学者として教会や集会での講演が目立つ。

講演メモのほとんどが前掲の全集に未収録である。資料名は、講演タイトルがわかるものについてはその名称を入れており、詳細不明のものについては「講演メモ1」などとした。全集に収録されている4点の講演メモを除き、残る15点についても本誌次号（下巻）にて翻刻掲載を予定している。

【凡例】

- 漢字の旧字体は新字にあらためた
- 仮名 表記通り（ほぼ旧仮名）
- 数字・記号 表記通り
- 椎名自身による削除・裁断やページの欠落が多いため、前後の内容がつながらない箇所もあるが、そのまま掲載した
- 削除部分については級数を下げ、かつ削除した内容を「削除 ●●●●」のように表記した。紙が破れて文章が途切れている場合は「ヤブレ」、ページが欠落していると思われるものについては「以下ページ欠落」、意図的に裁断したと思われるものには「以下裁断」のように表記した
- 文中には今日の人権意識に照らして不適切な表現があるが、原文を尊重してそのまま記載した

資料翻刻2

# 椎名麟三講演メモ①

## 椎名麟三講演メモ「戦後文学の意味」（124145）

年月日不明、ノート紙1枚 鉛筆書

### 戦後文学の意味

#### 一. 何故小説を書くか。

1. 太宰治氏の死について  
○女、子供の読むもの。妻が読み、夫が宣伝する。
2. 小説家に内在する原罪意識（自分にとつてどうしようもない生れながらに持つてゐる罪）

#### 二. 愛に於ける限定（原罪の発生根源）

1. 愛と死：キリストと姦通者  
二つの肉体、肉体はあれど
2. 愛と思想：野間宏（肉体：愛は究極に於ては、肉体に於てしか表現出来ない。）
3. 愛と社会：昼の愛と夜の愛、電車のなかの人々、
4. いかなる愛も死といふ限定をうける。：無意味

#### 三. 十字架（苦痛）を通じて、逆に結びつく。

1. ドストエフスキイの歯痛み。：苦惱愛
2. ニーチェの永劫回帰：運命愛。（本質的なものが回帰する。
3. 労働運動。：労働の苦痛、：無意味の苦痛。

#### 四. 戦後文学の意味

1. 思想の分裂：戦争の危機
2. 行動と主体の分裂：戦時の傷痕（恋愛に於ても、反省すると愛してゐない。）

#### 五. 無意味―虚無（ニヒル）を如何にして超へるか。

1. 自殺の考察―愛することが出来ない、虚無の典型：太宰の自殺前の挿話、虚無を超へようとして虚無を手段として消失する。
2. 超へようとし、超へずには居られない熱情のなかに自由がある。：それが自殺の自由。
3. 虚無のなかに生きてゐる。：自由、：真の恋愛。（神のかげさへ宿つてゐる）  
平和運動

六、結論、生き延びて行きませう。どんなことをしても生き延びて行くとうとじやありませんか。そして生き延びてあること、それが、一切の解決なのです。

### 椎名麟三講演メモ「文学する心」(124146)

年月日不明 ノート紙5枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

文学する心「削除 文学性ということについて」 中学

マタイ、十八章一〇—一三

私は、中学校でお話するのは、はじめてなので、「生きるということ」という問題でどうお話ししているのかさっぱりわからないのであります。その上、ひどい訥弁と来ているのです。お医者さんの話によると、舌が少し普通の人より短い。二ミリぐらい短いらしいんです。お聞きとりにくいところがあると思いますが、しばらく御辛願います。

みなさん方は、お祭りや縁日、あるいはデパートなんかで、おかあさんやお父さんにはぐれて、迷子になつて泣いている小さな子供を知らんになつたことがあるでしょう。かわいそうだなとお思ひになつたかも知れませんが、何故泣くんだろうとお考えになつたことがありますか。アフリカのズールー族という土人は、抽象的な言葉を知りません。たとえば、遠いところとか、無限の彼方といったような言葉であります。たとえば、ズールーの土人は、遠いところということを、「おつかあ、おれは迷子になつたといつて泣き出すところ」というんだそうであります。考えて見れば、なかなか具体的で、実感がありませんね。それはとにかく迷子になつて泣き出すのは、「おつかあ」つまりおかあさんから遠く引

小さいときにこの孤独を経験していらつしやるのであります。さらにいいかえますと、人間が最初に知る自分というものは、この孤独においてだと申し上げられるのであります。

天才の方は、もう三つぐらいで、このような自分に目覚めるといわれています。しかし私は天才ではないので、その目覚めはずつと遅かつたのです。私は、姫路の郊外にある農村に生れたのであります。そこに母親の里の家、つまり母親が父のところへ来るまでに育つた実家に生れたのであります。しかし父は、大阪にいたわけで、その事実からも父と母との仲はあまりよくなかつたということがわかるのであります。しかしました、母親は、実家の人々ともあまりうまく行つていなかつたらしい。というのは、農家には納屋といつて、収穫物なんかを入れておく物置で、私を生んでいるのであります。うまやで生れていたら、キリストのようにならなくなつていたのかも知れませんが、物置では仕方がない。そして三日目に、母親は私を抱いて鉄道線路をさまよつているところを警察に保護されて、大阪の父のところへ送るかえされている。だから六つぐらゐまで大阪で育つたわけなのであります。ついに父と母との別居ということが起り、私が小学の一年になつたころ、母の実家のある村に小さな家を建て、そこで暮すということになつたわけなのであります。

ところで小学の二年になつた夏休みの終りのころであります。私は、東坂という村に住んでいたのであります。学校は西坂にあつて、そこへ通つていました。その東坂と西坂の間に、たんぼへ水をやる灌漑用の用水池があつて、その土堤を通つて行くのが近道なのであります。私は、母から用事をいつかつて、西坂にある親戚の家へ行きました。しかしそこには友達もいることだし、遊んでいるうちに夜になつてしまい、あわてて帰つて来たわけでありませう。むろん近道の用水池の土堤の上を通

きはなされてしまふ、そのために淋しくなつて泣き出す。そのときの「おつかあ」とは、泣き出している子供にとつては、そこでは安全な世界をも同時にあらわしているといつてもいいのであります。おかあさんから手を引張られる、少くともおかあさんの眼のとどく世界にいるうちは、少々のいたずらをして、安心していられることは事実であるからであります。

だが、その世界、安心していられる家といつてもいいのであります。それから遠くはなれることによつて、淋しい思いをしたことは、みなさんにもきつと経験があるだろうとそう思います。そのときはきつと、孤独というひとりぼっちという感じがするものであります。「いや、ぼくは、いつも愉快で愉快で、どんな遠い山なかでひとりぼっちになつていても、愉快でたまらない」と思つていらつしやる方もこのなかにあるかも知れません。しかしイギリスのある小説にこんな話があります。ある仲間たちでつくつてゐるクラブに一人の人気者がいたのであります。その男がいると、その集りはたちまち賑やかに明るくなつてしまふほど、陽気な男だつたのであります。淋しさとか、ひとりぼっちというような感じは、みじんもその男にはない。ところが、その男は、偶然の事故で死ぬわけなのであります。その男を解剖して見たら、脳味噌がなかつたという話なのであります。

この話は、何をあらわしているか申し上げるまでもなく、人間が脳味噌をもつてゐるかぎり、淋しさだとか孤独なひとりぼっちを感じずにはいられないものだということなのであります。ちよつとむつかしく申しますと、人間に意識というものがあるかぎり、その意識は孤独という性質をもつてゐるということでもあるのであります。いいかえすと、ぼくはいつも愉快で愉快でたまらないと思つていらつしやる方も、もつとつて行つたことはいふまでもないのであります。その用水池のあたりは、私たち少年の恰好な遊び場所にもなつてゐるわけで、その池で泳いだり、菱の実をとつたり、ぐみの木もあり、忍術ごつこやくれん坊をするにも恰好なところであつて、しかも今申したように毎日学校へ通うためにそこを通るわけですから、私たちにとつて、一番親しい場所であつたといふことができるのであります。真暗でも、平気で歩けるほどなのであります。帰りのおくれた私は、急いでその土堤を通つていました。そのときひよいと池のなかを見ると、直径六十センチばかりの金色の眼のようなのが、池のなかから私をのぞいて、しかも小牛の鳴くような声を立ててゐるのであります。びつくり仰天しましたね。恐怖が私の身体をつらぬきました。私は、死物ぐるいでその土堤の上を走り、村のせまい道をかけ抜けて、やつと自分の家についたのであります。そして母親の顔を見たとき、安心したのでしよう、しくしく泣きはじめたのであります。母親は、父と別居して以来、幾分ヒステリックな女になつていて、私が母親の意にそむくと、竹帚をもつて私をなぐろうとして、村中を追いまわし、どんなに逃げてでもどこまでも気がいひのようになつて、私を追つて来るといつた母親でしたが、私の泣き出したのを見て、どうしたのかと問いつめるわけなのであります。親戚の者が何か悪口をいつたのか、とか、誰かに何かされたのかとか、いやなかげ口を聞かされたのか、とか、いつて問いつめるわけなのであります。だが、私には何も答へることではできなかつた。自分の出会つたことは、大人の母親に話してもわからないし、わかつてもらへても軽蔑されるだけで一笑に付せられてしまふだろうと思つたからであります。で、もう蒲団をしいてあつた寝床のなかへ、夕御飯も食べないで、もぐり込んでしまいました。その私を見て、なおも母親はしつこく枕元へやつて来て、西坂の誰という名前を



あげて、その家の者がおかあさんの悪口をいつたんだらう、どんな悪口をいつたのかいえ、と私へ問いつめるのであります。私は、頭から蒲団をかぶつてしまいました。すると母親は、「けつたいな子やな」と吐きすてるようにいつて、台所の方へ行つたのであります。その母親の後姿が、もぐり込んでいる蒲団の間から見えました。そのとき、それまでに味わつたことのないつよい孤独感におそわれたのであります。そのとき見た母親は、何かいままでのような母親ではなく、何かグロテスクななじみなんか全くない、おかしな生物というように見えました。それは私にとつてシヨックであり、しかもそのために味わつている孤独が耐えがたいほど恐ろしかった。で、起き上つて、すぐご用もないのに母親のそばへ行つたのであります。

みなさん方も、何らかの形でこのような体験をなさつていらっしゃるわけなのであります。少くとも小学校時代にそれを味つていらつしやる。お父さんにひどく叱られて、家をとび出したものの、行くあてもなく近所あたりをぐるぐるまわつていたりときや、学校のお友達との間に感情的な行きかたがあつて、いつも帰りは一緒であるにもかかわらず、ひとり帰つて来るといふようなときに、そんな孤独な自分に出会つていらつしやるわけなのであります。しかしこのひとりぼつちであること、孤独であるということは、ひどく恐ろしいものである。淋しいし、しかも身のおきどころもないほど淋しい。そこでそのような恐ろしさを忘れるために、日頃仲のあまりいいとはいえない友達をたずねたり、何かそんな自分をまぎらわすために、一人で遊べるように遊びをする。そして忘れてしまふのであります。そしてたしかに忘れることができるわけで、みなさん方のうちに、いままでそんなような思いに出会つたことがないとお感じになつていらっしゃる方もおありになると思いますが、私たちは、少くとも小学

でありませぬ。

ちよつとむつかしくなつたようですね。私たちが、何らかの意味で孤独になつたり淋しくなつたりするのは、その根本には、人間は死ぬという事実がかくされてあるのだということを知つてもらえなくさんなのであります。それは、小学生のころからすでに、はつきりとはないが、そのことを知つていらつしやるのです。孤独とか淋しさとかいう感じとして、知つていらつしやるのです。それが、人間の根本的な自己、つまり自分というものに目覚める動機なのであります。しかしみなさん方のなかに、孤独な人、ひとりぼつちの人、淋しくて淋しくていつもお友達からはなれてる方の姿をごらんになれば、「あいつは死んだみたいなのやつだ」とか、「ほんとは生きていないような人だ」とかというふうにお感じになるでしょう。しかしもし人間にとつて死というものがある、いつまでも、いつまでもでないということになれば、そのような方々も、孤独であつても、もつと生き生きと生きられるではありません。しかしこの「いつまでも」という無限を無限でないものに変えて下さつた方がいらつしやるのであります。死んで三日目に復活されたというイエス・キリストという方なのであります。いいかえますと、ズールーの土人が、「おつかあ、おれは迷子になつたといつて泣きだすところ」で、いつも「おつかあ」なる方が傍にいらつしやるとしたら、泣き出さなくてもすむといふことはおわかりになるでしょう。だから、私にとつてのイエス・キリストは、「もつと生きよ」という意味であり、「もつと十分に生々と生きる」ことができるということ、私たちに可能にして下さつた方だと申し上げられるのであります。この私の言葉に不審をもつて、聖書を読んでみて下さればありがたいと思います。御清聴、ありがとうございました。

生のころに一度は、そんな経験をもつていらつしやるのだが、忘れてしまつていらつしやるだけなのであります。

孤独というものは、自分の安心して生きられる家、あるいは世界から遠くはなれるということなのであります。まさしくズールーの土人がいつているように、「遠い」という言葉を、「おつかあ、おれは迷子になつたといつて泣き出すところ」なのであります。だから孤独のおそろしさというものは、「おつかあ」から引きはなされている距離に比例するといふことがいえるではありません。だからまたその距離が無限であればあるほど、孤独も無限になるのであります。それでは距離の無限なもの何か。みなさん方に、こんな言葉をいうのは、まだ早いのではないかと思ふのであります。それは人間の死なのであります。何かに絶望したときに、たとえば試験がうまく行かなかつたときに、ふと、「どこか遠いところへ行きたい」といふような気のなかつた方があると思います。しかし「遠いところへ行きたい」と思ふことは、ほんとは「死にたい」といふことなのであります。「追記この死の文学性とは、最初このような地点から生れて来る。ドストエフスキイとの出会。―サルトルの言葉」チエホフというロシアの文豪は、その「手帖」のなかでこんなことをいつています。「死ぬといふのはおそろしい。しかしいつまでもいつまでも生きていくといふことはなお恐ろしい」といつています。それはその通りでありましたが、よく考えるとこの言葉はおかしい。死ぬといふことも、いつまでもいつまでも死んでいなければならぬといふことであり、そして死のおそろしさは、この「いつまでもいつまでも」といふことにあるのです。「いつまでもいつまでも生きる」といふことはなお恐ろしい」といふチエホフの感じる恐ろしさといふものも、生きるといふことが恐ろしいのではなく、「いつまでもいつまでも」が恐ろしい

### 椎名麟三講演メモ「自由と倫理（第一日）」（1244147）

年月日不明、ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆書

#### 自由と倫理（第一日）

##### 1. 泥棒の話

私は、杉原助\*さんの依頼によつて、この修養会の講演を引受けたのであります。つまり私は杉原さんには妙な義理があつて、しかし義理といふものは大切なものです。その義理によつて、ここでお話をすることを引受けた。ところが、委員長の馬場雅夫さんからいただいたお手紙を読んで、衝撃的なといつてもいい打撃を受けたのであります。この修養会のテーマが、「これからの日本の教会」であり、「キリスト者の新しい倫理を中心に」そのテーマを展開するということであつたからであります。これからの日本の教会という問題ですら、私には話す資格がない。私は、一人のまじしい信徒であり、ここに集つていらつしやる牧師先生方のように、日本の教会というような広い展望をもつていない。しかもさらに困つたことは、「キリスト者の新しい倫理を中心として」といふのでありますから、およそ倫理的でない私にとつては、脱帽して願ひ下げにしたいとくらしい気持なのであります。こう申し上げても、納得していただけないであります。一つ例を申し上げます。

ドストエフスキイというロシアの文豪がいます。いますと申し上げます。実はもう天国にいらつしやるわけなのであります。この人の小説にこんな話がエピソードとしてつています。ひとりの男が、宿屋に泊るのですが、その相客がそのころでは珍らしい懐中時計をもつていつけるのであります。その時計を見た彼は、どうしてかその時計がほしい

といったような気持になつてしまふのであります。欲も得もないといったらおかしい心境ですが、とにかく是が非でもその時計がほしい。そして遂に隙をみつめて、びくびくしながらその男の部屋にしのび込んで、その時計をぬすんでしまふ。しかし彼は、その時計をぬすむ前に、ちゃんと胸へ十字を切つて神のお許しを願つてから、ぬすんだのであります。まことに敬虔な信仰のふかい泥棒というわけでありませぬ。

さて、みなさん方のうちでは、泥棒をする前に胸に十字を切るなんて、神をけがすものだ、とこの男を非難なさる方もおありであります。だが、泥棒をしようとしていながら、それでも十字を切つて、神のお許しを願っているのは、願わない泥棒よりも少し上等だと思ひになる方もあるかも知れません。また、はなはだ倫理的な方は、泥棒をした以上、そんな十字はナンセンスだときめつけられるであります。だが、ともかくにも、客観的に考えて見て、十字を切つて泥棒をしたという彼の行為は、矛盾でありませぬ。しかし私は、この彼が大好きなのであります。この彼が、十字架の前でふるえながら罪をおかしつづけている人間という存在のイメージが鮮烈な姿で描かれているという点においてでなく、この泥棒は、ほかならぬ私自身でもあるということなのであります。ここで、もはや私に、倫理なんか語る資格はないということがみなさん方に納得されたと思ひます。だからこれからお話しすることは、この前提の上で、ということをお承知願ひたいと思ふのであります。

ところで、この泥棒の行為をさらにみなさん方と御一緒に考えて行つて見たいと思ふのであります。と申しますのは、人間の自由と倫理、少くとも神の前に立つところの人間の自由と倫理という問題に対して、端的な説明をしているものはないと思ふからであります。彼氏が、胸に十字を切らずにはいられないということは、自分のこれからなそうとい

う行為が、あまりよくない行為、罪の行為であるという自覚があつたということを示しています。それにもかかわらず、そのような自覚を超えて、時計をぬすむ。いかえれば世間的に見たつて、犯罪でもあるにもかかわらず、時計をぬすむということのなかに、彼の自由が証明されていると申し上げられると思うのであります。人間の倫理からの自由、神の倫理からの自由が、その行為となつてゐる。彼氏の場合、その倫理の敷居は、時計がほしいあまりにとび越えることができたのであります。同時にそこに、滑稽ではあります。同時に悲劇的でもある人間の自由の様相がうかび上つて来るのであります。キリスト教的に申し上げますと、人間の自由というものは、罪である仕方でしょうか、もつことができないうということができると思ひます。つまり人間の自由は、罪である。しかし私は、この罪であるところの人間の自由にどこまでも同意をあたえ、心から愛したいというのが、私のキリスト者の、文学者としての立場なのであります。私は、泥棒の彼氏が好きだといつたのは、そこに、十字架の前におびえながらも、彼氏のぎりぎりの自由が表現されているからであり、そして私は、その味方をせずにはいられないのであります。

## 2. キリーロフ

たしかに、自由と倫理は、多くの場合、矛盾します。「チヤタレー夫人の恋人」のようにキリスト教倫理への反抗のなかに、むしろ人間の自由を見出すということもでて来るわけでありませぬ。倫理的なものによつて押し殺された人間性の回復こそが、文学の任務でもあるわけなのであります。しかしここで自由と倫理の矛盾という問題に関して、このドストエーフスキイの泥棒の話とともに思ひうかんで参りますのは、同じドストエーフスキイのなかの無神論者―正しくは人神論者の話なのであります。その箇所は、私をキリスト教へ導いてくれた一つの箇所なのであ

りますが、それは、「悪霊」という作品のなかに出て来るキリーロフという男の物語なのであります。キリーロフは、技師(エンジニア)なのであります。性質は非常にやさしく、他人にも親切で、ことのほか子供好きであり、毎朝体操なんかするといふ、いわば人間的には、善良といふ文字を人間にしたような人間なのであります。ところが、彼は、一つの観念をもつてゐる。つまりこの世のなかには、神様なんていうものはなく、人間が神様だといふ観念であります。彼は、そのことを友人たちに―その友人たちはいづれも一癖も二癖もある人々なのであります。が、この世に神はなく、人間が神であるといふことを証明しなければならぬ義務を感じる。その証明の方法というのが、自殺なのであります。何故なら自殺は、カトリックにおいても、神の恩寵に対する裏切りとして大きな罪の一つとされているのであります。まさにその理由によつて、つまり人間の運命の決定権は神になく、人間にあるといふ証明は、自分の自由意思によつて、自分の運命を決定できる自殺にほかならないわけでありませぬ。人間が、自分の運命を決定できるとすれば、まさに神は全能ではないわけであり、したがつて全能でない神は神ではないわけでありませぬ。自殺から神はないといふ帰結を引き出せるわけなのであります。しかしその決行の前日、かつてキリーロフのグループの指導者であつたスタヴロギンという男がキリーロフのアパートをたずねて来ます。この箇所は、アンドレ・ジイドというフランスの文豪も、その「ドストエーフスキイ論」で至福の予感のするところ、つまりほんとうの幸福の予感のするところとして取り上げているのであります。それは短い対話の箇所なのであります。

○木の葉の話。―「神を信じているだろう」

たしかに、神がなければ、人間にはすべて許されている。あの時計を

ぬすむというような小さな罪だけでなく、全世界の人間を抹殺することゴゴもさえも許されているのであります。この人間の自由、一切に対する人間の自由から、どうして「そんなことはほしなうだろう」といふ倫理性が生れて来るのでしょうか。人間とはいひいものであり、したがつてすべてが許されている以上、少女をけがしても、赤ん坊の脳味噌をたたきわつてもいいはずなのではないでしょうか。それなのに「ほしなうだろう」といふ倫理的なものが何故生れて来るのか、どうして人間の全的自由から、それと相反する倫理性が生れて来るのか 私には、長い間わからないながら、その正体については、何の説明も加えていないのであります。おそらく説明できなかつたのではないかと邪推されさえるのであります。しかしその正体は、実は、「ほんとうにそれを知っているものは、そうしないだろう」といふ、「ほんとうに」にその至福の予感のすべてがかかつてゐると私は、後にやつと知ることができたのであります。が、むろんそれは、キリストに出会つてからのことなのであります。

\*杉原助 牧師。津山市出身。1927〜2013年

## 椎名麟三講演メモ「人間の自由について」(124148)

年月日不明、ノート紙6枚 鉛筆・赤鉛筆書

### 1. 聖書と私との関係

「削除 私、聖書というものを、自分の手にしたのは、終戦後間もなくでありました。」―私は姫路が故郷で生れて間もなく、大阪へ行き、父と母との不

和から、小学の一年のときに姫路へ戻っています。姫路といつても、農村で、そこに母の実家があり、そこへ小さな家を建てて、中学三年のはじめまで暮しているわけなのであります。と申しますのは、別居の条件として、子供たちの養育費は送るということでしたが、中学三年のとき、全く送つてくれなくなつていた。母の実家の援助も、母の父が死ぬことによつてあてに出来なくなり、精米所に借金がたまつていて、米をもつて来れない有様になつたので、長男の私は、病弱の母の代りになつて、大阪の父へ金の交渉に行つたのであります。だが、父は、私の知らない芸者上りの女と同棲していて、頭から帰れというわけで、結局帰りの汽車賃だけもらつて、一度は大阪駅まで来たのであります。が、さて、そこで困つた。金をもたないで帰つたときの母の絶望が見えるだけでなく、私が帰ればそれだけ口がふえるわけですからね。といつて、今更父の家へ帰れない。どうすることもできないままに、ずるずるべつたりの家出をしてしまつたわけでありました。しかし家出後は、当時の家出少年のたどるコースを順調にたどりました。出前持や少店主員からコック見習から不良少年にいたるコースであります。しかしこの不良少年は、おかしな不良少年で、夜店でわかりもしない本を買つて来てはさかんに読んでいたようでありました。しかしどうい理由で、そんな本を読む気になつたのかわかりませんが、ドイツの社会主義者であるベーベルの「婦人論」を読んでいきます。赤表紙の厚い本でありましたが、その本によつて、最初の左翼的な洗礼を受けたようであります。

○天理教―邸を払うて、首つりたたまえ

キリスト教―アーメン・ソーメン、ヒヤソーメン

しかしここで、私の宗教への態度は、次第に決定的になつて行きます。母の自殺未遂を契機に姫路と神戸の電車の車掌さんになつたのでありま

すが、入つてまもなく、非合法の労働組合―全協と略称されていましたが、正しくは全国労働組合協議会の組織をつくりはじめています。そしてまもなく、その労働組合をプールにして共産党の組織をつくりました。「削除 高木先生が、昨日の聖書研究でおつしやいましたように、なかなかヘブライ的であつたわけがあります。しかしあまりヘブライすぎて勇敢すぎて」上部機関の方から、「君は、勇敢すぎて危険だ」という警告を受取りました。しかし私は、本来臆病者で、小さいときからネズミみたいなやつだと思つていたので、この警告は、不審でありました。しかし外から見ればずいぶん危険なことをしたということも事実であつたのでありましょう。というのは、党―そのころ弾圧に弾圧で、党の中央部はほとんど壊滅状態にありましたが、それでもときどき非合法の出版物がやつて来る。それには、「革命の「削除 日はもう近い」と書いてある。家出以来、自由を求めて来た私にとつては、何とかしてその自由の日を実現させたかつた、というにすぎなかつたと思うのであります。もちろん私は、同時に反宗同盟にも属して、そのビラを書いた経験もあります。

○レーニン―愚民政策、民衆に対する阿片

○モルガンやフエザーなどの古代社会の研究―宗教の発生の起源

○死の意識の問題。

そのころ、もちろん文学には、全く縁がなかつた。―高木先生の非存在

実践のなかには、燃えるような孤独があります。ことにその実践が、非常な危険な場合は、そうありますが、―後年の実存主義の問題

○鉄のおきて―鉄の規律―とアナキ―絶対の自由

同志愛と人間的なあらゆる愛情を超えたもの。

伊藤律の除名問題

マルクスのいうほんとうの自由

ほんとうの自由のためには、すべてが許されている」

だが、みなさん方の日常生活においても、私や私の仲間がそうであつたように、このような漠然とした不安や淋しさや、孤独をお感じになるときがおありになるのではないかと思つた。工場や会社からの帰りに、みなから別れて、自分の家への町角をふと曲つたときに、ひよいと「自分は何のために生きているんだらう」という気がなかつたことがあるのではないかと思つた。また、主婦の方でしたら、台所でキュリを懸命にきざんでいらつしやる。そしてふと気がつくとき、キュリが切りはなされずに全部つながつていて。見ると、狙がつかい古されてかすかなくぼみの出来ているせいだとお気付きになつたとき、家の暮し全体の苦しさを感じられて来て、ひよいと「一体自分は何のために生きています。いいかえまらう」という気のなさるときがあると思つたのであります。いいかえまらうと、このような孤独な淋しさというものは、この人生のいたるところで待ち受けていると思つたのであります。

「削除 私、そのことを、やがて極端な形で知らなければならぬはめに落ちてしまつたのであります。というのは、運動していた私は、やがておきまりの検挙に出会い、第一審は、改悛の情なしということで徴役四年、控訴して未決にいたるときに転向上申書を出して、徴役三年執行猶予五年で、未決監のある刑務所の裏門から放り出されたのであります。警察の留置場での約一年、未決の独房での約一年、つまり二年近くの牢獄生活が、私の一生の方向を決定したといえると思つたのであります。」

「以下ページ欠落」

○自由と電灯の色の例。

読者の自由

高利貸の老婆と映画館の話。

3. 自由について

たしかに現在は、自由という言葉がはらんとしてしまつて、毎朝の新

聞をごらんになつても、自由という言葉に出会わない日は、まずないと申し上げていいほどであります。先ず、自由民主党、自由諸国、貿易の自由化……

○自由の多義性

○簡単な筋の小説を例にとつて、みなさま方と御一緒に考えてみたいと思つた。

①感動的な救い。

②死ぬことも生きることできないこと

③「身の上相談」や「人生案内」の諸先生方

(イ) 男らしく決心してあきらめなさい。―主観的な救い方。

(ロ) 「女つて一人や二人ではない。いざれあなたをほんとうに愛して

くれる女性があらわれるから、安心して……一生懸命働きなさい」

(ハ) 電車の車掌時代の失恋。―二十三億

④「あきらめや決心」―個人の心こそが最後の救いであり、自由である―個人主義

「女全体、地球全体、階級全体、組織全体」―全体こそが最後の救いであり自由である―全体主義―滅私奉公

⑤人生観や世界観は、人間の何等かの自由に根拠をもたなければ成立しない。 分裂のニヒリズム

「削除 ○ホントウということ。

この人生に、そしておそらくみなさん方のいろんな愛情に、根拠をあたえてくれるほんとうの自由というものは、一体何なのでしようか。

映画―好きと愛 「あなたのご死んでも忘れません」

国電―マンボ、ズボンの少年とストラックス姿の少女。「死んでもはなれないわ」

私の若い時代「死んでも愛している」

今日、お話ししたかったことは、「ほんとうの自由」がなければ愛はおろかこの人生さえその意味を失ってしまうだろうということであります。世界の若い世代もそれを求めている。」

#### 4. ほんとうの自由

しかし、この世界にほんとうの自由はまだ確立されていないのであります。当然そこにほんとうの「削除 倫理」この現代を生きるほんとうの道も確立されていないことが申し上げられると思います。この関係は、もう明敏なみなさま方のお察しの通りであつて、「削除 罪のないところに自由もあり得ないし、自由もないところに罪もないからであります。したがつて」ほんとうの自由のないところには、ほんとうの人生の意味もあり得ないということが申し上げられると思います。しかし何故、ほんとう自由というものが無いのでありましょうか。「削除 人間にとつて、「ほんとうの自由」というものは、キリーロフの場合と同じように人間の死というものと関係があるからであります。」それは、「ほんとうの自由」という「ほんとう」というものがないからだとはいえると思うのであります。

○映画の話―「好きと愛」「あなたのことは、死んでも忘れません」

○国電の電車―マンボ・ズボンとストラツクスの十八ぐらいの少年

「死んでもはなさないわ」

○私は、何も失恋ばかりしていたのではなくて……「死んでも愛して  
います」

もちろん、このようなときには、それが何を意味しているか、私にわからないではないのであります。

人間にとつて、一切のほんとうというものは、人間はかならず、絶対に、そしてほんとうに死ぬという、この人間の死を根拠にしているものであり

#### ○水に溺れるもの話。

このことによつても明らかのように、私たちは、「ほんとう」というものをもつときに、精神的にも、肉体的にも溺れ死んでしまうわけであります。文学者は、このことをよく知つていて、たとえば作品において、作者は、自分自身に溺れているとか、自分の考えに溺れているとか申す場合、作者は、自分というものを失っている、つまり作者は生きてはいないという意味にかつているのであります。とにかくほんとうの自由とか、愛とか、真実とか、正義だとか、人間にとつての倫理の基礎となる一切のほんとうのものは、人間の手のなかにもつことはできないということだけは、確言できるのであります。

いささか困つた話になりましたが、それでは、ほんとうというものは、ほんとうにないのでありましょうか。それはあるのであります。人間の手のなかにはありませんが、神の御手のなかにある。しかしそれは人間の力によるものでなくて、イエス・キリストから与えられるという仕方  
で、人間はそれを持ち、それに生きることができるのであります。話は、お期待通りのところに結着がついて、私としては、実に口惜しいのであります。事実はその通りで、仕方がないのであります。

とにかく、哲学や文学の面においては、もちろんのこと、国際政治の上においてもこのほんとうの自由が求められています。何故なら、それがないというところに、明らかな時代の壁が感じられるからであります。ことに若い世代においては、それが無いといういら立ちにみちています。

イギリスのオズボーン「怒りをこめて振り返れ」

フランスの「危険な曲り角」(ジエイムス・デイン) アンチ・テエト  
ル ベケット、「ゴドーを待ちながら」

アメリカのビート族―ジエイムス・デイン(エデンの東)

ます。死の保証によつて、はじめてその自由が、ほんとうのものになる。死をもち出すことによつて自分の愛のほんとうらしさが証明される、自分の真実というものが切腹によつて明らかにし得るということは、私たち人間にとつてあわれな矛盾なのであります。何故なら死は、人間の真の、ほんとうの自由の根拠になることはできないからなのであります。いいかえますと、ある人が死んだとき、その人がなくなるとよくつかわれますように、なくなるということの上には、ほんとうというものもなくなるからであります。話の規模をもう少し大げさにすればよくわかると思うので申し上げますが、この世界が水素爆弾でふつとんで、人類が死にたえたとき、そこには、人間のほんとうのものとの名付け得る一切も消え失せてしまうということをお考えになればおわかりになると思うのであります。いいかえますと、人間は、誰一人としてこの人間のこの手でほんとうの自由、ほんとうの幸福というものをつかむことはできないと申し上げられるのであります。もし、このなかに、自分は、この自分の力でほんとうの自由をつかんでいると思われたり、ほんとうに自分は幸福だと思ひになつていらつしやる方があるとするならば、はなはだ申し上げにくいのであります。その方は、生きてはいらつしやるが、精神的には自分自身を失つていらつしやる、つまり自分のなかに溺れていらつしやるか、少し気がおかしいか、どちらかだといつていいと思うのであります。「削除 そして明日の「聖書と倫理」では、この点をさらにみなさんと御一緒に考えて行くことになるだろうとそう思いますが、ただ、今日は、人間は、ほんとうの自由、あるいは、ほんとうの愛というようなものをもつことはできないということを知つていただければそれでいいのであります。」

ちよつとむつかしい問題でありますから、簡単なやさしい例でさらにこのことを説明申し上げたいと思います。

共産国のポーランドのフラスコ「週の日」、  
(ジエイムス・デイン)

ソビエトの雪解け。

何故世界が、世界の若い人たちが、「ほんとうの自由は人間にはない」ということを嘆くという仕方、「ほんとうの自由」を求めているのか。それは、ほんとうの自由こそ、私たち人間の生きなければならぬところの道であることを予感しているからだと思はれると思つております。端的に申し上げれば、ほんとうの自由こそ、ほんとうの「削除 倫理 現代を生きる道そのものである」と申し上げられると思つてあります。この地上の現代の人間は、ほんとうの自由がないために、それだけの実践のなかで、壁に直面しているということは事実なのであります。それは日常生活においてもであるだけでなく、人間社会の上部構造である哲学や芸術や政治においてもそのようなのであります。その意味で、「削除 イエス・キリストにおいてほんとうの自由をあたえられていることを知っている者は」現代の人間は、この世界におけるあらゆる不可能の壁を破つて、新しい自由への道を切りひらいて行かなければならぬ運命になつていゝ。と申し上げられると思つてあります。「削除 文芸評論家の亀井勝一郎さんは、このような私を評して、狭い門から大きな荷物を背負つて入ろうとしてよろよろしている」と批評して下さいましたが、一見、客観的にそのような滑稽なことが喜んでできるのも、それがたしかに不可能であつても、ほんとうの意味で不可能ではないということを知っているからであります。」

今日お話し申し上げたことは、実に簡単なことでありまして、人間にほんとうの自由がなければ、毎日を生きて行く意味さえもなくなつてしまうということでもあります。訥弁でお聞き苦しかったと思ひます  
が、御清聴ありがとうございました。

〔削除 作家と生活(福島図書館)〕

私にあたえられましたテーマは、「作家と生活」でございますが、作家がどんな生活しながら作品を生んで行くかというようなことではなく、どんな生活体験が、私という一人の作家の作品を裏付けて行くのかというようなことをお話ししたいと思うのであります。と申しますのは、執筆したり(つまり仕事をしたり)会合へ出たり、食事をしたり、眠つたりするような作家の日常生活は、みなさん方と何等変りはないからであり、作家にとつて問題なのは、この人生からどんな問題性をあたえられているのか、その問題性をどう生きて来、またどう生きて行こうとしているのかということが決定的であるからであります。そこで、私は、私という人間の過去からお話しして行きたいと思うのであります。――私は、関西の出身であります。最初大阪に暮らしていたのでありますが、父と母との間に不和があつて、母は父と別居し、母方のある当時姫路の郊外にある曾左村という農村に小さな家を建てて生活し、父は、大阪にいて、ある鉱山会社につとめながら、相場をしてかなりの金をつかんでいたようでありました。父も最初のころは、一月に一度か二月に一度やつて来ていたようでありましたが、二、三年もたつと、その父もやつて来なくなつた。同時に仕送りもとだえ勝になり、私が中学校へ入つたところからは、授業料もなかなか払えない状態になりました。そしてそれでも督促したり、嘆願したり、裕福でない母方の里の援助を得たりして、中学の二年は修了したのでありますが、生活は全く窮迫してしまいました。その上、母は、いまでいう欲求不満のノイローゼになつていて、始終胃

最初に左翼的な思想の洗礼を受けたといつていいでありましょう。それから左翼的な本をあきはじめた。まだ満で十七才のときであります。ところがそのころあるカフェーのコック場にいたのでありますが、ある朝、ふと新聞を見ると、すみつこに三行ほどの自殺未遂者の記事が出ているのであります。神戸の近くの須磨の海岸で入水自殺をはかつて助けられ、須磨の警察に保護されている女の記事でありますが、その名前には伏せられていて、仮名と書いてある。だが、私には、これは母だという直感がありました。で、須磨へ行く一日のひまをマスターに申し出たのですが、マスターは信じない。それが私の母であるという証拠は、その三行の記事からは見出せるはずはないのですから、もつともな話であります。そこでマスターと大喧嘩になり、店をとび出して須磨の警察署へ行つたのでありますが、やはり母で、暗い四畳半の畳の間の保護室に、ひとりしよんぼり坐つておりました。それが転機となつて、神戸と姫路との間を走っている山陽電車の車掌になつたわけです。満十八にならないと車掌になれないのであります。見習期間が半年ほどありますので、その期間に満十八になる勘定だつたので、採用されたわけでありました。この母は、その後自殺マニヤのようになり、私が獄中生活をしている間に本望を達しています。

だが、車掌になつて間もなく、非合法の労働組合―全協と呼ばれる全国労働組合協議会の組織を職場につくる運動をはじめています。それから共産党に入党し、その労働組合をプールにして、戦闘的な人々をピツク・アツプして、共産党の細胞の拡大をはかつていたのであります。ここではじめて文学というものにふれたのであります。党の非合法の出版物、たとえば戦旗などときたま小説がついていました。しかしそれらを読んで、何かがちがうという感じがしていました。それらの小説は、

腸をわるくして寝ている。その母の暗い顔を私は忘れることはできません。そしてある日、お前、大阪へ行つてお父さんにどんなに困つていかを話をしてお金をもらつて来いと私に責任があるかのように叱りつけるようにしたのであります。どこから上面したか、大阪までの汽車賃を出してくれたのであります。それで仕方なく、大阪の父の家をたずねたのであります。思いがけなく父は、芸者上りらしい女と同棲して、私を見るなり、頭から叱りつけるのであります。それでも金の話をしますと、その女の顔をうかがうように見てから、今はない、汽車賃だけはやるからすぐ帰れ、というわけできつとしまもない。仕方なく汽車賃だけはもらつて、一たんは大阪駅まで帰つて来たのであります。母の暗い顔を思いうかべてはとも帰れません。しかも帰れば、私の分だけは口がふえる。といつて今更、父の家へは引返せない。で、そのまま家出したのであります。そして現在にいたるまで家出のしつ放しであります。

その晩は、中の島公園のしげみのなかに、巡査の佩剣におびえながら一夜をすごしました。それから、当時の家出少年のたどるコースを順調にたどつたわけでありました。出前持から小店員や見習コックなどから不良少年にいたるコースであります。しかしこの不良少年は、おかしな不良少年で、さかんに本を読んでいたようであります。一方講義録で勉強もして、専検という当時の中卒の資格をあたえる試験検定を受けて合格しています。何とか現在おかれている境遇から自由になりたいと懸命に何かを求めていたらしいことは事実であります。当時読んだ本は、自然科学の本が多かつたようであります。どういう理由でそんな本を読んだのかわかりませんが、ドイツの社会主義者であるベーベルの「婦人論」を読んでいます。それは赤表紙の厚い本でしたが、その本によつて

必ずといつていいほど戦闘的な労働者が登場します。しかしそれらの労働者は、現実の私たち労働者とかけはなれているのであります。それらの小説は、残業に疲れ果てて飲まずにはいられない焼酎の味についても知らなければ、最終の車を車庫へ放り込んで、深夜の街を歩いて下宿へ帰る途中、ふと「一体おれは何のために生きているんだらう」と呟かすにはいられない内心にふいに起る孤独についても全く知らない。そして事実、心のなかにふかい絶望やニヒリズムをもっている人たちが、すでに当時の危険な共産党の運動に参加して来た。むろん私自身も、そのような人々に労働者の一人としてふかい共感をもつていた。だが、小説のなかの労働者は、立派でありすぎる。いわば教科書的な人物が多いのであります。で、私は、いささか性急ではありましたが、「文学は、政治的な実践には何の役にも立たない」という考えをもつていたのであります。むろん今から考えますと、弾圧に弾圧につぐ切迫した状況下でありますから、党の機関誌にのる小説もそのようにならざるを得なかつたであろうということは想像がつかます。むろん現在においては、事情がすつかりちがつているので、いわゆるプロレタリア文学においても、ちやんとあの焼酎の味やふいにおそいかかつて来るニヒリズムについても知つていことはいうまでもありません。

その後、二年あまりで、おきまりの検挙にあい、一度は東京まで逃げて来たのであります。結局東京でつかまつて神戸まで護送され、一年ほど神戸中の警察をたらいまわしになって、一番では、改悛の情なしというところで、徴役四年。控訴して未決の独房に一年ほどいたのであります。おかげで徴役三年、執行猶予五年となり、刑務所の裏門から放り出されたのであります。しかしこの二年間が、私の生きて行く方向をかえてし

まつたといつていいでありましょう。警察にいるときに出会った拷問、しかし私はいわば下端の党員でありましたから、拷問であるから、やはりつらい。一回拷問されると、生きる力がなくなってしまうようなことなってしまう。拷問されるのは、組織のメンバーを白状しろということでありますが、東京へ逃げたのも大きな原因になっている。党の中央部の誰かに連絡しに行つたのではないかと思われたらしい。その名をいえと拷問で責められたるわけでありまして。しかし私は、ほんとに逃げて行つただけですから、白状しようがないわけでありまして。しかし三回目に拷問に引き出されたときは、身体も弱つていて、その拷問されている最中に、あまりの苦しさ、今度はいよいよだめになってしまつたらう、死んでしまつたらう、そういう気がしたのであります。その一瞬に、運動にあけくれている自分の生活全体がほんとうには何の意味もなかつたように見えて来た。しかしすぐ気を失つてしまつたので、結果的には、白状しなかつたという殊勝なものになっていますが、留置場にかつ

#### ○拷問のこと

ぎ込まれて、あの冷たいコンクリートの壁にもたれかかつていたとき、そのときの自分の心が思い出されて、つよいシヨツクを感じたのであります。それは、自分の存在の底にある虚無に気付いたといつていいであります。しかしそのような自分の事実とこたわるといふことは、プチブル的だと思ひ直して、考えないようにしたのであります。

だが、未決の独房のなかで、この事柄が愛の問題となつて観念的な形で起りました。私の片腕になつて働いてくれた木村義房\*という男が、重態だということと秘密な通信で知つたからであります。彼は、運動中から肺がわるかつたのでありますが、私は彼を愛してました。それだけでなく、彼は職場の仲間であり、親友であり、さらには同志であつた

には死ねないという事実だけは巖然と残るのであります。この事実は、私の信じていたいろんな愛にうたがいをいだかせ、そして崩壊させました。それではお前は、大衆を愛しているとパンフレットに書いていたが、ほんとうに愛しているか。否なのであります。お前はプロレタリアを愛していると思つているが、それではほんとうに愛しているか。たしかに愛しているが、ほんとうに愛していたのではない。自分は、死ぬためでなく、生きるために、自分の自由を獲得するために、この運動をはじめたのだといつても、ほんとうに愛していたのではないという答えのなかに、自分自身の空虚と無意味さを感じずにはいられなかつたのであります。そのとき、偶然、読み古した一冊の文庫本が、私のところへ差入れられて来たのです。誰が差入れてくれたのか、いまだに私にわからないのであります。恐らくそのころ壊滅したモツブル（赤色救援会）の差入れた本が、未決にいる誰かの手から私へわたしてやつてくれたということだつたのではないかと思つています。それはニーチエの「この人を見よ」という岩波文庫本であります。だが、そのニーチエは、大衆を愛していないとなやんでいるお前ほど馬鹿野郎はないと笑うわけでありまして。自分の愛に失望している私を、さらに失望させるのであります。私は、自分自身に失望し、弁護士のすすめで、ニーチエを利用して、党も同志もほんとうに愛していなかつたという旨の転向上申書を書いたのであります。――**姫路へ帰ること、母の失踪、マツチ工場。**

出獄後は、すぐに上京したのでありますが、誰も知つた人のいないところへ行きたかつたからであります。むろん当時の特高警察の組織は完璧に近いものであつて、警察へとどけずに上京したにもかかわらず、私は、上京して一週間もたたないうちに、特高の訪問を受けなければならなかつたのであります。おかげで、前身がバレて、すぐそこを首になつ

のであります。彼が未決まで廻されて来たのは、私が彼も党員だと白状したからではありません。自らすすんで、自分の誇りとして、党員だとな乗つてしまつたのであります。そのような男でありましたが、彼が重態だと聞くと、私としてはじつとしていられなかつた。朝から晩まで、彼はどうしているか頭からはなれないわけですから。どうしてもシヤバへ、社会へ出して、ちゃんとした病院で治療を受けさせてやりたかつた。そのときひよいと妙な考えが頭にうかびました。私のにぎつていた組織のメンバーをすっかり白状するから、彼を仮釈放してもらえないかという嘆願書を出すという考えです。その考えは、たしかに私を戦慄させました。それは、私にとつて死ぬ以外につぐないような裏切りであるからであります。しかしこの考えは、一転して、――この点が、担当の看守に朝の点検のとき口をきかなければ、一日中、読む本もなく、小さな机の前に坐つていなければならぬので、そんな生活を一年近くつづけていると、どうしても観念的になつてしまつたという証拠であります――つまり彼のために死ぬるかどうか、という問いとなつて自分につきつけられたのであります。ほんとうに愛するといふことは、その相手のために死ぬことだと私は考えて来ていたのでありますが、それでは彼のために死ぬるかという問いに対しては、否という答えの心の中から聞えるのを防ぐことはできなかつたのであります。彼を愛していることはたしかであります。一日中、彼の病状が気にかかつているからであります。だから彼を愛していることはたしかであります。それではほんとうに愛しているかとなると、否なのであります。

もちろん私は、自分自身に弁解しました。そんな問いはプチブル的だとか、観念的だとか、私だつてシヤバへ出れば、私自身にしか果せない役割があるんだとか、いろいろ弁解はつくのであります。彼のためには死ねないという事実だけは巖然と残るのであります。この事実は、私の信じていたいろんな愛にうたがいをいだかせ、そして崩壊させました。それではお前は、大衆を愛しているとパンフレットに書いていたが、ほんとうに愛しているか。否なのであります。お前はプロレタリアを愛していると思つているが、それではほんとうに愛しているか。たしかに愛しているが、ほんとうに愛していたのではない。自分は、死ぬためでなく、生きるために、自分の自由を獲得するために、この運動をはじめたのだといつても、ほんとうに愛していたのではないという答えのなかに、自分自身の空虚と無意味さを感じずにはいられなかつたのであります。そのとき、偶然、読み古した一冊の文庫本が、私のところへ差入れられて来たのです。誰が差入れてくれたのか、いまだに私にわからないのであります。恐らくそのころ壊滅したモツブル（赤色救援会）の差入れた本が、未決にいる誰かの手から私へわたしてやつてくれたということだつたのではないかと思つています。それはニーチエの「この人を見よ」という岩波文庫本であります。だが、そのニーチエは、大衆を愛していないとなやんでいるお前ほど馬鹿野郎はないと笑うわけでありまして。自分の愛に失望している私を、さらに失望させるのであります。私は、自分自身に失望し、弁護士のすすめで、ニーチエを利用して、党も同志もほんとうに愛していなかつたという旨の転向上申書を書いたのであります。――**姫路へ帰ること、母の失踪、マツチ工場。**

出獄後は、すぐに上京したのでありますが、誰も知つた人のいないところへ行きたかつたからであります。むろん当時の特高警察の組織は完璧に近いものであつて、警察へとどけずに上京したにもかかわらず、私は、上京して一週間もたたないうちに、特高の訪問を受けなければならなかつたのであります。おかげで、前身がバレて、すぐそこを首になつ

のであります。彼が未決まで廻されて来たのは、私が彼も党員だと白状したからではありません。自らすすんで、自分の誇りとして、党員だとな乗つてしまつたのであります。そのような男でありましたが、彼が重態だと聞くと、私としてはじつとしていられなかつた。朝から晩まで、彼はどうしているか頭からはなれないわけですから。どうしてもシヤバへ、社会へ出して、ちゃんとした病院で治療を受けさせてやりたかつた。そのときひよいと妙な考えが頭にうかびました。私のにぎつていた組織のメンバーをすっかり白状するから、彼を仮釈放してもらえないかという嘆願書を出すという考えです。その考えは、たしかに私を戦慄させました。それは、私にとつて死ぬ以外につぐないような裏切りであるからであります。しかしこの考えは、一転して、――この点が、担当の看守に朝の点検のとき口をきかなければ、一日中、読む本もなく、小さな机の前に坐つていなければならぬので、そんな生活を一年近くつづけていると、どうしても観念的になつてしまつたという証拠であります――つまり彼のために死ぬるかどうか、という問いとなつて自分につきつけられたのであります。ほんとうに愛するといふことは、その相手のために死ぬことだと私は考えて来ていたのでありますが、それでは彼のために死ぬるかという問いに対しては、否という答えの心の中から聞えるのを防ぐことはできなかつたのであります。彼を愛していることはたしかであります。だから彼を愛していることはたしかであります。それではほんとうに愛しているかとなると、否なのであります。

たころ、ふとニーチエの賞めている三人の作家に好奇心を起したのであります。一人は北欧のシュテフイター、一人はゲーテで、とくに「エツケルマンとの対話」をあげています。しかしこの二人は、さほど私をおどろかせなかつた。しかし三人目にあげているドストエーフスキイを読んで、あつと思つたのであります。文学というものは、こういうものかと思つたのであります。そのときは、はじめにお話ししましたように満で二十七になつていました。そのときドストエーフスキイから学んだことは、「たとえ人間にほんとうの自由も解決もなくなつて、救ってくれつといつたつて少しも差支えないのだ」ということであります。「地下生活者の手記」のなかに歯痛はいたになやむ男の話が出て来ますが、彼は、医者へも行かず、まる二ヶ月もの間、うなりにうなりつづける。彼は、何故そうするかを説明して、このうなり声のなかに曰くがあり、快感があるのだといつています。ほんとうの自由もない、ほんとうの解決のない人間の出すうなり声―それは、「助けられるのぞみを持たない人間の助けを呼ぶ声だ」といつていいと思うのであります。そしてこの助けてくれという自由を求めて訴える訴えこそが、文学なのだだといつていいのであります。フランスの実存主義の哲学者でもあり作家でもありますサルトルが「文学とは、自分の自由の、他人の自由への呼びかけである」といつていますが、要するに「救ってくれえ」という訴えにほかならないのであります。そして私もはじめて、小説を書くかういう気になつたのであります。

○しかし自由とは何なのでしょう？

〔削除〕 以上が、私が、文学をやるうとした動機であります。

ここで問題になつて来るのは、文学者は、どんな自由を求め、それに生きていかとうことでありましよう。と申しますのは、文学というものは、徹頭徹尾人間を問題にいたします。人間をはなれては、文学というものは成立しないのであります。

となるところのものから申し上げたいと思ひます。(幾分、話が弁証法的となり、その上、話下手でありますので、弁証法的な考へ方に馴れてゐない皆様方のある方には、単なる詭弁と聞え、単なる逆説と聞えるかも知れませんが、この話の後に質問をお受けすることになつてゐますから、そのときその理解の疎通しない点をひらきたいと思ひます。)

1. 人間は、どうして人間を知り得るのでありませうか。人間とは何かといふ答へになる基礎になる知識はどうして得られるのでせうか。僕は作家でありますので、理論的ではなく、体験認識的にお話し申上げたいと思ひます。そしてこの人間はいかにして知り得るかといふ問題が、文学の上の表現の方法を決定して居るのでありまして、素朴實在論的リアリズム、自然主義的リアリズム、社会主義的リアリズム、そして戦後出て参りました実存主義的リアリズム等の方法に区別して居るのであります。どうしてこゝういふことが起るのでせうか。

α. こゝで話してゐる僕は、皆様方からごらんになつて、何だと思ひになりますか。僕は、僕自身では人間であるつもりなのであります。が、どうでせうか。これは御相談申上げてゐるのです。猿だと云はれても僕は決して怒りません。進化論によれば、僕はまがふことなく猿の子孫であるからであります。―皆様は、お笑ひになりましたね。といふのは、僕が人間であることは、自明であるからであります。そんなことは、問題なく判つてゐることでありまして、さういふことを問ふといふことは、それ自身をかしなことなのであります。そして人生に於ける大切なこと、といふものは、多分にこのやうなをかしさをその一面にもつてゐるのであります。作家といふものは、とくにこの人生のことを真剣に考へる作家ほど、このやうなをかしさから、運命的にまぬがれることは出来ないのであります。このをかしさは何から起るかと思ひますと、作家の心

そして人間の問題は、究極には、人間の自由の問題と関係なしには、考えられないのであります。これは、文学をつくる面から考えても、明らかだと思われるのであります。―つまり文学者だけでなく、人間の求め、それに生きている自由というのは、この世のなかを照す光源のようなものだといつていいのであります。たとえて申し上げますと、自由をもつていない」

〔以下ページ欠落〕

\*木村義房 宇治川電気(山陽電鉄)時代の同僚。1931年8月に検挙された。

### 椎名麟三講演メモ1(124153)

年月日不明 四〇〇字詰原稿用紙半分(裏面使用) 1枚 鉛筆書

今日「人間について」といふテーマでお話し申上げたいと思つてゐますことは、人間についての、所謂人間学としてではなく、この現代に生きてひとりの作家としての僕が、人間についてどう考へてゐるかといふ自分自身に与へた問いに対する自分の答として、お話し申上げたいと思つて居ります。しかし僕が、人間といふものは、こゝういふものだと思ふといふとき、必ず、僕は、人間といふものはこゝういふものだと思つてゐるが、これは間違ひではないでせうかといふ疑問符がついてゐるといふことを、お忘れにならないでいただきたい。と申しますのは、人間は、人間を決定的に知ることが出来ない、知ることが出来たと信じてゐても、それは、ひよつとしたら誤解であるかも知れないといふ可能性から免れることが出来ないと思ふからであります。何故、誤解であるかも知れないか、或ひは誤解だと思つてゐることが、既に誤解ではないかといふ問いの起るのは自然なのであります。その問いの前に、その問いの根底

のなかに、ひとりの例外者が住んでゐるからであります。云ひかへますと、僕がこゝで、僕は人間であると申上げたときに、笑ひと共に、いやお前は人間ぢやないと云ひたくてうづうづした方が、この皆様方のなかに、ひとりかふたりはあつたと思ひます。そしてそのやうな方がだまつて居られるのは、若し、さういふ方が今立つて、お前が、自分が人間であると云つてゐるけれど嘘だ、お前は人間ではないと云はれたら、他の方々はまた

〔以下ページ欠落〕

### 椎名麟三講演メモ2(124154)

年月日不明、ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆書

今日お話ししようとする命題は、一応「現代文学に於ける諸問題」となつて居りますが、正面切つてそのテーマに対するという風ではなく、むしろ感想風に自由に話をすゝめて行きたいと思つてゐます。時折り自分のものつとも深い関心をもつてゐる問題については、とんでもない方向へ脱線するかも知れません。それは講演に馴れてゐない、口下手の作家の愛嬌としてお見逃しを願ひます。

○現代の文学に於ける問題は、第二次大戦への回想と、第三次大戦への不安にはさまれてゐる、云はゞ苦悩と混乱といふ時代的な特徴への理解なしには、何の意味も持たないと極言することが出来ます。それは、終戦後、どのやうな問題が、どのやうな形で起つて来たかを、ざつと振り返つて見たいと思ひます。最初、終戦後の文学的な問題としてとり上げられた、織田作の『可能性の文学』であります。この世の一切の問題

が、それがどんな問題であつても、その問題自身単独で起り得ないのと同時に、可能性の文学は、私小説に関して、私小説の否定として提起されたのであります。

・可能性の文学―文学に於ける冒険性の主張。偶然の問題―自然主義リアリズムの因果的必然論への反逆。パトス

驟雨の解説。―批判偶然が絶対化されると、一切がただよひはじめ、作品と作家の関係も偶然となる。

・戦後文学―私小説的なリアリズムで、現代がとらへられないといふこと。

リアリズムの変遷―自分と人々との関係。↓自分と人々の

(カメラ) 好奇

曖昧

関係を規定するものとして、家、民族、絶対性の欠如。↓絶対的な他者。人類。↓批判、志賀直哉の兎を例にとる。

○どうすればいいか。(実践)「削除 その分析」。―これは、主体性論議や、実存と社会、或ひは政治と文学などといふその後につた多くの問題と関係をもつてゐる。

・分析―どうすればいいか、といふ問いは、何ものかに関して、人々の生き方が問はれてゐる。何に関して問はれるかによつて、その表現は異つて来る。しかもその問いは、問ひ自身のなかに、相反した二つの弁証法的な契機に分析される。云ひかへれば、どうすればいいかといふ問いは死ねばいいといふ答へで終る。直接的な人間は、こゝで自殺する。弁証法的な人間は、これに対し、死ぬことが出来ないといふアンチテーゼをもつてゐて、そのやうなアンチテーゼをもつてゐるといふことが、キエルケゴールを待つまでもなく絶望なのである。すべてのどうすればいいかといふ問いは、このやうな、客観的な、合理的な、最終決定的な答をもつてゐる。その答へに対して

死ぬことが出来ないといふ反逆は、それ自身、客観的な合理性に対する反逆であるから、非合理的なものであり、このやうな非合理的なものを根拠としてゐるのであるから、分裂は当然である。云ひかへれば、主体性論議も、実存と社会の矛盾も、或ひは政治と文学の問題も、その分裂した二つの間の、果てしなき会話である。それは、やがて会話の果てしなきのなかに、疲れ、飽き果て、蒸発してしまふ。―文学そのものが問はれてゐる政治と文学について考へて見よう。政治に関しての文学。

・政治と文学―政治を文学に対する優位。或ひは文学を政治に対して優位にあるといふ見方。―文学と政治の相対性。他を否定するといふことは、他から否定されるといふことである。

政治と文学との絶対的な断絶 それぞれは、それぞれの根拠をもつ。

―福田恆存氏。プロレタリアの主張に対する時宜を得た発言

政治と文学との実践によつて媒介されるもの。―プロレタリア文学。どちらも曖昧化でなく徹底化でなければならぬ。

政治と文学、その他の論議の意味。―この時代に於ける文学者の責任が問はれてゐる。

この時代に無責任なるもの。―記録文学、エロ文学。

この時代の絶対性―サルトル 無限性の不足(世界文学、新年号、誰がために書くか。)

有限者として有限性のなかだけでは責任をもつことが出来ない。

その点に於て、共産主義は、実存主義よりすぐれてゐる。

文学者はこの時代に対して如何に責任を持ち得るかといふ問いを問ひつけてゐる。

### 椎名麟三講演メモ3 (124155)

年月日不明、岩波書店用箋5枚 鉛筆書

宗教というものと、文学というものは、本来何の関係もないのだ。とにかくそれがどんな宗教であつても、人間の救われるのは、この世界に於てではなく、死んだ後の世界に於てである、というの点に於て共通しているからである。この世界に於て、人間が救われるというのは、邪教であつて、たとえその救いがどんな形で与えられるにもせよ、この世界に於ける救いであるかぎり、計算し得るものとして、具体的なものなのである。その救いは、必ずある不幸からの自由として、与えられる。そしてその自由は、その根拠となつてゐる不幸と量的な比較をすることが出来るのである。

この世界に於ける救いは、一万円より一万二千円の月給の方がより多いという、量的な判断の可能な救いなのであり、その救いは、そのような相対的な自由を意味しているのである。その判断は、また百人を救うより百人を救う方がより正しいことを示して居り、歩きより自動車に乗る方が、その行動半径の比較に於て、より自由であることを実証し得る自由なのである。だからこの世界に於ける不幸は、量的なものであり、量に還元し得るのであり、したがつて、その不幸からの自由としての救いも、量として計算し得るものなのである。そこには死という主體的な問題は、いささかも関係がない。それは人間の力によつて、不幸は幸福へ量的に変革し得るのであり、人間の力によつて、不幸から脱出することが出来るのである。いわば、この世界に関するかぎり、不幸は絶対的なものでないのだ。しかし人間のこの相対的な不幸を絶対化するもの、たとえそれが運命としてであれ、罪としてであれ、そのようなものとして

絶対化して見せるのが、邪教の魔術なのであり、人間に対して阿片として働くところの宗教なのである。たとえば、プロレタリアとしての自己の経済的な不幸な運命は、プロレタリアの力によつて、相対的に変革し得るものなのである。しかしその不幸な運命を、いろいろな観念によつて、たとえば前世に於ける宿縁であるとか、それがその人の人間として不可避な神から与えられた運命だとかいうことによつて、その人の自由への要求を押しつぶす役割を演じてゐる宗教は、明らかに人間に対して虚偽を押しつけるものであり、僕たちは、そのような宗教を阿片として、拒否せずには居られないのである。

不幸というものは、いままで説明したように、自由と関係をもつてゐる。僕たちは、自分を不幸と感ずるときに、自分の自由に於て、現在の自分を眺めるからである。金のない自分を不幸と感ずるときは、金がない、という不自由から解放された自由な自分が、憧憬として心のなかにあるときである。自由への意識が現実の自分を照らし出すのであり、その光りで現実の自分を眺めるときに否定的な暗さをもつて感じられるのである。不幸という意識は、そのような機制をもつてゐるのだ。だから自由の意識のないものにとつては、不幸の意識もない、ということが出来る。そしてその自由が、不幸な自分を、その自由へ変革することを命ずるのであり、この世のあらゆる実践は、その命令によつて導かれてゐるところの実践なのである。だから自由の意識に「削除 於て」貫かれていない実践は、実践ということが出来ない。いいかえれば、それは動物的な盲目的な行動なのであり、僕たちの日常は、このような行動によつて満ちてゐる、と云つて過言ではない。会社へ行くのも、習慣としてであり、食事をとるのも、習慣としてであり、実践の本質は、蔽われてしまつてゐるのである。だがもし、会社へ行くことが、自分の自由のた



めの行動であるということが意識されているとき、その行動は、はじめて実践という性格をもつ。たとえその自由が課長になつた自分として、その人に思い描かれていてもいい。その自由は、平社員である現実の自分を不幸として自分に示す。そして彼は、現実のその自分の不幸を、「排除 幸福な したがって」自分が自分の自由と考えるところの幸福へ変革するための行動として、毎日の自分の会社づとめを意識するならば、その行動をはじめて、実践と呼ぶことが出来るのである。一歩すすんでいうならば、実践というものは、革命的な性格をもつていないかぎり、実践ということは出来ないのである。

云ひかえれば、この世界は、量の世界として、決定的に唯物的な世界なのである。いまの会社員の自由も、量的に、つまり科学的に実証し得るのである。そしてこの世界は、いささかも神に關係をもつてはならないし、神と關係をもたせようとするあらゆる試みに対しては、断乎としてたたかわなければならぬのである。僕たちは、僕たちのこの世界を僕たちの責任として引受けなければならないのである。たとえそれは不可能に見えるにせよ、その不可能は、相対的なものである。帯に乗つて空をとぶという、その時代には子供らしい空想として、童話にあらわれた不可能、それを可能にするのは魔術に頼らざるを得ない、と考えられたところの不可能も、いまは立派な飛行機として空をとんでいるではないか。絶対不治と考えられた病気も、ペニシリンやその他の新薬によつて、簡単に治し得るものとなつていゝではないか。この世界には、宗教の介入する余地などは全くないだけではないのだ。僕たちは、この世界のこのような唯物的な性格をきびしく自分たちの前にもつていなければならぬのだ。

そして文学も、この世界を、そしてこの世界の实在を扱うかぎり、文

#### 椎名麟三講演メモ4 (124156)

年月日不明、ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆書

「生きるということ」は「愛するということだ」という古い諺があります。で今日は、愛という問題にかぎつて、私自身のくだらな「ヤブレ」験に即しながらお話ししたいと思います。

女子高

私は、父と母との不和から、大阪の父のもとへも行けず、といつて姫路にいる母のもとへも行けないで、そのまま家出してしまつたのであります。中学三年の一学期のとき、つまり満十四才であつたのであります。しかし家出後は、はなはだ順調に、と申したらおかしいのですが、つまりは当時の家出少年のたどるコース、就職の容易な出前持から不良少年にいたるコースを順調にたどつています。しかしこの不良少年は、おかしな不良少年で、さかんに本を読んでいました。現在おかれていた状態から何とかして救われたい、現在の境遇から何とか自由になりたい、そのてだてを本から教わろうとしたといえるのであります。当然、結局は、現在の社会制度そのものがだめなんだ、という信念をそれらの本から与えられて行つたようであります。

母が、須磨で入水自殺をはかつたのを契機として、山陽電車の車掌になりました。早速、当時の非合法の労働組合を組織し、それをプールにして、つまりその組合から、意識的な労働者をえらんで、共産党の細胞を組織しました。

〔以下ページ欠落〕

愛、自由、幸福

⑥

女子高

学の世界は、決定的に神と關係がないということ、もしそれが神と關係をもつとすれば、むしろ神がない、という実証となるにすぎない、ということを、しつかりと認識することが必要なのである。

1

僕は、この講演に於いて、明らかに一つの目的をもつています。それは、僕が洗礼を受けたということに關して、文学者からいわれる多くの言葉、真のキリスト者であれば、救わ<sup>て</sup>るのであるから、文学はやれないはずだ、ということから、キリスト者は、文学をやつてはならないというような禁止的な発言に対して答えるということであります。この問題は、キリスト者の側からも、信仰と文学は一致しないという訴えや、信仰と文学はどう結びつくのかという疑問などが、その一致は不可能だという暗黙の前提となつて、持ち出されるのを見るのであります。そして僕のこの下手な講演が、キリスト者に於ても文学は可能である、という消極的な答えではなく、真の文学は、キリスト者にだけ可能であるのだ、ということと、この問題は、同時に信仰と実践、永遠と時間などの問題といささかも変りもないのだ、ということ皆さんに知らせることが出来れば、本望だと思つております。

2

〔以下ページ欠落〕

その間の二年の牢獄生活が、私の生きて行く方向をかえてしまつたといつていいであります。一つは、警察で何回かの拷問にひき出されたとき。私の場合は拷問といつても簡単なものであつて、この講堂の広さの警察の道場の真中に引き出され、錠型におかれた低いちよつと腰掛のような低い机の一方に検事がすわり、一方の机には書記がすわる。そして特高刑事がその前で拷問するのであります。つまり後手にしげつた間へ竹刀をつつ込んでこじ上げるといふだけのことでありますが、しかしごく痛いし苦しい。一回拷問をされると、歩く力さえなくなつてしまふ。しかし何回目かの拷問に引張り出されて拷問されているとき、思いがけない自分を見てしまつたのであります。いよいよ駄目だ、ここで死んでしまふだろうと思つたとき、ふいに運動にあけくれしていた自分の生活全体が見え、その生活全体はほんとうには何の意味もなかつたのであります。しかし特高の方は、そんな私の心を知らないのですから、えいつとしめ上げたので、私は氣を失い、結果的には白状しなかつたといふけなげなものになつておりますが、私のそのとき見たものは、私を打ちのめしてしまつていたということは事実だつたのであります。

これと同じことが、未決の独房において起りました。それは観念的な形で起つたのであります。問題は、観念的な事柄なので、その話ははぶきますが、要するに「ほんとうの意味では同志も大衆も愛していなかつた」という事実面に直面したといえるのであります。このことは、同時に、「ほんとうの意味では生きていゝのでない」ということも意味していたのであります。出獄後も、特高につきまとわれながら、したがつていつも飢えながら、この人生の「ほんとうの意味」を求めて、もつぱら哲学の本を読んでいました。それは、実存哲学といわれる系譜の本であります。おかしな自殺をはかつたのは、その間<sup>か</sup>のことです。何故

なら、それらの本に、生きるほんとうの意味を見出すことのできなかった私にとつては、この人生は、生きるに値しないと思われたからであります。しかも最後のギリギリのところで死ねなかつた私は、自分はやはり臆病者だと思つていました。もしその当時の私に向つて、「何故生きているのか」とたずねる人があつたとしましたら、あの情ない答、つまり「死ねないからだ」という情ない答しかなかつたであります。

「削除 その後、ロシアの文豪であるドストエフスキイを読んで、はじめて「文学」というものはこういうものか」と知つて、小説を書きはじめ戦後発表しはじめたのでありますが、「この世には、ほんとうの救いもほんとうの自由もない、したがつて生きるほんとうの意味もない」ということを書きはじめたのであります。しかし、私は忽ち困つてしまつた。生きるほんとうの意味がないならば、」

〔以下ページ欠落〕

### 椎名麟三講演メモ5 (124157)

年月日不明、ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆書

○これから考えて見ますと、人間の「ほんとうの自由」という場合のほんとうというものは、人間の死というものに関係があるようですね。ふかく考えますと、全くその通りなのであります。「ほんとうの自由」という場合の「ほんとう」だけでなく、「ほんとうの真実」、「ほんとうの正義」、「ほんとうの愛」、そういったもののほんとうというものは、すべて人間の死というものに関係なしには、口にするのできないものなのであります。たとえば「ほんとうの愛」というものについて考えて見ましょう。

。映画―好きと愛、あなたのごときは、死んでも忘れません。  
。国電―マンボ・ズボンとストラックスの十八ぐらいの少女少女。

「死んでもはなさないわ」

。私の若い時代「死んでも愛している」

○ほんとうに愛している。絶対にはなさない

○そして人間にとつて、一切のほんとうというものは、この人間の死に根拠をもつている。つまり何が嘘であつても、死ぬということだけはほんとうだということにであります。そのことは、また人間に「ほんとうという自由」といつたものをもつことはできないということもあらわしているのであります。

○一つのわかり易い例を申し上げます。―水に溺れる者の例。

「削除 ○それでは、ほんとうというものはないのであります。それは、たしかにあるのであります。しかし残念なことではあります。人間の手のなかにはありませんが、神の手のなかにある。ほんとうというものに無関心なうちはいいのであります。一たびほんとうというものを自分のものにしたとき、人間は、死ななければならぬのであります。真実を見たもの、この場合の真実は、ほんとうというものであります。真実を見たものは死ななければならぬという有名な言葉もそのことをいっているのであります。また戦争中、武士道とは死ぬことと見つけたりというはぐくれのことばも、武士としてのほんとうの生き方というもの、死ぬこととこのなかにあるということを知っているのであります。だが、死ぬことによつてほんとうの人間となるということは、それ自身おかしなことでありましょう。それは矛盾であるだけでなく、ナンセンスであるからであります。

○今日読んでいただいた聖書の場所は、このほんとうの自由というものがなければ

### 椎名麟三講演メモ6 (124158)

年月日不明、ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆書

○希望と自由との関係

私は、ドストエフスキイというロシアの作家によつて、文学への眼をひられた者なのであります。ドストエフスキイの作品の魅力は、極端への魅力だという人もあります。しかしドストエフスキイは、人間の極端をねらつていてではなく、どんな小さな現実もふかく見つめようとする彼の作家的態度からやつて来るのだといえると思うのであります。その典型的にあらわれているのは、「未成年」という作品だと思つたのであります。その主人公のアルカージイは十八才の少年なのであります。その少年は、いわば私生児の非常に孤独な少年なのであります。彼は、その孤独のなかで、ロスチャイルドになろうという理想を育む。ロスチャイルドというのは、当時バリーにすんでいた世界的な大金持で、いわば現在のロッキンフェラーのような存在なのであります。しかし私は、このようなアルカージイという少年をつくり出したドストエフスキイの心が手にとるようになるのであります。つまり彼は、それほどひどい貧乏だつたという現実が、その人物の創造のなかに感じられるということなのであります。いいかえれば、ドストエフスキイ的な発想というものは、その人物の創造のなかに端的にあらわれているということなのであります。

彼は、こういう考え方をします。いま、千円という金がとても欲しい。人を殺しても欲しいくらいに、いま、千円の金がほしい。しかしそれだけにどまるならば、彼はあのような大作家にはなれなかつたのであります。彼は、そこから一歩すすんで、千円ほしい自分をきつめて行く。

何故自分は、千円ほしいと思いきりなんだろう。百万円ほしがつても一向差支えないではないか。むろん百万円あるに越したことはない。じや何故千円であつて、一億円じや困るのか。一億円ならむろんその方がいい。じや、何故地上の富全部じやなくて、ただの千円なのか。こうして彼は、千円ほしいという現実的なあまりに現実的な希望から、その希望のなかにかくされている自分の真実を引き出して来るのであります。彼は、アルカージイという少年に、こういわせずにはいられなかつたのであります。「私には、金は必要ではない。といつて語弊があれば、私に必要なのは力でも力でもない。私の必要としていたものは、ほんとうの自由なのだ」

このことから、ドストエフスキイは、千円ほしいというような卑近な日常的な希望が、人間のどんな希望にもとずいてるかというほんとうの姿を照し出してくれるわけなのであります。いいかえますと、それがどんな希望であれ、希望というものは、人間の自由への要求にもとずいていることを示してくれているのであります。そして事実その通りであつて、人間のあらゆる希望というものは、実は自由を希望しているのであります。

〔以下ページ欠落〕

### 椎名麟三講演メモ7 (124159)

年月日不明、ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

。しかし私は、小さいときから自分を唯物論的に教育して来た。  
。信じられないままに

。イエス・キリストへ自分の全部をゆだねる仕方において信じられるものとなつたということが出来る。

考えてみるまでもなく、ほんとうの自由、ほんとうの救い、ほんとうの愛、ほんとうの正義という場合のほんとうというものは、人間の手のなかにもつことはできない。いわばほんとうと名のつけることのできる一切は、いわば神の手のなかにある。神という言葉につまずく方は、人間の次元を超えたものに属しているとお考え下さつて結構なのであります。それは、人間がどんなに努力しても、人間の手にはもつことはできない。しかし絶対不可能かといえばそうではないということ、私は、イエス・キリスト「削除 から教え」において示されたのであります。信じられないことではありますが、イエス・キリストにおいて、私たち人間へあたえられていると、いうことを知つたのであります。「削除 明日は「ほんとうの」自由というものの具体性とは何か。聖書、一日の苦勞は実はそのことでもありますから、お許し下さい」今日お話ししたかったことは、「削除 つまりみなさん方に」このほんとうの自由、ほんとうの救いなくしては、自分の人生はむろんこの世界も意味を失うだろうということであり、文学もその例外ではない。そして先刻も申し上げましたように、それこそこの現代の求めているものであり、これから生きて行く「削除 若いみなさん方 私たちの責任でもあるだろうと思うからでもあります。ちよつとしたことから私たちは、同じ問題につき当らざるを得ないといつていいのであります。ドストエフスキに「未成年」という作品があります。その作品の上の主人公は、アルカージイという十八才の少年であります。その少年の考えもそこに到達せざるを得なかつたのであります。たとえば、おしるこを食べたり、あるいは山や海へ行つたりするために、千円ほどのお「削除 金」こづかいがほしいなあ、とお思

つたこと、現代においては、自由という言葉は、多義であります。いろんな意味につかわれていると申し上げてもいいであります。タバコをのむのが自由なのか、のまないのが自由なのか、と正反対の場合もある。極端に申し上げますと、みなさん方のおつかいになつて自由という言葉は、一人一人ちがつていると申し上げられると思うのであります。しかしそれでは、自由という言葉の意味はいまいになるのであります。そこで交通整理の必要が出て来るのであります。で、頭のわるい私は、自由というものを簡単に定義づけているのであります。つまり一つの自由は、何から何を救つてくれる自由なのか、ということによつて、その自由の性質がきめられると思つております。私自身に関しても、私自身に關していえば、その人のつかつている自由なるものは、何から自分を救つてくれる自由なのかということによつて、その人の自由の性質がはつきりして来る。その人の自由は、一体、奴隷を鎖から救つてくれるところの自由であるのか、あるいはこの世の心配や不安や恐怖などから救つてくれるところの自由であるのか、それともこの社会や世界の不合理や矛盾から救つてくれるところの自由であるのか、というように何から救い何から救われるのかということによつて自由の性質がきまつて来る。したがつて、その自由を根拠におく、人生観や世界観もきまつて来る。どんな人生観や世界観も、何等かの自由を根拠にしないかぎり成立しないからであり

いになつたことはありませんか。そのときアルカージイという少年は、こういう考え方をするんです。どうして自分は、一万円でなく千円ほしいと思うんだろうというふうにです。むろん千円より一万円の方がいい。それじや一億円じやわるいのか。むろん一億円の方がいいにきまつていますね。それじや世界中の富をもつといいわけですね。しかしドストエフスキはそれで行きづまりません。世界中の富以上のものを何故求めないのだろうか。そこではじめて、千円のおこづかいがほしいと思つている自分の心は、世界中の富以上の富、ほんとうの自由と救いを求めているという自分の心に行きあたるのです。千円のおこづかいがほしいということは、それをもたない自分からの自由と救いを求めているわけです。ありますが、そのほんとうの自分の心は、ほんとうの自由、ほんとうの救いにつながつていっているわけなのであります。だからどんな小さな自分の要求や不満でも、大切に考えていただきたい。さらにできるだけ欲張りになつていただきたい。そのなかには思いがけない真理がかくされているのだということも申し上げて、私の今日の下手な話を一応打ち切りたいと思ひます。御清聴ありがとうございました。

### 椎名麟三講演メモ8 (124160)

年月日不明、ノート紙2枚半 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

ドストエフスキにならつていうならば、私は、遂にこの偉大な言葉を口にしたところでしょう。しかし、自由とは何なのでしよう。むろん自由という言葉は、みなさん方には、わかり切つた言葉のように思つていらつしやると思ひます。毎日の新聞をこらんなつても、「自由」

ます。だから簡単に申し上げますと、自由という言葉は、本来の意味において、救いという言葉と同じ意味なのであります。だからほんとうの自由を求めていた私は、ほんとうの救いを求めていたといつていいのであります。だが、ほんとうの自由、ほんとうの救いの性格は何であるか。ここでみなさん方と一緒に、簡単な筋の小説を例にとつて、一緒に考えてみたいと思ひます。ある日、男と女が出会つて、おたがい愛し合うようになった。

。自由の多義性――

。一つの小説の例――決心して諦めなさい。男らしくそんな女のことを忘れて新しい出発を決断

。二つの自由の話――女つて、女ひとりではない。たぐささんいる。要約しますと、それを救いとする人間の自由は、客観的な全体的な自由と主観的な個人的な自由とに、大きく二つに区別できると申し上げることが出来るのであります。しかしここで困つたことには、この二つの自由は矛盾し合うということならあります。といつてどちらをすてて、どちらをとるということはできない。どちらかの自由をすてたときには、人間として片輪の生き方しかできないということが、戦争やレジスタンスの体験から痛切なものとなつたのであります。先程申し上げました戦争中の「滅私奉公」についても同じことがいえます。私をほろぼして公に奉ずるといふ生き方が、戦後、個人の自由を殺してしまふ非人間的な生き方、つまり人間として片輪の生き方だと批判されました。だが、ひるがつて、逆に公の方を滅して私の個人的な自由に生きるといふのも片輪の生き方なのであります。戦争といふ体験を通じて世界の人々の得たものは、この二つの自由は共存させなければ、片輪でない真の人間となることはできないという人間の事実なのであります。共存という考え

方は、この二つの自由は、質のちがつた自由なので、そこに統一なんかあり得ないからであります。その共存を可能にするためには土台がいるわけで、その土台になるものこそ、「ほんとうの自由である」ということがわかつているのであります。いいかえるならば、この二つの自由の共存こそ、現代の人間的な要求として、その共存を可能にするほんとうの自由が、哲学者や文学者に追求されてきたと申し上げてもいいのであります。

フルシチヨフさんの二つの自由の平和共存も、このほんとうの自由、ほんとうの救いということを度外視しては成立しないと申し上げられるでしょう。「削除 今度のキューバ問題で、世界の私たちは、その事実を痛いほど知ったわけでありませう。この二つのアメリカとソビエトの質のちがつた自由の平和共存に、世界全体の破滅がゆだねられているということでありませう。いいかえれば、この世界全体を破滅から救うためには、二つの自由は平和共存してもらわなければならないということでありませう。しかしその二つの自由の平和共存を可能にするのは、世界の破滅という恐怖でなく、世界の破滅から救ってこれるほんとうの自由というもの、ほんとうの救いというものをも土台としなければ、いつも私たちは、キューバ問題のような危機に見舞われるだろうということは、見易い道理であります。個人においても同様であつて、私たちの内と外の分裂を救うものは、私たちの決定的な破滅である死から救ってこれるほんとうの自由でなければならぬということも、見易い道理であります。」

。公に生きる自分、私に生きる自分、そのどちらを失つても、自分全体が失われているつまり死んでいるのも同然だという気がするのであります。しかしそのような、ほんとうの自由、ほんとうの救いというものがあるのでしょうか。「ない」として小説を書きはじめた私に忽ち困つたことが起りました。「この世のなか」以下裁断

だろうと思ひます。しかも残念ながら、私自身も当惑しているのであります。実は文学案内のリーフレットを見るまではこのことを知らなかつたのであります。この大学の事務局の方が、私に文学の話を何故依頼されたかを考えると、その理由に思ひあたらないわけではありませぬ。というのは、私が現在も背負いつづけている文学の課題は、実は労働者であつたときに背負わされたものであるからであります。その課題は何であつたかを、自分のくだらない身の上話を申し上げながら、何故書くかという文学の本質的な問題にふれてみたいと思ひます。だから課外講座の意味で、楽な気持ちでおき願ひたいと思ひます。

私は、関西の姫路郊外の農村に育つた男であります。大阪にいる父と別居していた母とその農村に暮らしたのであります。しかし父からの送金が絶えて生活に窮迫しましたので、母のかわりに父のもとへ経済交渉に行き、一喝のもとに追い出されて、母のもとへ帰るに帰れずにそのまま家出という形になつてしまつたのであります。そのとき中学三年の一学期のときでしたから、学歴は、みなさんの方がずつと上だろうと思ひます。

以下ページ欠落

いいかえますと、私たちの意識は、つねに何物からの自由としてしか意識できないということなのであります。

「削除 ここて、一昨年、お話ししました「表現について」の問題を思い起してもらいたいと思ひます。この会へはじめて参加なさつた方もおられると思ひますから」簡単に申し上げますと、人間の自由が、たとえ孤独としての自由であれ、あるいは、さらに絶対的な世界全体からの自由であれ、また歴史的なあるいは日常的な相対的な自由であれ、その自由において、はじめて自己自身や世界とその事物が見えるのであります。いいかえれば、

由」としてが、ほんとうの自由であるという答えを出しました。また、先程名前をあげましたサルトルは、実存主義的な自由こそほんとうの自由であると考えています。またイギリスのグレアム・グリーンは、逆説的な自由を共存の根拠として提出しました。いずれにしても理論的な欠陥をもつていると私には考えられるのであります。何故なら、私もほんとうの自由を求めて来た人間であるからであります。だからその論理的な欠陥に対する嗅覚だけは発達しているようなのであります。

それでは、ほんとうの自由、ほんとうの救いというものは、人間にはないのであるでしょうか。「ない」として小説を書きはじめた私に忽ち困つたことが起りました。「この世のなかには、ほんとうの自由もほんとうの救いもない」ということを書いてあるわけなのであります。自分の書いた作品から自分へ問いがはねかえつて来るのであります。ほんとうの自由、ほんとうの救いがないのなら、生きて行くほんとうの意味なんかあり得ない。

以下ページ欠落

### 椎名麟三講演メモ9 (124161)

1962年10月9日、ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書  
神奈川労働大学での講演「私は何故小説を書くか」

#### 神奈川労働学校

私の今日のお話のテーマは、「私は何故小説を書くか」であります。労働運動に必要な専門知識をさずけるというこの大学の目的からは、いささか外れているのではないかと思ひになつていらつしやる方が多い

人間の自由というものは、光源―光の源なのであつて、自由のない人には、真暗な部屋に坐つていようにも見えない。私は、「赤い孤独者」を書いて以後、何も書けずにのんだくれていたのであります。そのとき、いつも文字通り眼の前が真暗な思ひがしていました。自分の生き得る自由を見失つてしまつたからであります。しかし自由がやつて来て、つまり光がやつて来て、はじめてものが見える。私の場合は、イエス・キリストの恵みとして与えられた自由であつたわけですが、それはとにかく、何らかの自由という電灯をつけないければ、部屋のなかを見ることができないし、さらにそれを意識することはできない。だからまた、そこで生きて行くことはむろん、その部屋の何かについて考えたら書いたりすることもできないわけなのであります。だが、ここで困つたことが起るわけで、人々のもつていらつしやる自由の性質がちがうということなのであります。

。赤い色、青い色。―その矛盾

。読者の立場―純粹な自由―「削除 全体からの」無条件な自由。

ひねくれた批評家の場合。

。高利貸の因業なおばあさんと映画。

#### ○私と文学の関係

ここで、私自身と文学の関係について話したいと思ひます。「削除 私は、十四のとき、家庭の事情で家出したのであります。現在にいたるまで家出のしつ放しであります。家出少年時代は、自然科学の本が好きでしたが、十七のとき読んだドイツの社会主義者であるベーベルの「婦人論」を契機に左翼的な本を読みはじめたようであります。その翌年、母が、須磨の海で入水自殺をはかつて助けられたのを契機に、関西の私鉄の」

以下ページ欠落

## 1. 日本文学の現状

「削除 私は一去年は「表現について」というテーマで、去年は「小説の技術」についてお話ししました。今年は、「小説の創作」というテーマですが、「何故一人の人間が小説を書くに至ったか」またその人間は後にキリスト教の洗礼を受けているのでありますが、「いわゆるキリスト者となつてから、プロテスタントの文学集団である「たねの会」\*へ参加し、その後の文学活動の根柢をそこに置くようになったか」という二点に焦点をしばつて、自分自身のことを語りたいと考えているのであります。」

現代の文学は、戦前のそれとくらべて、たしかに多様であり多彩であります。フォークナーに似た小説があると思えば、カフカ風な小説もあります。一方にまた、社会主義的なりアリズムにつらぬかれた小説があるかと思えば、自然主義リアリズムの美しい作品もある。だが、ひとりの作家に、カフカ風な作品が書かれていたと思うと、次の作品は、それと相容れないアンチ・ロマン風な作品だとすると、私は、その作家の多才さに驚嘆を感じ得ないのであります。みなさんは、誰のことをいつているか、すでにお察しであるだろうと思います。ピュートルの「心変わり」の方法を模倣したことで、江藤淳という批評家と論戦を交わした私は、論戦になつていないと思ひますが―倉橋由美子\*であります。むしろ方法を真似るいうこと自体は、問題ではない。しかし一昨年と去年との話のなかで、話しましたように、一つの方法というものは、その作家の内的な必然性として生れて来たのであるということ、いいかえれば、作者の生きている自由によつて裏打ちされているものであることを考え

されるとすれば、純文学とは、作者の自己を通して、人間が問題となる領域であるといえましよう。だから一番はつきりわかるのは、盗作―他人の作品をぬすむ―盗作問題が起つたときでありましよう。純文学では、一挙に作家としての生命が、社会的に断たれてしまふ。ところで大衆文学においては、いくら盗作しても、営業には差支えないわけでありましよう。あの大藪春彦なんかは全くひどいものだと思いますが、しかしそれで平気なわけでありましよう。むしろマス・コミの方で、それを奨励して書かせている嫌いがある。もうそうなれば、嘘にも、その作品を文学だといえなくなるでしょう。そしてまた読者の方も、面白ければいいわけで、しかしその面白さは、二度繰り返しては読めない面白さだと申し上げることができるといふでしょう。もし時間がありますれば、一つの小説を読んで何故面白いと感じることができるか、ということにもふれてみたいと思つてみます。それでなくとも、一夜にして有名になることもでき、年収も何百万という私なんかから考えられない収入も得られるという小説家々業は、小説志願の人々にある影響をあたえているということは事実です。私なんかのところへ無断で作品を送りつけて来られる人は、大抵、どこかの雑誌社に紹介してくれ、金に困つてゐるからという手紙がその小包みのなかに入つています。―それでは、一体、小説を何故書くのか？

ある日本の有名な作家は、何故小説を書くかと問われて、金と虚栄のために書いてゐるんだと答えていました。しかしむしろそれは、その作家のアイロニーであつて、何故小説を書くかという理由を拒絶するためのものであります。私に文学の眼をひらいてくれたドストエーフスキイも、金のために書いた作品が多い。しかし彼の作品に向つてゐるところの自己は、金のための自己ではないということだけは確言できるのであ

れば、レディ・メイドの服を買うように、右から左への直輸入は、情ない出来事だと思つてあります。月評家も、たくさんの作品に追われて、その作品の成功不成功という観点からしかとりあげない。いいかえれば、批評家の側も、作者の主体の内部へ入つて行くひまもなく、一つの文芸時評で、カフカ風の作品を賞めた後でアンチ・ロマン派の小説を賞めたりしている。「削除 佐古さんから著作権侵害を」訴えられるかも知れませんが、一体「文学はこれでいいのか」といいたくもなつて来ます。そこに欠如しているものは、何か。それは作者の自己であります。デンマーク キルケゴールの定義によれば、自己とは精神であり、自分自身との関係だということになります。文学的にいいかえますと、自己自身からの自由だということになります。しかし直接に自己自身から自由になることができない。それは神様だけに可能な領域であります。と申しますのは、人間は何かについてしか、自分自身から自由にはなれないのであります。「削除 ここにキルケゴールの第三者が登場して来て、むつかしいことになつてしまふのであります。」

たしかに現代の作家は、忙しすぎる。しかしこの忙しいということは、佐古さんは、忙しいという字を分析して、リツシンペンに亡ぶ、うしなうでありますから、自己喪失の状態だといわれて以来、私は、忙しいといえなくなつてしまつて、仕方なくだまつてゐると、ますます忙しくなる。何しろ私は、心臓に欠陥をもつていて、半人前の人間でしかありません。それなのに、本業の小説はむしろ、ラジオのドラマをやるやら、テレビ・ドラマをやるやら、芝居を書くやら、欲のふかい人間でありまして、全く忙しすぎる。しかしもしどんな忙しくても、作家には失えないものがあるはずであります。それなくしては、この世界が意味を失うところのもの、それが自己であるはずであります。もしこんな言葉を許

ります。いいかえれば、彼は彼自身の自由のために書いてゐるからであり、また、小説ほどそれを書いている人間の人格、いいかえればその人が、どんな自由を求め、どんな自由に生きてゐるかを端的に示すものはないからであります。だから文学というものを一口に定義づけて、フランスのサルトルは、「文学というものは、人間が自由を求める一つの方法」だといつていますが、正にその通りなのであります。「削除 だからある場合には、ペンをすてて、デモに参加したら、ストライキもしなければならぬということも起るのであります。」

いいかえますと、文学と人間の自由を切りはなしては考えられないのであります。それは、文学をつくるという創造の場であるだけでなく、読むという行為のなかでも起るのであります。このことをわかりやすい例で申し上げたいと思ひます。

## 2 自己の自由についての「削除 意識の」めざめ

最初まず、自己についての「削除 意識」自由についてのめざめから考えてみたいと思ひます。天才の人は、も三才<sup>マ</sup>ぐらいで自己についての自由の意識をもつてゐるようでありますが、私の場合は、鈍才なので、七つぐらい(小学の二年生ごろ)のときしか覚えておりません。そのころ私は、兵庫県の姫路市から一里半―つまり六キロほどはなれた農村に住んでいました。その日、学校から帰つてから、母親のいいつけで、村は同じであります。隣の部落にある親戚の家へ行つたのであります。だが、子供のことで、遊び呆けて夜になつてしまつた。あわてて帰つて来たのであります。私の部落である東坂と、隣の部落である西坂の間に、用水池があるのであります。その土堤をつたつて帰るのが、早道なので、そこをつたつて帰つて来ました。その用水池のあたりは、私た

ちの遊び場所であり、夏は水泳ぎや、菱の実をとつたり、そのあたりに  
は、ぐみの木も多く、またぬすむに恰好な柿の木にも恵れているという、  
私たち子供にとつては恰好な場所であり、夜でも平気でいままで幾度も  
通つてゐるわけです。だが、そのとき、ふと池の面を見ると、月もない  
のに、まるでかなだらいくらいの大きさの金色の眼が一つ、光つていて、  
小牛の鳴くような声が池の底から聞えて来るのであります。

○妙なグロテスクな生物。

みなさんは、必ず、天才の方は、三つぐらいのとき、おそい人は十才  
ぐらいの間にこのような経験をもつていらつしやるわけなのであります。  
しかしこの孤独という形でやつて来る意識のめざめは、本人にとつ  
て恐ろしいものであり、気味のわるいものでありますから、すぐ忘れよ  
うとし、だからまた忘れてしまつておられる方も多いと思うのでありま  
す。そして私たちの自己についての意識が、世界からの孤独として意識  
されるところに、いいかえれば、世界からの自由であります。私たち  
の根本的な意識の不幸があると申し上げられます。

「削除 ○人々と共にある自由として 孤独からの自由

「何から救い、何から救われるのか」ということによつて自由の性質が  
ちがつて来る。したがつて、その自由に根拠をおく人生観や世界観など  
もわかるのであります。

ここでわかりやすい例をとつて、みなさん方と一緒に考えてみたいと思  
います。

ここに一つの小説があります。筋はありふれたもので、ある日、男と  
女が出会つて愛し合うようになる。むろん出会わなければ話になりませ  
んが。しかし女の方は次第にその男に不満を感じて来る。何故なら男の  
方は、家庭的な事情や経済的な問題もあつて、「削除 なかなか結婚しよ

とはしない」結婚できる状態ではなかつたからです。そのうちに、女は、  
その男に全くつめたくなつてしまつて、ふいに他の男と結婚してしまふ。  
そして今晚が、その女の結婚式のある晩でなのです。男は、自分はどん  
なにその女を愛していたかを思い、その女を失つては、もう生きていけ  
ない気がしている。そして彼は、自分に絶望し、この世に絶望しながら、  
縁側に腰を下している。といった小説があります。また、これに似た小  
説は、ことに週刊誌や中間小説といわれている作品に多く、みなさん方  
もしばしば出会つて来ておられると思います。

さて、この男の人の絶望について考えて見ましょう。女の人が、彼の  
ところへ戻つて来さえすれば、できるなら結婚式をあげないで、式場か  
ら逃げ出して自分のところへ戻つて来さえすれば、彼の絶望は救われる  
でありましょう。だがこの場合、そんなことが望めないから彼は絶望  
していらつしやるわけなのであります。この場合、みなさん方は、どう  
いうふうな、この彼の絶望をお救いになるか。「削除 その救い方によつて、  
みなさんの持つていらつしやる自由の性質が、したがつて、その自由を根拠とする  
ところの人生観や世界観がわかるわけなのであります。」

この小説の場合、たしかに彼の絶望は、死ぬよりほかに解決はないよ  
うに見える。しかし死ぬということ、ほんとは問題を解決するのでは  
なく、問題を消し去るだけである。一タス一はいくらだと黒板に書いた  
問題を、黒板拭きで、消し去ることはできますが、一タス一は、いくら  
だという問題の解決にならないのと同じであります。つまりその男にと  
つて、生きていても、何の解決もないし、といつても死んでも解決にな  
らないという事実のなかにおかれてゐるといふわけなのであります。全  
く新聞などの「人生案内」や「身の上相談」などの諸先生などでしたら、  
その救い方は、大体二つに大別できるようであります。個人的な主観的

な救い方と、全体的な客観的な救い方の二つに大別できるようでありま  
す。つまり、「あきらめて、新しく出発しなさい」というように、個人  
の主観にその救いをもつて来るやり方と、また、「女つて、あの女ひと  
りだけじゃない。あなたの好きになる女の方がまた必ずあらわれるでし  
よう」という救い方。私も十八才ごろ最初の失恋をしました。あの神戸  
と姫路との間を走つてゐる電車の車掌をしてゐるときであります。相手  
の女の人が、結婚してしまつたのです。といつても、相手の女の人には  
何の責任もなかつたので、つまり私が彼女が好きなのだということを知  
らなかつたのであります。それにもかかわらず彼女をうらみ、世のな  
かをうらんで、会社へ行く気がせず、下宿の二階で蒲団をかぶつて寝て  
いました。そのころ私と非常に親しくしていた仲間の架線屋が、その私  
の事情を知つていて見舞いに来たのであります。その男は、現在の「人  
生案内」の諸先生より決定的な救い方をした。つまり彼は、こういつた  
のであります。

「あの女ひとりに振られたといつたつて、地球上の女全部にふられたわ  
けじゃないんだ。人類二十三億のうち、少なくとも十一億五千万は女な  
んだ。三人や五人じゃない、十一億五千万なんだぞ。一体どうするんだ  
い、十一億五千万も、お前は」

というのであります。当時は、人類は二十三億だといわれていたのであ  
りますが、しかし私の方は、十一億五千万、十一億五千万と聞いている  
うちに、だんだん妙な気持になつて来て、自分の失恋などひどくつまら  
なくなつて来て、一緒に酒を飲みに行つた、という経験をもちつていま  
す。このふうな、全体的なもの、客観的な面をもつて来ての救い方が、「あ  
きらめや決断」というような主観的な救い方に対してあるようでありま  
す。前の「あきらめや決断」の場合は、個人というものを重く見、個人

「削除 の心に」を絶対「削除 性をあたえるやり」と考える考え方でありま  
す。個人の心が、いわば自由なのであり、だからまた、神なのであつて、  
だから最後に救うのは、個人の心なのだといふ個人主義的な世界観につ  
ながつて行きます。後の、女全体、あるいは地球全体というような場合  
は、申すまでもなく、この世における全体的なものを絶対「削除 性をあ  
たえる生き」と考える考え方であり、そのかぎりでは、個人が消え去つて、  
全体がいつも神であり、だから全体が救いであるといふ全体主義的な、  
あるいは客観主義的な傾向をもつところの世界観につながつてまいりま  
す。戦争中滅私奉公という言葉がありました。私をほろぼして公に奉  
ずるといふことが、ほんとうの日本人の生き方だといわれていました。が、  
このような考え方も、全体主義的であつたといふことはいつでもあり  
ません。しかしよく考えて見ますと、人間の自由や、だからその自由を  
救いとするところのものは、個人的なものと全体的なものとのほかに  
ないように思われるのであります。

それでは、女に裏切られた男の小説に戻りましょう。その小説では、  
その男の絶望を、どんなふうにかつてゐるのでありましょうか。一見そ  
の小説は、その男を救つていないように見える。文学用語をつかいます  
と、その男の絶望を突放しているように見える。つまりその男は、「死  
のうと思つて縁側に腰を下していた」で終つてゐるからであります。だ  
が、それだけで終るといふことに、作者自身が不安を感じる。このへん  
が、小説をつくる側の精神といふものについての面白さがあるのであり  
ますが、それはとにかく、その作者は、どうしても、「死のうと思つて  
縁側に腰を下していた」の次に、次の一行を加えてゐるのであります。「そ  
のときふと庭の隅へ眼をやると、ゆたかな房のアジサイの花が、大きく  
咲いてゐた」と書いてゐるのであります。そしてたしかに、このアジサ

# 石川淳／椎名麟三 主な収蔵資料一覧

イの花が、あたかも彼の絶望をすくつたように感じられて、読者の私たちも美的な感動を感じる、というような仕掛になつていたのであります。（しかしこのアジサイそのものには特別な意味はない。汽車の汽笛の音でも雨が降つて来たでもいい）

さて、このような救い方は、何を意味するかは、申し上げるまでもないと思います。この場合も明らかに、全体的なものを絶対とするところの救い方であり、この小説の場合は、その全体的なものとは、アジサイによつて象徴されるところの自然なのだというだけあります。つまり自然が自由であり、自然が神であり、だから自然が救いとなるところのものとして、作者は、それに生きていくということがいえるであります。文学に、自然主義的文学という名で論ぜられているものは、多かれ少かれ、このような自然というものを絶対と考えるところの、人生観や世界観に関係をもつていいといつていいであります。「削除（し

たがって、自然を絶対と考えるかぎりにおいて、その人生観や世界観は、運命論的であり決定論的であると申し上げられましょう。日本人の場合には、この自然主義的な傾向がよいといつていいと思います。ここで、先ずいままで申し上げたことを要約しますと、まず第一に、ほんとうの救いを求める声が、イギリスやフランスからも聞えて来るといふこと、第二は、私たちが日常口にして自由というもの、救いの意味をもつていくといふこと、第三は、その自由は大別すると個人的な主観的なものと全体的な客観的なものに別けられるといふこととあります。』

○この分裂しているといふところに明日お話ししようと思つて現在の「削除 ニヒリズム」困難があるのであります。

\*たねの会 椎名麟三主宰のプロテスタント文芸集団。佐治純一郎、高堂要らが参加  
\*ピユートルの「心変り」→倉橋由美子 倉橋由美子の「暗い旅」(1961年)に対し、江藤淳がミシェル・ピユートルの「心変わり」の模倣であると主張したことから模造品論争へと発展した

# 主な石川淳・自筆資料一覧

太字は本誌掲載資料

資料番号	資料名	備考・書き出し等	素材	〔鑑査者〕(☆はすべて石川真樹氏)
〔原稿・草稿〕				
121562	石川淳原稿 「諸国崎人伝」		4000字 詰原稿用紙322枚 ペン、鉛筆書	☆
129051	石川淳原稿 「夷齋清言」		4000字 詰原稿用紙307枚 ペン書	☆
129052	石川淳原稿 「華嚴」	連載6回分及び未掲載1回分他	4000字 詰原稿用紙202枚 ペン書	☆
129053	石川淳原稿 「夷齋傳言」		4000字 詰原稿用紙438枚 ペン書 刊行物への手入れ5枚	☆
129054	石川淳原稿 「片しぐれ」		4000字 詰原稿用紙46枚 ペン書	☆
129055	石川淳原稿 「鳳凰」		4000字 詰原稿用紙26枚 ペン書	☆
129056	石川淳原稿 「野守鏡」		4000字 詰原稿用紙94枚 ペン書	☆
129057	石川淳原稿 「影ふたつ」		4000字 詰原稿用紙38枚 ペン書	☆
129058	石川淳原稿 「夜は夜もすがら」		4000字 詰原稿用紙36枚 ペン書	☆
129059	石川淳原稿 「南枝向日」		4000字 詰原稿用紙50枚 ペン書	☆
129060	石川淳原稿 「瀧のうぐいす」		4000字 詰原稿用紙20枚 ペン書	☆
129061	石川淳原稿 「おとしばなし和唐内」		4000字 詰原稿用紙23枚 ペン書	☆
129062	石川淳原稿 「篠松」		4000字 詰原稿用紙44枚 ペン書	☆
129063	石川淳原稿 「妖女」		4000字 詰原稿用紙52枚 ペン書	☆
129064	石川淳原稿 「曇」		4000字 詰原稿用紙28枚 ペン書	☆
129065	石川淳原稿 「望楼」		4000字 詰原稿用紙20枚 ペン書	☆
129067	石川淳原稿 「演技」		4000字 詰原稿用紙22枚 ペン書	☆
129068	石川淳原稿 「さらば垣」		4000字 詰原稿用紙21枚 ペン書	☆
129069	石川淳原稿 「常陸帯」		4000字 詰原稿用紙25枚 ペン書	☆
129070	石川淳原稿 「木の松山」(部分)		4000字 詰原稿用紙29枚 ペン書	☆
129071	石川淳原稿 「ファルス」(部分)		4000字 詰原稿用紙19枚 ペン書	☆
129072	石川淳原稿 「合縁奇縁」		4000字 詰原稿用紙85枚 ペン書	☆
129073	石川淳原稿 「春の葬式」		4000字 詰原稿用紙30枚 ペン書	☆
129074	石川淳原稿 「他人の自由」		4000字 詰原稿用紙57枚 ペン書	☆
129075	石川淳原稿 「蜘蛛」		4000字 詰原稿用紙30枚 ペン書	☆
129076	石川淳原稿 「鷹」		4000字 詰原稿用紙104枚 ペン書	☆
129077	石川淳原稿 「鳴神」	〔鳴神〕収録	4000字 詰原稿用紙100枚 ペン書	☆
129078	石川淳原稿 「前身」		4000字 詰原稿用紙15枚 ペン書	☆
129079	石川淳原稿 「大蔵の餅」		4000字 詰原稿用紙15枚 ペン書	☆
129080	石川淳原稿 「狼」		4000字 詰原稿用紙32枚 ペン書	☆
129081	石川淳原稿 「犯人」		4000字 詰原稿用紙21枚 ペン書	☆
129082	石川淳原稿 「落花」		4000字 詰原稿用紙166枚 ペン書	☆
129083	石川淳原稿 「しぐれ歌仙」(第1回)		4000字 詰原稿用紙17枚 ペン書	☆
129084	石川淳原稿 「しぐれ歌仙」(第2回)〔未発表〕		4000字 詰原稿用紙178枚 ペン書	☆
129085	石川淳原稿 「おまへの敵はおまへだ」(戯曲)			☆
129086	石川淳原稿 「森鷗外集解説」		4000字 詰原稿用紙15枚 ペン書	☆
129087	石川淳原稿 「ゆう女始末」		4000字 詰原稿用紙47枚 ペン書	☆
129088	石川淳原稿 「世界は金色」		4000字 詰原稿用紙4枚 ペン書	☆
129089	石川淳原稿 「双璧」		4000字 詰原稿用紙4枚 ペン書	☆
129090	石川淳原稿 「この顔を見よ」		4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129091	石川淳原稿 「詩的回想断片」		4000字 詰原稿用紙6枚 ペン書	☆
129092	石川淳原稿 「安部君の車」		4000字 詰原稿用紙4枚 ペン書	☆
129093	石川淳原稿 「飛花譜」		4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129094	石川淳原稿 「作用して来るもの」		4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129095	石川淳原稿 「私見」	第62回芥川賞選評	4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129096	石川淳原稿 「二本の杭」	第63回芥川賞選評	4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129097	石川淳原稿 「「つえらぶとすれば……」	第64回芥川賞選評	4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129098	石川淳原稿 「「コスモスの夢」	第65回芥川賞選評	4000字 詰原稿用紙6枚 ペン書	☆
129099	石川淳原稿 「関谷学校」		4000字 詰原稿用紙6枚 ペン書	☆
129100	石川淳原稿 「回想断片」		4000字 詰原稿用紙3枚 ペン書	☆
129101	石川淳原稿 「安東次男著作集に寄す」		4000字 詰原稿用紙1枚 ペン書	☆
129102	石川淳原稿 「色道大鐘に寄す」		4000字 詰原稿用紙4枚 ペン書	☆
129103	石川淳原稿 「忍人」		4000字 詰原稿用紙1枚 ペン書	☆
129104	石川淳原稿 「選評寸言」	第1回大佛次郎賞選評	4000字 詰原稿用紙1枚 ペン書	☆
129105	石川淳原稿 「丸谷才一著「食通知つたかぶり」序」		4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129106	石川淳原稿 「三古舎の著述に寄す」		4000字 詰原稿用紙1枚 ペン書	☆
129107	石川淳原稿 「辻嘉一著「味覚三昧」序」		4000字 詰原稿用紙10枚 ペン書	☆
129108	石川淳原稿 「樺」		4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129109	石川淳原稿 「花たちはな」		4000字 詰原稿用紙6枚 ペン書	☆
129110	石川淳原稿 「コント・クリュエルについて」		4000字 詰原稿用紙5枚 ペン書	☆
129111	石川淳原稿 「来迎仏」		4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129112	石川淳原稿 「佐藤亜土版畫集」		4000字 詰原稿用紙10枚 ペン書	☆
129113	石川淳原稿 「洒落本大成に寄す」		4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129114	石川淳原稿 「滋澤龍彦著作集に寄す」		4000字 詰原稿用紙2枚 ペン書	☆
129115	石川淳原稿 「武満徹断片」		4000字 詰原稿用紙5枚 ペン書	☆



129116	石川淳原稿	「六道遊行（第15回）」	400字詰原稿用紙23枚	ペン書	☆
129117	石川淳原稿	「六道遊行（第16回）」	400字詰原稿用紙23枚	ペン書	☆
129118	石川淳原稿	「六道遊行（第17回）」	400字詰原稿用紙23枚	ペン書	☆
129119	石川淳原稿	「六道遊行（第18回）」	400字詰原稿用紙23枚	ペン書	☆
129120	石川淳原稿	「六道遊行（第19回）」	400字詰原稿用紙24枚	ペン書	☆
129121	石川淳原稿	「六道遊行（第20回）」	400字詰原稿用紙19枚	ペン書	☆
<b>【日記・旅行記等】</b>					
129123	石川淳日記	昭和25年1月1日 昭和26年12月31日	ノート60枚綴り（自筆部分91面）	ペン書	☆
129124	石川淳日記	昭和27年1月1日 12月31日	ノート50枚綴り（自筆部分54面）	ペン書	☆
129125	石川淳日記	昭和28年1月1日 12月31日	ノート50枚綴り（自筆部分45面）	ペン書	☆
129126	石川淳日記	昭和29年1月1日 8月25日	ノート50枚綴り（自筆部分7面）	ペン書	☆
129127	石川淳旅行メモ	昭和53年5月15日 6月3日	ノート40枚綴り（自筆部分23面）	ボールペン、ペン書	☆
<b>【書簡】</b>					
121586	石川淳	筑摩書房あてはがき 昭和34年7月25日	官製はがき	ペン書	石井耕氏 石井牧氏 平賀美穂氏
<b>【創作メモほか】</b>					
129128	石川淳創作メモ	「南画大體」	400字詰原稿用紙4枚	メモ用紙5枚 鉛筆書	☆
129129	石川淳	荻生徂徠関連メモ	学研美術出版部用箋3枚	鉛筆書	☆
129130	石川淳	「白猿」メモ	用紙2枚	ペン書	☆
129131	石川淳	抜き書き 1	文芸春秋特選便箋半切	ペン書	☆
129133	石川淳	近世絵画関連メモ 1	便箋10枚	ペン書	☆
129134	石川淳	近世絵画関連メモ 2	便箋19枚	ペン書 鉛筆書	☆
129135	石川淳	近世絵画関連メモ 3 英文抜き書メモ	便箋46枚	ボールペン、鉛筆、ペン書	☆
129136	石川淳	「夷奮遊戯」寄贈先リスト	400字原稿用紙1枚	ペン書	☆
129137	石川淳旧蔵	加藤周一住所メモ	便箋1枚	タイプ	ペン書 ☆

※資料番号129124・129125・129126については、本誌次号に翻刻を掲載予定。

## 主な椎名麟三・自筆資料一覧

「」は作品名、「|」は推定される作品名。作品名のわからない草稿は無題とし、その後に書き出し部分を「」で記載した。  
用紙裏面が別作品の草稿の場合もあり。判読不明文字には「\*」を使用した。太字は本誌掲載資料

資料番号	資料名	備考・推定作品・書き出し等	素材	寄贈者（★はすべて坪野氏）	
<b>【原稿・草稿】</b>					
23985	椎名麟三原稿	「戦争ノイローゼ」	200字詰原稿用紙4枚	鉛筆書	★
51402	椎名麟三原稿	「美しい女（冒頭部分）」	200字詰原稿用紙2枚	鉛筆書	★
123960	椎名麟三草稿	「境界線上の恋」	ノート紙14枚	ペン、鉛筆書	★
123961	椎名麟三草稿	「みぞれ降る夜に」	ノート紙12枚	鉛筆書	★
123962	椎名麟三草稿	「初期のこれの作品に「買するものは」	ノート紙3枚	赤鉛筆、鉛筆書	★
123963	椎名麟三草稿	「塵灰の中」 第1話	ノート紙2枚	鉛筆書	★
123964	椎名麟三草稿	「*の告白」	ノート紙2枚	鉛筆、ペン書	★
123965	椎名麟三草稿	「解体する目」	ノート紙1枚	鉛筆書	★
123966	椎名麟三草稿	「平和について」	ノート紙1枚	鉛筆書	★
123967	椎名麟三草稿	「黄昏の廃墟」	ノート紙26枚	ペン、鉛筆書	★
123968	椎名麟三草稿	「虚無への」	ノート紙6枚	ペン、鉛筆書	★
123969	椎名麟三草稿	「情熱」	ノート紙2枚	鉛筆書	★
123970	椎名麟三草稿	「季節外れの告白」	ノート紙8枚	ペン、鉛筆書	★
123971	椎名麟三草稿	「世界へ」	ノート紙1枚	ペン、鉛筆書	★
123972	椎名麟三草稿	「人間」	ノート紙2枚	鉛筆書	★
123973	椎名麟三草稿	「戦後文学の意味」	レポート用紙1枚	鉛筆書	★
123974	椎名麟三草稿	「墓地でなしたる演説」	レポート用紙2枚	ペン、鉛筆書	★
123975	椎名麟三草稿	「映画についての随想」	レポート用紙10枚	鉛筆書	★
123976	椎名麟三草稿	「永遠なる序章」	ノート紙4枚	ペン、鉛筆書	★
123977	椎名麟三草稿	「壁のなかの記録」	ノート紙2枚	ペン、鉛筆書	★
123978	椎名麟三草稿	「壁のなかの記録」	ノート紙2枚	ペン、鉛筆書	★
123979	椎名麟三草稿	「現代の絶望」	ノート紙1枚	鉛筆書	★
123980	椎名麟三草稿	「夜の家」	ノート紙4枚	ペン、鉛筆書	★
123981	椎名麟三草稿	「壁のなかの記録」	ノート紙4枚	ペン、鉛筆書	★
123982	椎名麟三草稿	「猫の生活力」	ノート紙1枚	ペン、鉛筆書	★
123983	椎名麟三草稿	「ソッタルについて」	ノート紙1枚	鉛筆書	★
123984	椎名麟三草稿	「死と愛」	ノート紙2枚	ペン、鉛筆書	★
123985	椎名麟三草稿	「保備の鎮」	ノート紙1枚	赤サインペン、鉛筆書	★
123986	椎名麟三草稿	「地についてなぐも」	ノート紙3枚	サインペン、鉛筆書	★



124058	椎名麟三草稿 無題「どのやうに歓喜に…」			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124119	椎名麟三草稿 「ある大学生の手記」			ノート紙4枚 鉛筆書	★
【創作メモ・講演メモほか】					
123993	椎名麟三創作メモ 「深尾止治の手記」			ノート紙2枚 鉛筆書	★
124116	椎名麟三創作メモ 「帰郷」			ノート紙2枚 鉛筆書	★
124117	椎名麟三創作メモ 「霧の憂愁」の諸注意 表現の粗雑			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124118	椎名麟三創作メモ 「季節外れの告白」			ノート紙4枚 鉛筆書	★
124120	椎名麟三創作メモ 「地にてつなぐもの」			ノート紙1枚 鉛筆・ペン書	★
124121	椎名麟三創作メモ 「可愛い、女」	「真実」		ノート紙1枚 鉛筆書	★
124122	椎名麟三創作メモ 「自由」			ノート紙2枚 鉛筆書	★
124123	椎名麟三創作メモ 「小市民」			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124124	椎名麟三創作メモ 「覚書」			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124125	椎名麟三創作メモ 「繰り返し」	「歳末」		ノート紙1枚 鉛筆書	★
124126	椎名麟三創作メモ 「公許権消滅」			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124127	椎名麟三創作メモ 「現代文学の動向というより状況判断」			ノート紙2枚 赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書	★
124128	椎名麟三創作メモ 「脚本「愛と死の谷間」			ノート紙4枚 赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書	★
124129	椎名麟三創作メモ 「銀座の真中へ行って助けてくれ」といいたい」	「愛と死の谷間」		ノート紙2枚 赤鉛筆・鉛筆書	★
124130	椎名麟三創作メモ 「脚本「愛の戦慄」	「愛と死の谷間」		ノート紙1枚 鉛筆書	★
124131	椎名麟三創作メモ 「罪なき罪」			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124132	椎名麟三創作メモ 「神の道化師」			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124133	椎名麟三創作メモ 「思い出をたずねて」			200字詰原稿用紙1枚 鉛筆書	★
124134	椎名麟三創作メモ 「人生案内や身の上相談」			ノート紙2枚 ペン書	★
124135	椎名麟三創作メモ 1			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124136	椎名麟三創作メモ 2			ノート紙1枚 ペン書	★
124137	椎名麟三創作メモ 3			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124138	椎名麟三創作メモ 4			ノート紙1枚 ペン書	★
124139	椎名麟三創作メモ 5			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124140	椎名麟三創作メモ 6			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124141	椎名麟三創作メモ 7			ノート紙2枚 鉛筆書	★
124142	椎名麟三創作メモ 8			ノート紙4枚 鉛筆書	★
124143	椎名麟三創作メモ 9			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124144	椎名麟三創作メモ 10			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124145	椎名麟三講演メモ 「戦後文学の意味」			ノート紙1枚 鉛筆書	★
124146	椎名麟三講演メモ 「文学する心」			ノート紙5枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124147	椎名麟三講演メモ 「自由と倫理（第一回）」			ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124148	椎名麟三講演メモ 「人間の自由について」			ノート紙6枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124149	椎名麟三講演メモ 「小説の技術について」			ノート紙10枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124150	椎名麟三講演メモ 「文学の視点」			ノート紙7枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124151	椎名麟三講演メモ 「作家と生活」			ノート紙6枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124152	椎名麟三講演メモ 「自由と共存」			ノート紙9枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124153	椎名麟三講演メモ 1	今日「人間について」といふテーマで… 今日お話ししようとする命題は、一応… 宗教というものと、文学というものは… 「生きるということ」とは「愛するということだ」… ○これから考えて見ますと、人間の「ほんとうの…」 ○希望と自由の関係 私は、ドストエフスキイ… ○しかし私は、小さいときから自分を… ドストエフスキイにならつていうならば… 神奈川労働学校 私の今日のお話の… 1. 日本文学の現状 私は一去年は… そして小説入門書などを読みあさつて… 1. 孤独について 私は医学的方面から… それらの孤独には、理由というものが… 遠藤周作さんは、「宗教と文学」という… ところが、その自殺は、滑稽なこととなり… 要約しますと、人間の自由は、客観的な… 刑務所の裏門から放り出されてからは… 1. 信仰と文学 私は、この前に一度… 女子学院、私は、たださえ、話が下手ですが… それでは、ジミーという男は、どんな男が… さて「戦後」「深夜の酒宴」を発表したのを… 私は、あのイギリスのオズボーンの訴えを… の復活の箇所を読んでいたときに… NHK高知放送局 私は、今日、坂本竜馬の… サマセットホーム 文学の方法に大別して… たないのだ」と結論が形づくられて…	岩波書店用箋5枚 鉛筆書	★	
124154	椎名麟三講演メモ 2			400字詰原稿用紙半分（裏面使用）1枚 鉛筆書	★
124155	椎名麟三講演メモ 3			ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124156	椎名麟三講演メモ 4			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124157	椎名麟三講演メモ 5			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124158	椎名麟三講演メモ 6			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124159	椎名麟三講演メモ 7			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124160	椎名麟三講演メモ 8			ノート紙2枚半 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124161	椎名麟三講演メモ 9			ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124162	椎名麟三講演メモ 10			ノート紙7枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124163	椎名麟三講演メモ			ノート紙5枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124164	椎名麟三講演メモ			ノート紙5枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124165	椎名麟三講演メモ			ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124166	椎名麟三講演メモ			ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124167	椎名麟三講演メモ			ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124168	椎名麟三講演メモ			ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124169	椎名麟三講演メモ			ノート紙5枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124170	椎名麟三講演メモ			ノート紙5枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124171	椎名麟三講演メモ			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124172	椎名麟三講演メモ			ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124173	椎名麟三講演メモ			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆書	★
124174	椎名麟三講演メモ			ノート紙4枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124175	椎名麟三講演メモ			ノート紙2枚 鉛筆書	★
124176	椎名麟三講演メモ			ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124177	椎名麟三講演メモ			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
124178	椎名麟三講演メモ			ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書	★
125360	椎名麟三 署名入りノート表紙一式			紙（ノート表紙）6枚	★

## 謝辞

本誌刊行にあたり、格別のご協力を賜りました関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

協力（敬称略・50音順）

安部賢治

池澤一郎

石川眞樹

大坪真美子

## 世田谷文学館 収蔵資料〈調査と探究〉01 石川淳／椎名麟三〔上巻〕

監修 紅野謙介  
翻刻・編集 小池智子 瀬川ゆき 竹田由美 中垣理子 原辰吉  
資料撮影 須藤正男  
デザイン 溝端貢 (ikaruga.)  
印刷 共同製本株式会社

発行日 2024年2月27日  
編集・発行 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館  
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10  
Tel.03-5374-9111  
<https://www.setbun.or.jp>

\*著作権等については極力調査いたしましたが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。

©2024 Setagaya Literary Museum